



(百八) 天正元年三河作手筑手の城主奥平監物貞勝入道々文其子美作守貞能孫九八郎信昌皆勇
 氣たくましき人にて有し近ごろ道文は武田家に心よせ勝頼の士大將耳利と作手の本丸よか
 き奥平父子は外郭にあり信昌信玄の死したる事とかくせるを悟り居し處に 東照宮より本多豊
 後守廣孝を以て降の事をす、め給ふ信昌父と大父とにす、めて密約をなす武田家奥平に人質
 出せよと下知せらる貞能いかにもすべき謀なくして庶子千九十三歳小なりけると黒屋甚九郎
 をとへて出せけり 東照宮を不意に襲打べし謀を家臣を以て告奉る武田にも是とあやしみ土屋
 右衛門直村黒瀬に在けるが使を以て貞能を呼よせ勝頼の檢使城所道壽も出向ひ二心ある由聞ゆ
 る處はとくも來られけるよ神妙にこそと詞をかくる貞能り、る時には父子の間も疑思ふ事世の
 ならひなり然共愛子よて候千丸を人じちに出し候へば何の子細の有べきやと駭くいろなければ
 いざ甚とうたんといふ貞能心しづかき甚とうち終り暇乞して門外に出るを道壽又よびもどし湯
 漬飯を出す貞能これを食べするひまに道壽士を門外に出し待居たる貞能が士に向ひて主人叛逆あ
 らわれ唯今討れし由をいはせけれども奥平六兵衛うちわらひて更に駭くいろなしこれに貞能素
 より武田方めていかなる事をいふとも吾首と見ざる中、驚く事なかれと固くいひふくめし故な
 りけりかくたばかりすまして貞能馳歸り其夜一族打具して退散し岩崎に赴ければ松平主殿助伊
 忠本多豊後守廣孝等 東照宮の仰を奉り出迎ひて瀧山に引とりけり

(百九) 天正二年四月 東照宮天野宮内左衛門景貫が大井の城を攻させ給ふ時霖雨ふて兵糧運
 送の便よからず三倉の砦にひきこらせ給ふ處を天野討て出つけしたふ高山光明の城々よりも出
 めひ田野大窪の郷民も相加はりこ、かしてこより鉄炮をうちかけ聲をわけて攻かける後度の人々
 わまた討れしをしらしめさす 東照宮三倉にて開し召引返させたまへばはや敵引どりたり玉井
 善太郎後殿しけるが股と鉄炮にてうたせ御おとをしたひて三倉にまわりければ手籠たるかあど
 よ鉄炮の音をしをわやしく思ひし軍有けるよ此馬よのれど仰られ御馬よりありさせ給ひけり
 人々君の士をいたはらせ給ふに感せざる者あり大久保七郎右衛門忠世が同心杉浦久藏 一説物
 久勝よ 深手おひたりしに七郎右衛門馬より飛かり是に乗で引しりぞけといふ久藏うつけたる馬
 の下り所かなわが如き者はいか斗討れたり共何事あらん大將たる人の馬ばなれする物かは八
 幡も照覽めれ乗まじいといへ七郎右衛門禮儀も所によるぞとへくといへば久藏われ此馬に
 乗て生大將をすて殺してはいか、せんとして處ざれば七郎右衛門いな、らば馬をすのるよといひ
 すて、ひかんとする處に小玉甚内一説石 馳來り七郎右衛門は早のきたるぞといひて久藏をひき
 たて馬に打のせやがて七郎右衛門に走りつきたり七郎右衛門には兵藤彌助と夫わかといふ小者
 と三人打つて細道の邊を引退し處に跡より追來る者七郎右衛門をつきたとす二人もつゝいて
 鬮射る所は夫わかあげ羽の標のさし物を持つたるを投げびたるを敵見まされを知らんとする所を

彌物走りか、りかなぐりさらんとすれを敵彌物と一刀切たりけるに七郎右衛門とつて返して赤
 三人討取たり 東照宮剛將の下に騎兵なしと忠世を御賞美ありけり
 (百十) 東照宮と武田の兵と大天龍にての 戦に近藤傳次郎手れひて渡邊半藏守綱を見かけ手
 おひたるぞつれて退よといふ心得たりとて手に提げたる首を投ずて、傳次郎と肩よかけ三里の
 まり引退てたすければ 東照宮聞召味方一騎討るれば敵千騎の強みといふ事あり味方をたすけ
 たるは七度の鎗を合せたるよりもまされり今より後鎗半藏といふべしと仰わり後に半藏人にか
 たりていはく傳次郎をわれなればこそたすけたれ何としてのけおほすべきか、る時は大かたた
 すくる体にもてなし刺殺して棄らるべし味方なればとて頼みよはならぬものよといひしなり
 又一説永祿五年九月參河の八幡にて今川氏實と三河の軍戦ありて利わらず二手にわかれて引
 退敵急に追かくる半藏守綱石川新九郎返し合せ二度鎗と合す後には半藏一人十度に及て小返
 しまて又三度鎗を合す矢田作十郎足といたみ引かねたるを半藏肩にひきかけて退けりこれよ
 り鎗半藏と人はいはれしといへり半藏弟と半十郎政綱といふ後新五左衛門といふ味方原の
 軍は草鞋の緒のとけたるを下に居て結びけるを半藏いろげとも心じつかにむすびて引とれり
 兄の半藏聞ゆる剛の者なるが半十郎がおとさしおとさ者はついに見ずと常に語りけること
 (百十一) 天正二年北條氏政三萬の兵ともて佐野政綱をかこまる、と聞て謙信八千計の兵をひ

きお後詰せられけり城危しと聞へければ謙信後巻へわれにおこらぬ士大將あまたあれば心やす
 し佐野の城こそおぼつかなければ先われの城よかけ入で力をそへなんとて物の具も着す黒き木綿
 の胴服をうちかぶり十文字の鎗を横たへ儘に十三騎ひき具し氏政の陣の前と馬を静にあゆませ
 佐野の城に入たるを氏政の軍兵見て夜叉羅刹とは是なるべしとて恐れて近づく者もなし氏政圍
 をといて引退くを謙信やがて門をひらかせしたへとも氏政一軍もせで引しりぞきけり
 (百十二) 天正二年勝頼高天神の城を圍んと師を出す小笠原與八郎長忠軍の目付大河内源三郎
 政房と相續して防ぎけり 東照宮後詰と信長にこいせ給ふ勝頼城の巽の嶺に陣し大文字の旗を
 中村の内公文といふ所より立る後まで其地と大旗と稱す兵糧竭士卒疲るれば後巻と待かね姉川の
 戦功を捨て給ふと怒て七月二日城を出て降参す軍の目付大河内政房は應政公の妾華陽院の甥
 なり勝頼に降らざりしかば小笠原生とて石の半に入置たり勝頼降らば本領に倍えてあて行ふ
 べしと説せけれども 志を變せず勝頼怒て半の口と鎖す政房ことしより高天神落城に及ぶまで
 八年の間半中より甲斐の士横田甚五郎高天神に来て在番せしが大河内が節義と深く感じ殊よ
 ねんおろにいたはりたりかくて 東照宮高天神と攻させ給ひて天正九年三月廿二日の夜城は守
 將岡部丹後實幸横田甚五郎尹藤相木市兵衛昌朝己下切て出陣部は討死し横田相木ハ切ぬけて甲
 府に落行けり城落ければ石川伯耆守敷正城入て政房を擁し出す半中に年久しく有て足掻けれ

辰ちしつたのせいで東照宮の御旗を因りて石の塔有り難厄ひよりのよきとて御涙を流され
御手づから刃脇差黄金をあるとて、（百十二） 天正三年勝頼與平九八郎信昌が三州長篠の城をかこみ攻る 東照宮援兵を織田家に
敵のどりあとなる事の小笠原が不義にして武田に降参せし故なれば何方にぬかれ出べきや志
は比類有まじき事なれば生とりを成ぬる事なるか、くほまれとなりたりと口々にいひけるが猶
も其心に憤りけん剃髪して肯空と稱せしが仰によりて尾張の津島の湯に浴し足の痠も愈けれ
を遠州神原の地を賜りしが長久手の戦に討死しけること

（百十二） 天正三年勝頼與平九八郎信昌が三州長篠の城をかこみ攻る 東照宮援兵を織田家に
こはせ給ひ後巻の謀をめぐらま給ふ處に城中糶米既に盡んとせしかば此旨を告奉らん爲鳥居強
右衛門勝商に命じて密に城を出す鳥居のがれ出る事を得、向のかんほうが嶺、烟をあぐべし三
日過て又かの山に烟と兩度あげば後巻をしどしり給ふべし三度わけなば後巻ある事をしり給へ
と約しければ信昌鈴木金七郎と鳥居にそへて五月十四日の夜城の西なる山の岩根とつたひ川に
入奇手素より大野川瀧川の氷底に繩を張てなる子をかけたれば通るべきやうもなし二人水練の
達者にて川の淺瀬はよくしうつ小脇指を袖て川底を潜り繩を切て通りしかばからくとなりけ
るを番の兵もあやしみける、其中に一人五月雨にかゝる川をは鱈の通るならんといひけれ
るさしてやみの二人は早瀬乃下廣瀬といふ處に上りかんほうが嶺にて烟をあげ十五日に岡崎に参

てむりし人れ由を申處に信長其日岡崎に若陣せらる鳥居の信昌尙心もとなくを候らんじのひ得
て城に入事と得は早後巻候べき事、密に申さんとて引返す鈴木信昌が父美作守貞能に告べし
と鳥居に云れけり鳥居かんほうが嶺より相圖の煙三度あげて後篠原といふ所にゆき忍入はや
とするに棚重とにふりて砂をまき出入の人の足あとを改めしかば中々入べき様なくためらひ
けるを穴山の手の者見付てあやしみて遂にからめられけり勝頼道遙軒信綱を以て子細を問る、
は鳥居事の由を有のま、に答へしかば勝頼鳥居を呼て汝がいのちとたすくべし汝城際に往て信
長は上方の軍よて此城の後巻思ひもよらずといは、城兵降参すべしさらば汝に厚く賞せんとい
われしかば鳥居則心得候とて城門近く至り後巻とて信長父子岡島まできのふ旗を出され先陣は
一の宮に陣せり徳川殿御父子野田まで御馬を出されたり此城運を開ん事、掌の内より有といひけ
れば甲州の者ども大に驚き鳥居をひき連て勝頼にかくと申せ、大に怒て城に向て礮よしてころ
されけり長篠にて勝頼敗北して後信長を始め鳥居が無双の忠なる事を感じ作手の甘泉寺に懇
ま葬られけり

（百十四） 勝頼長篠の城と圍攻る事甚はげしめらしに信長 東照宮と共に後巻あり軍評定、時
酒井忠次す、み出今夜わき道より長篠の附城鷓鴣へおしよせ攻破らば勝頼必敗北すべしと申も
めへぬ、信長あゝ笑ひ汝は三河遠江の小せり合には憤つれど大軍の計策はしらざりけりと嘲ら

れしかは忠次いふべき詞無て出ける處も信長 東照宮に叩やき申されけるは左衛門尉が申す處
尤然るべし又呼出されよとて酒井が側近く居より誠にゆ・しくも計りたる哉されども外に泄
聞えんかと思てわざといつりて詭りたりきとく馳向て鳴集を攻破候へといはれまかば忠次承
はりて出んとせざる時又ひきとめ同じくは信長が向ひ度所なりわたら武功を汝に譲りきと申さ
れけり忠次大にいさみて夜半計に思ひもよらぬ所にたしよせて武田兵庫頭信實三枝勘解由和田
兵部を始としてあまた討とり火をかけたる煙を武田の軍兵 顧て大に勇氣袖て終に敗北のもと
成けるとなり此夜討に天野惣次郎は指物とさ・ま戸田半平は道遠し夜あくる事もあらんとて
指物と持やけるが城と焼たる火のひかり白日の如く天野戸田先を争ひけるに戸田が銀の燭燵の
さし物かゝやさわたりて人の目と驚しけり信長後に酒井が功と賞して汝は前に眼有のみにも非
ず後も眼ありといはれまかば忠次 忝 由申てさて終は後を見たる事なく候と申ければ信
長笑て前後の計たがはざる事を賞せんといひ過たりといはれければ忠次其時仰の旨面目有
とて退出したりけり

織田信長平常の舉動を以て見れば唯勇氣一途の人と察せられけるに本章の取斗ひは何等の深
慮ぞ彼れ果して勇氣一途の人とあらざる常は深き謀略の胸にありて存するものなるか青山伯
卿六雄八將論を著はし信長の人と爲りを論じ長篠の役其勢に乗るべくして乗らざる所以のも

のと説て曰く凡そ事目前の快と取りて深く異日の利害を究めざる者は英雄にあらず亂世の雄
唯武是れ極め一城を攻むれば唯抜けるを恐れ一國を伐てば唯取らざるを恐る晝夜争戦必ず
克て而して後み罷む快は則ち快なり然れども此れ豈以て天下を取るも足らんや天下を取る者
は城抜くべしとて必ずしも抜かば國取るべくして必ずしも取らず彼我の勢ひと審にし利害
の源を究む故も天下の争ふ所のもの或は之を争わず而して一旦奮起すれば則ち嚮きの争ひ
ざる所のもの皆我お歸せざるを得ず然して後ち天下抜くべからざるの城なく取るべからざる
の國なし斯れ之を英雄と謂ふ余織田右府の人と爲りて觀るに雄猛殺戮に果す其利害に於ける
深く究むる能はざるものに似たり然れども以て天下を経略する所を觀れば則ち深謀遠慮測り
易からざるものを何以て之を言ふ今夫れ長篠の捷勢に乗りて長驅すれば則ち甲斐滅すべき
なり而るに右府爲さば此時に當て天下の畏る、所の者は謙信にして而して謙信の日夜窺伺ふ
所の者は右府なり而して武田勝頼介りて其間あり謙信宜しく先づ之を滅して以て右府を圖
るべくして之を爲さざるもの蓋し術わり謙信豈も甲斐を取ると欲せざらんや然るに其言に曰
く吾れ其父も争ふて取る能はず其子に及んで之と取る吾れ爲すに忍びざるなりと謙信固より
嘗て義勇の名を負ふ今此言を爲す誰か之を信せざらん即ち勝頼亦必ず傲然として曰く彼れ復
た我れを撃ず我に遠顧の憂なし奈何ぞ織田氏を撃ざらんと此れ其日夜兵を西する所以にして

而して謙信ありて、則ち固より謂ふ彼れ狂くして謀を織田に克つ能はず、織田必ず能く之を滅す而して織田の力亦竭く是れ、兩虎争へば一虎は死して一虎は傷つくの道理なり、然して後ち吾れ宣言す甲斐は吾れ取るに忍びざる所にして彼れ敢て之を取る吾れ武田の爲めに織田を撃んとすれば、則ち甲斐の人孰か之に應せざらん其術蓋し此の如し、謙信信玄と争ふて解けず、故に右府其國を闢くことを得、今や信玄既に死す、謙信乃ち將に右府をして勝頼も争いしめて、而して後之を并呑んとす、此れ英雄國を争ふの術にして、右府之を知る故に甲斐取るべくして、取らざるもの此を以てなり、異日謙信死して然して後、甲斐を滅す此に依て之を觀せば、右府の謀深しと謂ふべくして、其慮遠しと謂ふべし、と信長果して此深謀遠慮ありしか、酒井忠次を取扱ふ所なぞ、以て見れば、或は之れありしやらん、亦知るべからず、然れども評註者は又他も推測する所のものあり、何ぞや、長篠の役、其主戰者は武田と徳川ありて、織田は援兵客戰の者なれば、唯其れ長篠の戦争にさへ勝たば、敢て長驅して甲斐を滅すの勞を取るを要せざるなり、且つ夫れ長驅して甲斐を滅すことあるも、援兵客戰の者にして之を取るの義は、あらざる義は、戰國の顧みざる所なり、と雖も、同盟國の義は守らざるべからず、左りとて己れ勞して他人に其國を奪はる亦快とする所にあらず、徒に徳川の勢力を増して、異日己れの妨害とならざるなきと保し難し、是れ信長が長篠の捷勢ひに乗るべくして、乘らざる所以にして、徳川一手の勢にては、其勢ひに

乗らんとして、乘る能はざる所以なり、然るに異日甲斐を滅したるは、己れ既に覇と爲して、主戰者の地位に易りしを以てなり、尤も始終謙信を顧たること固より、其筈にして、若し嘗て村上義清の依頼ことなかりせば、武田は上信の間に地を擴め、織田は尾濃の間に小せり合をなす間には、謙信は早くも加賀能登越中の北國を切從ひて、突然畿内に出て、永祿年間には既に長尾の旌旗を京師の中央に懸然と靡かしつゝ、も足利に代りて、覇と稱し、近國に號令したること必然の勢ひなり、然るに村上の一顧に因りて、多年信玄と兵と構へ、他を顧慮するに、追なかりければ、此間を以て、信長は其國を擴め、覇を圖ることを得たるなり、信長の天下を取る近畿を經略するの時に、わらずして、桶狭間の役にあり、桶狭間にあらずして、謙信が義清の依頼を諾したるの時に、あり斯の如く、其れ一小事違ふば、天下は既に謙信の有となり、に勢ひなれば、信長の常に之を顧みたるは、固より其所として、謙信死したるが故に、進で甲斐を滅したるものなるべし、と雖も、謙信が彼れが如き深謀ありにしを以て、信長も亦此の如き遠慮ありしか、开は未だ知るべからず、然れども、何に致せ、群雄蜂の如く起り、麻の如く亂れにし世を稍々一統しぬるは、全局の成算、夙に胸中に定まるに、あらざれば、奚ぞ之を能くせんや、思はず、勢ひに乘りて、當時の形勢、信長の人と爲りを論ふて、文の長きと致す乞ふ、讀者諸君と諒せよ

(百十五) 長篠にて信長の先陣と旗本との間に、はり切とかまへ柵の木ゆひて、欺て敗北すれば

武田の猛兵敵はにぐるといふて追來り柵の木に行なづみたる處を數千の鉄炮雨のふるがおどくうちかくれば空矢なく中りて討る、者數をしらず引退んとすれば柵より出て付したふ戰をいどめば柵の中に入てうちしらす勝頼の士大將勇氣餘り有といへども打破るべき様なく督的みなりて討死しけり

(百十六) 同じ時徳川家の先陣を下知せよとて信長の使來る内藤四郎左衛門等が主君は先陣の下知を他人にうくる者には候はず内藤承て返答仕りたりと申されよとあら、かよいひて追かへす信長聞て徳川家よき士數をしらすといはれけり

内藤を鳥井に作れるあり然れども鳥井ハ三形が原よて討死したれを内藤の事なるへし
(百十七) 同じ軍甲斐の士一人生どりて信長の前にひき來る躰に緋墨子のした帯としたり信長名と問る、に美濃の者多田久藏と名乗る信長手を拍て汝は伯父の葬禮の時火車を斬りたりと聞り美濃尾張はわれにしたしみ有國なり我も奉公せうとや思ふ縛りたる繩をゆるせ惡源太もあらめられたり弓箭とる躬の恥ならずといはれしかば長谷川藤五郎かたへにひきのけ繩ととけば多田わきなる鎗を奪とり四五人つき伏る長谷川をこよて首を切て信長に出しえかくなりといへば信長深く惜まれけり

一説赤地の唐わりの錦の下帯したる士を生どり來る唯者に非じ名のれといへども名のらす

らば雜人の手にかけて殺さん士あらば腹切せんといひまかは多田淡路が子なりといふ信長聞て淡路に久藏新藏とて二人の子ありと聞いづれぞと問る、に新藏なりと申す勇士ありたすけてこそと有ければ生どりと成たる耻辱とく首を刎らるべしと云たり信長の前にて繩をさきしに門外に立かけたる鎗をとりわたりの者をつき殺すによりて遂に新藏を切ころしけり

(百十八) 長篠合戦の前信長謀をめぐらし佐久間信盛より潜に長坂釣閑がもとよ使と遣し日比信長に恨る子細あり願はくは勝頼軍をす、め戰わらんには其時信盛裏切して信長の旗本へ俄に切かゝるべき旨をいひ送りしかを釣閑悦でこれをたばるとはしらす勝頼に一戰をす、めける故馬場美濃信勝を始として侍大將の軍評定していひける事共を勝頼悉く用ひずして楯なしを整て進で軍すべきと決断せられしは其後は諸大將諫る事を得ざりけるとなり

(百十九) 天正三年六月 東照宮二股の城を攻給ふ城主の依田下野守幸成なり其子右衛門大夫幸致城と出て鳥羽山の下なる小川を隔て防戦ふ内藤彌次右衛門家長強弓の手き、にて敵を射しらす松平彌右衛門忠長が子彦九郎敵を朱のてうちんのさし物あるを見て味方にも此さし物有ければあやまりて敵の中へまされ入しを朝比奈彌兵衛一箭にて射伏たり内藤は彦九郎と縁者にしたしみ有ば引返して彌兵衛を射る其箭彌兵衛が乗たる馬の鞍の前輪よりあま輪をかけて射貫く彌兵衛が弟彌藏はせ來り兄が屍をひき退んとすると二の矢にて是も射倒したり城兵二

人の屍とひきのけんとする。本多忠勝等進みのりて追たてたり城兵引退く中に一人手負てひきぬたる者有けるを一人とつて返し是をたそけ門内に引入けるを櫻井莊之介勝次敵の首と一ツ取たりしが又す、んで追かけ行 東照宮御覽せられ苗の四半のさし物は櫻井なるべし深入するよと仰られけり其時敵の手負を助くる者やうく一の木戸揚錠門の中に入手負たる者はいまだ半見ゆる處に勝次走りつき手負たる者の足ととりて三間計ひき出し遂に其首をとる其時門内より勝次がさし物と打折けるが屍にかゝりとなりしとしらすして五六間計引とる時従者あくといへば又取て返し物ととり得て鳥羽山に歸り首と奉る 東照宮唯今の勇氣のいのめまご誠にて無双と覺ゆるなり然れども是より後はゆめく今日のおとく深はたらきすべからずとて遠州にて祿を増したまはりけり彼従者も度々はたらき有て後士となし内田彦右衛門といひけり

(百廿) 勝頼長篠敗北の後蘆田常陸介信蕃二股の城を守る三河の軍五月下旬より此と攻る南方山に 東照宮御陣とすへられ巽の方鳥羽山東へ安倉口の山北は三十原口の山西は和田島に向城をかまへらる信蕃固く守りて十一月に至りて城とわたし甲州に引入べしと勝頼再三下知せらるれども聞入す勝頼自筆の書をもて下知せられしかば十二月下旬人質を出し廿三日に城と渡さんど約せしが雨ふりければ笠笠にて見苦く候とて翌廿六日天晴て後城をわたし二股の川の邊にて人質をとりかへ引とれり信蕃小勢ふて久しく守り且城をわたす作法正しかりけるを御感あり

て後終に徳川家に仕へけり

(百廿一) 天正三年信長美濃岩村の城を攻て秋山伯耆備近を生どり生きがら逆はり付といふ物よせられけり此は信長の姉遠山内藏助が妻にて遠山を其前岩村に有けると秋山遠山の七家と稱せまんとしと和平してたばかり元龜二年信長の加勢の士三十五騎を殺害し城を奪とりて内藏助が後室と己が妻ととけり遠山は是より前に病死し其嗣信長の男御坊丸を甲州へ送りやり岩村と居城とせしがは信長怒にくまる、事深くかくてはせられしなり秋山口をしくもはかられけるかなわれを信長と縁類のしたしみわりかくせらる、事無念なりとて齒をかみ信長の末を見よと罵て七八日ばかり有て死しけり信長信州法華寺にて兵糧つかひれける時いろくの袖を着たる女房一人來り懐より錦の袋に入たる茶入をとり出し是と信長に見せたまはり候へ見しりておはしまさんといふ信長走り出て茶入とは石に當てうち砕き刀と抽てかの女房を切ころされけり此秋山が妻にて信長のとをなり

(百廿七) 天正三年八月 東照宮諏訪原の城を攻させ給ふ此城は甲州馬場美濃守氏勝が城制の法あてきづきたりし名高き城なりといへども城兵力弱りて廿四日の夜城と乘て小山の城あ迹落けり 東照宮此地は高天神に住來の要路駿州田中持船の敵と大井川一筋と隔たり勝頼 必隙を伺ふべし誰の此よ在て城を守り敵を防ぐべきと仰有けるに松平左近忠次す、み出身不肖に候へ

とも此城を守り申べしと申ける御威有て松平の姓と賜はり御諱の字を下され松平周防守康親と申せしは此時よりの事なり勝頼が暴悪般の紂王に似たりこれより攻入て打ほろぼすべきとて諏訪の原の城を牧野の城と改められしとなり

(百廿三) 諏訪の原の城を甲州より攻來りて合戦あり松平康親の子の士山内治大夫進士清三郎

山崎惣左衛門三人殿しける山内は精兵の手き、にて射拂て引退く時矢だね盡たり山縣源四郎

郎曾追かくる時進士清三郎矢一筋を山内ふなげやりまかば山内ふみ止りて射ける志村金右衛門

門が胸板を射通し後の松の木は射つたりるれより物わかれす山縣此矢を康重又送り返して強弓

精兵無雙なりとぞはめたりける康重其矢に進士が姓名の彫付たりしを見て賞むる處に是は山内

内が射申したるみて候と申す復山内を呼出してしのくなりやと聞る、に清三郎が射たるにて候

とゆづりけり康重兩人に感状とあたへたり世の人兩人と今の孟之反といひあへり

(百廿四) 天正五年畠山修理大夫義隆毒殺せられ家臣七尾の城に據て信長に屬し能登大に亂れ

ければ義隆の伯父上杉彌五郎義春越後入在て是を聞謙信にかくと告謙信即師を出して義春先陣

して七尾の城を攻れとす此時長九郎左衛門重連七尾にて畠山の長臣温井三宅に殺さる重連が弟

恩光寺使僧となりて信長此由を申せば柴田勝家丹羽長秀長谷川前田利家羽柴秀吉澁川一

益氏家卜全等四萬計よて打立八月五日加州手とり川を涉り永島に陣取たり謙信は能登一州悉く

旗下につけ八月朔日兵返して加州にて長が一族の首七ツ食部拍野の間なる濱に竿ひ渡し

かけ並べ札と書て立られたり松任の城主藤木右衛門大夫と和平し信長若陣と聞松任にて軍評

定し一戦すべしと手くばりあり七尾既落て謙信これまで打向れたり爰にて合戦無益なりとく

引退くべしと信長の陣々いろめき立恩光寺人ふ首を見するに名のみにて面貌異なり上方の軍の

かし來ると聞謀を以て長一族の首といつはり設たるならん能州へすて松任に在は後詰を防ん

爲なるべしといふを聞てさわざもしづりけり即夜戌の刻に及で恩光寺柴田木下が陣に行先に

は味方一同に敗北すべきいろ有と見てたばかりて申せしなり七つの首は吾父兄弟にて候と告し

らせしかば爰にて合戦すべからずとて信長引かへさる恩光寺是非一軍と乞へども聞入す恩光寺

は後信長の命ふて還俗し長九郎左衛門連龍といひしは此人なり連龍父兄の吊合戦と志し信

長の下知を請越前に至りて柴田ふたのみけり勝家越前の大橋に札を立長九郎左衛門能州へ發向

す立身を志す輩はわが被官たりとも參るべしと書たりければ相あつまる士八十餘人天正七年

三月二日能州穴水の城に入舊好の者共馳あつまり百人及び上杉より有坂備中七尾よれき

けるが長曾檢見與十郎を大將としておしよせ戦ふ長敗北して危かりし谷大學討死し長やう

やく引とりけり紀州士鈴木因幡初長にしたりし有北越に居て今能州に來り長有坂を和平し從

者は陸長は船にて有坂が方に來るべまとの使に鈴木來りしに長と殺害すべき色あり長に従へる

石黒大膳井久留了意合田民部木島小介如何すべきといふ石黒今七尾にゆれば必害にわらん船中にて鈴木を殺して退くべしとす、む長聞て汝が志悦ぶべし然ども陸より回る家人皆殺されなん吾獨生べき義なしとて七尾にゆき法道寺に入て遂に有坂に對面す殺害にきはめたれども有坂事故なく長と歸しけり松川兵部今日長を討もらし殘多く候おしよせ討んといへども有坂聞入す長は石動山にかゝり越中に趣く石黒敵よせ來らんよ殘る者なくば口惜きなり姓名をたまはり候へ敵を支て討死せんと云ども長汝をすて殺し吾獨生て何の面目あらんといふ石黒いひがひなき事を承るものかな本意を遂られなば吾子孫をとりたてたまはれといふ處に七尾の商來て敵おしよするといふ長は石動山よりの石黒の物の具して造ども敵來らざればあともり乗付て共に越中に赴き神保安藝守氏春のもとに居たり後長は前田の家に仕へて淺井をへて武功ありしは此人なり長後又怒庵と稱しけり

(百廿五) 謙信越中にて秋の夜諸將をまつめ月を賞して詩あり

露滿軍一營秋氣清。數行過雁月三更。越山並得能州景。任他家郷念遠征。

(百廿六) 東照宮信長は御對面の時松永彈正久秀かたへふあり信長此老翁は世人のなしがたき事三ツなしたる者なり將軍を弑し奉り又巳が主君の三好を殺し南都の大佛殿を焚たる松永と申者なりと申されしは松永汗をながして赤面せり

東照宮後長臣等を召て御物語有ける時此事を仰出され先年信長金崎と引退し時所々に一揆起り危かりしは朽木が淺井と一味と疑ひ進退きをまりしに松永信長に告て朽木か方へ参りて味方より引付候べし朽木同心せば人じちをとりて打具し御迎に参るべし若又歸りまおらば事ならずまて朽木と刺ちがへて死したりとしろしめされよといひて朽木が館に赴き事なく人じちを出させそれより信長朽木谷にのりて引かへされし也と仰られしとそ

(百廿七) 松永が士大將山口六郎四郎奥田三河守高屋の城を守りけるを信長攻らるゝに城中力盡て一方をかけ破り落んとせしに山口風雨の夜鉄炮とあつめ東の門の寄手へ向て散々うたせければすはや打て出るとさわぎける其ひまに西の門を開き一同にかけ出撃破りて落ゆきけり(百廿八) 謙信卒して天正六年養子上杉三郎景虎條氏康の子也猶子喜平治景勝遺跡を争ふ景虎縁ある故武田勝頼に援兵を頼む勝頼兵と出す此時景勝謀て勝頼の寵臣長坂釣閑跡部大炊助を使者を送り勝頼を黄金一萬兩寵臣に二千兩宛と與へて加勢を乞ふ兩寵臣勝頼を勸て政虎を放されたり是より諸士勝頼とうらみけるが終に勝頼の妹聲木曾左馬頭儀昌信長に從て勝頼に叛く勝頼これを討んとて軍を信州諏訪原に陣す小山田左兵衛信茂もこれに從て御宿監物友綱に送る汗馬忽々兵革長。東西戰一被羅邊恨。世上亂一逆依何起。只是黃金五百一鈞。砂金と一朱もとらぬわれらさへ薄恥をかく數に入るかな

甲一越和親堅約辰。黄金媒一始訟神恨。倍臣屠盡平安國。可惜家一名換萬一釣。

薄恥をかくはものへかなへて世の寂滅とるも金の諸行よ

兩寵臣彌邪義と行て武田家滅じせり

(百廿九) 天正七年九月 東照宮勝頼と大井川のいろうにて川を隔て對陣しおはします時に大木川上にて川にまろび落ける其音波よひいきてことごとく聞へしかばすはや勝頼夜討に寄るとさわざたちてとまらず牧野半右衛門に先陣としづめよと仰られまかば牧野馳行て何處にさわざ候や御旗本もさわぎ候とくしづまり候へど叫りければ愈みだれたちけりありる處に大久保七郎右衛門忠世馳來り勝頼れし寄べしとて御旗本は物の具かため敵を待かけたるに何とて先陣の人よかくまで驚きうろたへ候哉後日は嘲りわらはるべしとくしづまり候へと罵りければ是よ耻しめられて程なくさわぎもしづまりけり

一説持船の城を攻れとさせ給ひ保ちがたしとて焚すてらる此時勝頼沼津の城を請ついちの上にて此烟を見られしが北條家の軍の後よして九月廿日 東照宮の御陣又打向ひ富士川を打わたり 東照宮客戰は危しとや御思慮有けん兵をかへして大井川の伊呂をわたらせたまふべきに定させ給ひしは俄に物軍さわぎたちてしづまらず牧野半右衛門制し止れども彌さわぎし

に七郎右衛門忠世御旗本に大挑燈を高くさまあげさせ士をつれきてわが歸るまで動くべからずといひふくめ先陣に行て御旗本を二の身を討んとてしづまりたり其證はあの火の動かぬを見よといひければ是によりてしづまりければやがてのり歸り先陣はよくしづまりて敵と待てなり以後先陣の人々にわらはるべしといひければおれもまたしづまりけるといへり

(百卅一) 東照宮高天神の城をかこませたまひ柵と付て固く守らせらる城中後詰と乞ども勝頼出ず根盡けり栗田刑部使をもて幸若が舞を一曲所望し是を今生思ひ出にせんと申けるを 東照宮聞し召やさしくもいひけるよとて幸若に高館と舞せらる栗田が最愛の小姓時田鶴千世といひし者に絹紙やらの物もたせ出して幸若に贈りおたふ其後落城の時時田討死しけるを首をとりたれども女の首なるべしと人々疑へり 東照宮聞し召れ眼をひらきみよ女ならば白眼あるべしと仰有ければひらいてみるに黒眼あり又幸若忠四郎も高館と舞ける時みじりたりければ時田が首よ定りけり

(百卅二) 天正八年七月 東照宮田中乃城を攻させ給ひ八幡山よ御陣有て蒔田巴たらきあり勝頼後巻せんとて甲州を打出る松平康親が士岡田竹右衛門元次此おろ夕立洪水有べき時なり大井川は一夜よ水出て涉りがたし勝頼血氣の勇將にて候へばもし俄に押よせ候事あらん蒔田終らばとく川を涉て兵をかへされ然るべしと申す 東照宮尤なりとて川を涉り兵をさめ給ふ果し

て其夜大雨はげしく大井川水出たり

(百卅二) 田中の城を攻らる、時西郷伊豫といふ剛の者足輕と引具し度々打て出奇手を破りけ
れを 東照宮誰か西郷をうつべき者はと仰有けれども答奉ら人なし其夜菅沼大膳が陣に入
あつまりて此事をいひ出したるに菅沼が小性朝日千介 後に丹十八歳なりしがす、と出討とる
べしといふ菅沼聞て汝寝言をいふやといひしに必定討取申さんと云へばさばかりの古兵も軍
しかねつる西郷なりたやすく討ん事思ひもよらずそこ立され罵りければかたへよりいやとよ
千介がづらたましひみくならず末頼母しきわか者なりと、ひなためけり千介あす待れよ
西郷が首提て参らん物をと獨言して退きけりかくて夜深く菅沼が愛せし鉄炮をとり出し曉に
陣屋をひろのに出岡部と藤枝の間なる竹林にかくれ居たり夜あけて西郷馬に乗足輕引具して來
る 東照宮の岡部のかたへの小山に陣しておはせしが敵又出たると仰有ける處より千介鉄炮をた
めす西郷を馬より打落し走り出て首ととりかけ歸りてかくと申す 東照宮あはれ剛の者よと
ほめさせ給へば是より千介の名高く聞ゆけり

(百卅三) 天正二年勝頼兵を出して菅沼新八郎定盈が新よのまへたる城を攻ん、す定盈が一族
と郷導として不意にたしよする 謀をしりたる者有て告しらせけり 月廿九日の曙に定盈が士
ども大敵和田嶺本宮坂二筋にわかれて攻來候間とく退れよといふと聞て一軍もせず逃落ん事弓

矢とる身の恥なりといふ人々永祿年中今川家より攻し時は西郷孫九郎元正加勢たりき今多から
ぬ士卒打ちりたれば早く城を出て運をひらくの道こそ然るべからんといへども定盈兵を出して
敵乃様を見せしむ山縣が軍競來る由告けるに定盈圓にゆきてうたひをうたひて出ず足輕の頭山
口五郎作しひて諫ければ圓より出手と洗けるが又湯をもて口す、さたる体常のおとししひて諫
れば南の郭より退きけるが途中にてわれ等が伏所に火をかけざる事後に敵又嘲らるべし誰かは
歸りて城に火をかけ又日比愛たる鷹を携へ來るべきといひもわへぬに中山與六十八歳なるが
引返し城もどり火をかけ鷹を臂にて出たりけり定盈を宇利を経て西郷へ趣けるのをしたひ
て與六海倉淵まで退きけるに與六が一族後藤金助追かけ來てきたなくも敵に後を見ざるよと詞
をかけたししかば與六馬ひき返しむすど組て既金助が首をとらんとせしよ多嶺の士あまたお
ちかさなりて終に討れけり山口を定盈が後殿して主従三騎素絢瀨を渉る處に敵追來る山口引返
して敵あまた射伏たれども馬疲れば敵は近く鐵田村にかゝり吉祥山に趣く敵追追かけ來れ
ば散々に射しらしけるが馬動ざりける故乗はなちて歩たちになり山にかゝる箭二筋のみ残れ
り菅沼刑部塩津傳助追つめければ射たれども中らず指添を抽て手裏劍にうつ刑部が頭上をうち
かすりたり山口も終にそこにて討死し其墓今にありといへり

(百卅四) 岡崎三郎君天正七年二股の城にて自殺はしましける事、信長より叛逆の志有て

勝頼も内通し二股の城へ甲斐の兵を引入べきとの三郎謀あり此事は酒井左衛門尉よく存知たりと告申されしより事起りてつひに死を賜はりぬ

忠次を信長召寄て三郎君の北の方より告申されし十二條の悪事とあけて忠次に問れし忠次是より前三郎君の侍女おふうといひし美人とひそかよ巳が妾とせし事によりて三郎君憤深かりければ陳謝の事に及ばずといへり

又一説に佐久間右衛門尉信盛三河よ参りけるよ 東照宮御馳走ありけるが三郎君をゆされ御對面有しよ佐久間黄なる錦ぼうしをかぶり居たるを三郎君ひき奪ひてなげ棄無禮なりと怒らせ給ふ 東照宮 驚 思召けるよ三郎君われは信長の尊にてこそあれと仰られしかを佐久間無禮を謝し申せしが是も信長も諛言せし故ともいへり三郎君は勇氣たくましくさはめて物わらくおはしまして軍に臨て氣色かはり髪毛も逆にたつべく見へしを 東照御覽して摩利志天の像に似たりと仰有しとぞ

平岩七之助親吉は三郎君の傳なりしかを臣が諫申さるる罪を以て死刑よ行れ首よ信長におくり三郎君よば獄にたしこめおにて時と御待あれと申けるを 東照宮汝が忠心は誠にいふべき詞も非れどもよく察せよ武勇われにまされりと思ふ子と殺すの忍ざるの至なり汝が首を信長にたるとも既に吾家の長臣酒井が信長にあくまであしくいひつると覺たればなかく聞入られじ

汝と殺さば恥の上の恥損の上の損とは是あるべしと仰られけるとぞ其後年經て忠次目と煩ひて久しく引こもりたりしが御前よ出て年老候ぬ子と不便にせさせ給へと申けるを聞召信康生て有

あらばのほり心を勞すまじきよ汝も子の不便なる事をしりたるが怪しきと仰られのば言なきて退出したるとなり又ある時幸若大夫が満仲を舞りしを御聞有て満仲の舞ハ大久保は得見まじいと仰られしかば忠世引こもりけりこれは三郎君を忠世に御あづけ有しに定て引具しまおらせ

せて片かけの山林に身ひうめなんと思召けるにさはなかりける故三郎君の御事を悔ませ給ふをりく御詞には出されども事にふれ數年の後も愁傷の色あらはれさせ給ひけるとぞ

(百卅五) 攝州花隈の城は荒木攝津守村重が一族荒木志摩守元清こもれり天正八年信長の命にて付城をのまへ花隈の北諏訪が嶺には護國公西の方金剛寺山には士大將伊木清兵衛忠次森寺清

右衛門忠勝南の方生田の森に護國公の嫡子勝九郎之助守り給ひぬいづれも花隈より六七町計を隔たり三月二日城より兵と出す勝九郎廿二歳にて組討の功名あり國清公(此時古新と申す後

に三左衛門尉輝政公)十六歳にてればせしは是も組討にて首ととり給ふ護國公敵九六八 自討

とり伊木清兵衛秋田清兵衛堀與右衛門芳賀五郎右衛門石黒武左衛門佐橋武右衛門後藤市兵衛波

多野彌藏等はげしく戦ひて追崩すある夜護國公森寺政右衛門を呼て城中へ忍入よく見來れと命

せらる森寺行時梶浦勘兵衛も打つれんとす森寺今夜の物見は大事なり相俱ん事叶べからせと

天百六十九

いふ梶浦聞て思ひ立たる事空しく歸るべきや自害するより外なしと中々歸るべき体にあらずれ
 ばうちつれたり陳と城との間に小き坂あり城中より此者二人鎗を提げ來るに出あひ二人とも討
 とり首を心草の中に匿し搦手の水道より忍び入又水道より出て匿し置たる首を持歸寶檢に入城
 中の有さまを申せは護國公はや城の攻とりたるこゝちするよはかにしてかゝ此功を賞すべき但
 梶浦は何とて行たるやと問るゝ梶浦承けて政右衛門に仰られしと物のげにて聞候とて申す
 護國公近習の人とのけていひつる事を立聞し且軍法と破りたるを怒りたまふ其時森寺只今恭
 き仰を承候さとして賞美の望候はず勘兵衛が咎をゆるさせ給ひ候へかして申せを護國公さてや
 みなんどそ仰けるかくて七月二日に及で生田の森の南へ馬の草苜に雜人出けるを城中より兵を
 伏置て追ちらしけるを生田の森の付城より是を見て勝九郎馬上に鎗を横たへつゞけ者共とて馳
 向ふ梶浦兵七河崎忠三郎大陽寺左平次臼田嘉平次日置清十郎などを追つゞき聲をあげて切かゝる
 竹村喜左衛門乾平右衛門長谷川新次郎鎗を射る淵本彌兵衛は四寸角の柱の一丈餘りなるを
 打ふてり敵とたゞ伏相戦ふ金剛寺山の伊木森寺も大手の軍のげりを見て獸手より乗とらん
 とおしよする城より野口與一兵衛といへる者半町ばかり打て出防けるか野口も討死すれば城ぎ
 はへれまつむる大手の戦に寄手多く討れ危かりければ引返さんと護國公梶浦に詞をかけらるれ
 ば勘兵衛唯今あげんとせを彌みだれおしに成べしとさきはば鉄砲の數少く覺つるに俄ままし

たるは搦手より大手へ救來ぬらん政右衛門早からめ手へおしつめ乗こし申べし然るに只今大手
 の味方を引とらば敵搦手へまはりて政右衛門討死すべしと申す護國公尤なりとくゆきて見來れ
 と仰られしかり勘兵衛馳つけてしゝの事なりといふ政右衛門よくこそいひたれ早乗入べし
 大手を攻られ候へといへといふ勘兵衛此場と見すて、歸らん口をしけれども使の仰重けれの
 どてかけ歸りかくと申せは護國公無二無三又乗破れと下知せらる勘兵衛の城兵乃 必突く出べ
 き門脇につめよせたり搦手よりも伊木森寺先をあらうひ門を破りて攻入たり森寺はことしの春
 案内によくみたりし故門を破る透間かたへの屏を踰敵鎗ひて突けれども飛こみて其ま、討と
 りたり梶浦が察せま如くからめてお防ぐ兵少かりけれを攻入て火をかけたなり城兵も大手の門と
 れしひらき切て出る勘兵衛待請て鎗と合す城兵を切ぬけんぞ死狂に成て戦ひけるに寄手から
 めてより攻入たるが敵の後へ切てかゝりしかば城兵潰遷とさして敗北せり兵庫の築島に雜賀孫
 一郎花隈の加勢として有けるを伊木森寺先陣よておしよせ攻落す此時港川にて勝九郎五輪作右
 衛門といふ剛の者と鎗を合す森寺政右衛門馳付たれば作右衛門引返して退きけるが五輪のさし
 物と是はかくれなきさし物なり兩人へもおらするよといひて川へ飛こみて逃れ得たり黒き四半
 に白き五輪の形と染たるなりしとなり信長より勝九郎國清公に馬をまおらせらる護國公今度の
 軍めが目前にて各功名したるなれを明見届ぬ中よ就て梶浦が決斷鎗と合せたるよりも忙

しき場にくころ察したれどかへす、賞美有けるとぞ
 (百廿六) 天正十年勝頼の弟仁科五郎信盛高遠の城を守る織田信忠僧を使として勝頼の滅ん事
 近きにありとく城と出らるべしといひ送りたりければ信盛怒て返等もせで僧の耳鼻をそいで追
 出す信忠さらば攻よとてかじよせてきびまう攻るに城兵残りすくなく討れ信盛小山田備中渡邊
 金大夫照春日河内守原隼人今福安左衛門諏訪莊右衛門已下十八人十二間に七問の廣間にこもり
 火をちらして戦ふ信忠淺黄金補のほろかけて屏にあがり梧桐の枝にとりつき下知せらるゝと目
 にかけ七八度打てかゝる此時三十五六歳計の女房の緋れどしの物の具着眉尖刀を提げ諏訪莊右
 衛門が妻なりと名のり七八人なき伏て自害しけり信盛を始として死狂に切てまはれば攻あぐみ
 たる時森武藏守長可屋根の板引破らせ鉄炮を打こみたりければ信盛床の上にあがり腹切て、胸
 をつかんであら紙に擲ち倒れ死す其血痕後まで有といへり小山田已下も自害したり信盛此時十
 九歳なり信忠のとりのつかれし梧桐に鎗刀のあとひしと付て大廣間の天井も柱も鎗太刀のあとあ
 りて血にうまらぬ所なし庭に残れる雪に血かゝりて、紫となれりとぞ
 (百廿七) 徳川家康野田城の危急を聞て吉田城より後詰の勢と出しけるに武田の猛勢當り難く
 右往左往に撃ちなされ家康へ近習七八騎召連る敗軍と引入れさせんと采配取りて鞍上りに立ち
 早や引入れよと頻に令と傳へらるれば朱に染みし諸將追々引來るを纏め早や引取らせける

跡を慕ふて馬場信房山縣昌景八百餘騎を引具し餘まさしと追來るを家康には諸勢殘らず城中へ
 引取らせ後殿して城内へ入りけるに敢て橋をも引かせず城門八文字に押開かせ自ら矢倉に登り
 て床机お掛り泰然として居られしは深意ある計略なり馬場山縣は追ひながら城下へ來りしが此
 の爲體を見て若しや謀計あらんと左右あくは進まず信房昌景も己が智慮に迷ふて扣へたりし
 に遙に矢倉の上には家康少しも臆するの氣色なく唯莞爾と笑まれける有様は誠は深計有氣にぞ
 見ゆにける是に於て馬場山縣暫し躊躇ふ其内に思はず時刻を移しける程に最前踏止まりて戦ひ
 し本多忠勝大久保忠世酒井忠次石川伯耆守等我れ先きにと馳歸り馬場山縣が後より明と喚きて
 攻蒐れば馬場山縣も心得たりと渡り合ひ戦ふたるに城中よりも是を見て喚き叫んで撃て出づれ
 を流石の馬場山縣も前後の敵に取圍まれ大に亂れて引退く此隙は諸將皆々城中へ引入りければ
 家康大に喜悅び今日の合戦は危きよと多かりしに無難にて歸城せしは斯様々々の謀計にて敵と
 防禦しなりと云へば各々顔見合せ誠に君の洪福限りなしと何れも萬歳を唱へける此時馬場山
 縣は漸々軍を収め敗兵と集へて五丁程も退きし所武田勢我れもくんと馳來る中にも眞田昌幸眞
 先に進み奈何に馬場山縣の兩將定てめ大將を撃取つらんと尋ぬれば兩將答へて然れば吉田の城
 へ退退付入にせんとなせし所に早くも城中に入りて橋をも引るず門をも閉ず大將は高さ矢倉に
 登り欣然として扣へし故我々謀略あらんことを疑ひ敵刻と移す所に思ひ掛けなく岡崎の諸將立

歸りて後の方より攻掛り是を見て城中よりも撃て出でたれば前後の敵に當り難く心ならずも引退きしと語りければ眞田聞くなり大に歎き是れ敵の謀計なり其時我々ならん疑ひなく切入りて城中の大將始め一人も通すまじきものを是非もなき次第哉と申すにぞ馬場山縣も俄に心付き誠に孔明が仲達と退けし類の計略なりしを遠慮したるこそ残念なれと齒切をなして悔たりけり敵軍敗れて其將逃に泰然たる體を示すものは是れ其實計盡て逃し施すべきの術なく唯敵として計策あらんことと疑はしむるまでの窮策なるのみ察せざるべからざるなり之を名づけて無謀の計と謂ふ

(百廿八) 勝頼景勝の代に至り甲越飯山と對しけるに武田方は勝頼自ら二萬五千の兵と率ゐて出張なせるが上杉方は直江山城守兼續を大將として三萬餘騎を引具したりける武田方の先鋒土屋惣藏初鹿野傳右衛門急ぎ勝頼の御前より出て申けるは上杉勢直江山城守三萬餘騎飯山より三里隔て陣を出し候なり何卒我々今宵夜撃致し度存する間御許し下されば敵と一時に攻敗り候いとぞ願ひけるに勝頼道理に聞かれ敵の備へなきと撃は軍法の興義なり早く其用意と致すべしと命じければ土屋初鹿野の兩人大に喜悅て退出せし後へ眞田昌幸來りて謁しければ勝頼今宵夜撃の事を物語るも眞田大笑ひ直江兼續は尋常の敵にあらず夜撃をなさば極めて其用意あるべし勝頼聞て汝が慮甚だ過ぎたり直江何とて今宵用意すべきやと云ひしに眞田は答へもあらず

冷笑ふて出でにけり去程ふ土屋初鹿野の兩人は手勢三千五百餘人を以て其夜初更の頃及より用意となし飯山より直江が陣に押寄りしに篝火少々焼捨たるばかりにて用意の體も見えざれば土屋初鹿野大に悦び倍ては敵合戦は明朝と油断せしものならんいざ打掛らんと三千五百の精兵働と開を作り攻懸りしと陣中には人影たなく眞闇なりければ土屋初鹿野不審し居たる所一聲の鐵砲耳根に響くと齊しく此方よりは柿崎集人五百餘人撃て出彼方よりは安田下總守同じく五百餘人後よりは甘粕近江守前よりは直江山城守須田大炊之介杉原常陸之介惣勢三千餘騎各々潮の涌が如く撃て出ければ何かは以て堪るべき土屋初鹿野が勢大に討れ幸ふして飯山の陣に逃げ歸りける直江が勢い之を見て謀計あらんことを氣づかひ長追もせず元の陣に引返しける倍ても土屋初鹿野は敗軍の士卒を引き面色土の如く耻かきの體にて本陣に歸りければ勝頼は初めて眞田が申せしことと感じける斯くて又昌幸申けるは奈何も土屋初鹿野殿今一度直江が陣より夜撃を蒐られよ初鹿野申けるは我々初め大に敗れたれば今一度參らば今度い生きて歸ること叶ふまじ土屋申けるは然にあらず何はともあれ今一度夜撃と蒐けて見申さんと勸められ初鹿野心ならずも又三千五百人の新手を率ゐて押寄ける此方は直江が陣には夜撃を破りて手始よしと喜悅び陣中にて酒宴を催し明朝は早く押出さんと其用意となしければ再度夜撃來らんとは思ひも寄ぬ所へ開の聲聞わかばスハヤ又夜撃來りしごと上を下へと騒動し太刀と鎗よと舞く所に土屋初

鹿野勇を奮ふて攻掛れば上杉勢瞬間大敗し春日山と指して引退きける
 初度を止めて再度と勸る謀計の漢土後漢の世に於て賈羽既に之を行ふ曹操兵を發して襄城を
 攻めけるに河北の袁紹都の空虛に乗り攻入んとする由聞ゆければ曹操以ての外に驚愕き今都
 の内空虛なるに袁紹若し攻上らるを忽ち瓦の碎くる如くに破れんとて取らるものも取り敢へず
 兵と引て馳上りけるに張繡之を聞きつけ急に追蹙て撃んとするを賈羽謀めて申けるは必ず追
 ふべからず若し追ふときは却て敗れん劉表傍にありて申けるは曹操都に事ありて敗軍を引
 て憫憐かへる我れ之と追ひんよ何とか期んとて張繡と一手になり一萬餘騎にて追蹙る曹操は
 自ら後陣に居けるが追手乃重るを見て豫て期したることなれを一軍を引て取て回し散々に打
 敗る劉表張繡した、か撃れて引退き賈羽に逢ふて御邊の練めを用かざ今大に敗れたり云ふ
 に賈羽申けるは兵と調へて今一度追ひ給へ張繡が曰く既ふ一戰に負けて敵は勇み御方へ弱る
 争での又追ふことを得ん賈羽申けるは兵勢は變あり急に又追蹙け給は、必ず打勝給はん萬一
 勝たずして回り給は、某が首と獻せん張繡然らば再び追ふて見んとて打立ちけれども劉表は
 疑ふて從はせ張繡一手の兵を驅りて飛ぶが如く喚きて曹操が勢に撃て蹙りければ戰はんぞす
 る者獨りもなく馬物の具を打ち棄て亂れ騒ぎて逃走る張繡長追は却て敗を引出すの基なりと
 て引回しける劉表之と見て大に驚き賈羽に問ふて申けるは嚮に我れ精兵を引て追蹙る時御邊

之を止めて追へば必ず破れんと云ふ今又敗軍を引て再び追は、必ず勝たんと云ふ果して御邊
 の言に外れざるは如何成故や何とて此の如く先見の明かなるぞと申けるに賈羽答ふるやう是
 れ知り易きことなり將軍能く兵を用か給へども曹操には及ばず曹操が勢真に敗軍の後なれど
 も追手蹙らんことを知て自後陣に備へて精兵と殿とす是の故は追手の勢壯なりと云へども
 打負くべきを知る曹操既に打勝ちて後は再び敵の追とんとは思ひ寄らる都に事ありて心急ぐ
 故に屈強なる騎馬の勢い皆前きに進み其身も路を急ぎて一手の勢と後陣とし大將に命じて守
 らざる是れよ由て重ねて追ふ時は敵の不意に出るなり曹操が大將能く戰へども亦將軍には及
 ばず是れ必ず勝つべきの理なりと申ければ劉表も張繡も其高論よぞ服むける賈羽の事と昌幸
 の事との追蹙と夜撃の差こそあれ其趣きは一として賈羽は早く昌幸は晚ければ即ち昌幸の同
 謀を二たびしたるもれにして敢て奇なりとするに足らずと謂ふべきか本計の利益たるや再三
 再四用うるも尙ほ且つ敵を欺くことを得べきの妙計なり兵家宜しく知り置かるべし
 (百廿九) 初回上田籠城の役織田徳川北條の三將二十有餘萬の大軍を以て百重千重に取圍み水
 も漏さぬ計に憚々と取詰たれば隣れ上田城は細粉に踏崩されんず状態なりける去れを流石の眞
 田昌幸も城兵僅に二千有餘今は防禦の術も盡きたりける程に如何よせましと思慮に腦と苦しむ
 る折から倅幸村當年十四歳なりけるが鶏卵煎砂の謀計と巧みける即ち鶏卵を二ツと割り中の黄

白と去りて此中へ煎砂を入れて合せ紙を水に漫し割口と巻きたるもの數萬作り出し櫓々に十籠
 二十籠づゝ取備へ置き寄手遅しと待ちかけたなり頃は天正十年三月二十五日の朝まだきより織田
 徳川北條三方の寄手を働を調と作りて押寄せ鍵總打懸勇みに勇んで攻立つるに城中よりは時分
 は好と川の鶏卵を相圖と均しく擲出せを何條以て堪るべき背面頗のきらひなく當り次第に碎け
 しかば煎砂の兵士の眼に入りさしもの勇夫も暗夜を辿るに異ならず城中よりは之を見濟し時分
 は能きごと松本口織田勢へは眞田源次郎輕井澤口徳川勢へは隱岐守信尹笠ヶ城北條勢へは眞三
 郎幸村何れも三百餘人と率めて開を作り攻め掛れば盲人に均しき寄手の面々働くこと能はずし
 て我れもくんと敗走り同士撃するもわり陥れて死するものありて二十有餘萬の大軍雪積かゝり
 て落されしは甚と見苦かりける有様なり斯れハ信長は如何にせましと思慮を凝せしが未だ能き
 工夫もつかざる所へ家康來りて鶏卵煎砂の目潰を防禦んには竹束を以て楯とし鐵の袖を頼に闘
 すより術なしとて夥多しく竹策と用意して又もや押寄せたるは幸村は煎砂と懲果たる敵兵此度
 は之を防禦んとて竹策の楯を用意せんこと必定なりと推察する所から多く擲松明を貯へたるに
 果して先手には竹策を荷ひ跡は捧の太きと提げ目潰の鶏卵今や降り來るかど待つ所に城中は
 鎖り返へりて音もせず奇手十分城に近づき頃一聲の鐵砲響くと齧しく三方の櫓より松明を投
 出せば袖を注ぎし如き竹策は見るくうちに災々燃上り寄手の者共驚き騒ぎ消さんとすれど

も消ればこそ散々にありて我れ先きに敗走りける

(百四十) 織田徳川北條の三將上田城を攻落さんとて押寄けるも何分も眞田が智謀に當り難
 ければ是非なく遠攻に致しければ是れには昌幸困と果て斯くては所詮糧食に事を欠ん程に籠城
 は心元なしと思けるを倅幸村は冷笑ひ今宵某敵兵を欺き必ず一汗流させ申すべし又君には本丸
 にありて篤く幸村が計らひを御覽あれと申ければ昌幸然らば汝宜しく計らへと申けるころ昌幸
 が大膽幸村が不敵何れも類ひ稀れなる英智あれ幸村は夫れより松浦七郎荒川勝藏畔柳九藏海野
 六郎兵衛望月太郎左衛門等に命じて城の後の山嶺さへ炎々と明松と點させ上田の城より越後路
 へ落行く體を示しければ三方の寄手之を見て偕ては眞田昌幸籠城叶ひ難きを察し越後路へ落行
 く者ならんいざや追駆武具を剣取るべしと一大虛を吠れば萬犬實を傳ふるの習ひに一人斯くと
 言出せを聞く者之れに附會し是れ眞田は上杉が方へ落行くと思ひたり如何様追駆高名せんと
 思慮淺き面々我れもくんと三方より明松を目的に進み近きて見れば呆然々々唯此處彼處小松明
 の結つけしのみにして更に人なげきば這は不審と眉を蹙めしが斯くては長居も無益なりとて諸
 勢は陣に立歸らんと今來りし道へ差掛りしに這は那に道そ一面火炎となりて歸るべきやうもな
 かりければ諸勢の大は仰天し如何はせんと狼狽さわぎ峰に傳へ谷は彷徨ひ人馬上と下へと騒
 動して猛火の中に苦しむ櫓は地獄の責も斯くやあらんと恐ろしなると云ふばかりなし斯くと見

る内に杭木に結付し明松燃盡して地に落ちければ豫て設けし地雷火一度にドツと發したるよぶ
何條以て堪るべき山を皆火炎となりて燃上る是も依て織田徳川北條の軍勢焼死する者數知れざ
りける

(百四十一) 勝頼天目山に落行時瀧川一益攻入て落人をも討とり勝頼の首をとりたれども誰と
いふ事としらず小溝の中に棄けるに百姓ばら溝の前まで必平伏し禮をして打通るゝかある故ぞ
と問ばぬの溝の中に屋形の御首のねはしまし候といふさらをもとて首をもとり出す信忠勝頼の首
をわから置先瀧川義大夫を呼て汝がとりたる首といつれがと問るゝに是なりとて出す此は土屋
總藏昌惟が首なり伊東伊右衛門といふ者す、み出て勝頼の首を見て此こそ伊右衛門が取たるを
申す證はいかにと問るゝに斬口に乘たる馬の栗毛かす毛乃血にまじりてつきて候天目山の麓田
野より鞍の四方出に付し故なりと申す果して詞にたがはずより伊東もとりたるに定りぬ信長
勝頼の首と見ていかに汝が父非義不道なりし故天の譴のがれがたく今かくなりふ信玄一度京に
赴んと志しけると聞汝が首を京におくり女童に見しられよと罵り首を 東照宮の御もと
におくられけり 東照宮御將机においしませしが勝頼の首と聞し召將机をかりさせ給ひ偏にわ
かきゆゑ思慮なくかくならせ候と禮義正しく仰あり是と傳へ聞甲斐信濃の士ども徳川家よ心を
よせ奉るもとゝなれり

又一説に勝頼の首を瀧川が土瀧川莊左衛門といふ使番に持せて信長に見せ申せばさまゝに
罵りて杖にて二ツつきて後足にて蹴られけり莊左衛門是を見てかゝる事こそなけれ織田家の
運命のや盡きてなんといひけると蜂須賀阿波守至鎮の長臣稲田修理が弟丹波瀧川が方に信長
より置れたるが聞けるが果して程なく信長弒せられしかば莊左衛門心ある者よとて蜂須賀の
家より捜求けるに瀧川の家滅て後かくれ居たると召出して仕へけるとなり

(百四十二) 信長甲州に攻入れし比秀吉は筑前守とて西國毛利家に向て甲州の軍よ從ず勝頼
死して甲州平均なりといふを聞秀吉大息ついてあたら人を殺したる事の残り多さよ我軍中に有
ならぬまひて諫申て勝頼に甲信二州をわたへて關東の先陣としたらんに東國は平おしにすべき
にとくりかへし悔れけり

信長の人と爲りと性荒くして己れに敵對する者は其何人なるを問はず其如何なる状態に拘は
らず其將を殺戮し其國を滅盡さすんを止まず然るに秀吉の人と爲りは其性稍々寛にして狡黠
を謂ふべきが如く又俗に所謂横着と謂ふべきが如くよして抗敵する者は之を攻ると雖ども敵
一旦講和を申入るに於て忽ち之と諾し左なくとも敵稍々強しと察するか又は宜しく己れの爲
めに用うべき所ありと思ふ者の我れよりして和親を求む況してや敵より降を乞ふに於てをや
如何ず之と容れざらん欣然として之を容るべし故に信長は勞多くして其得る所少なく秀吉は

勢少なくして其得る所多し之と譬へば將某の如し信長は敵の棋を得るも之を我が有となし却て敵を攻るの器となすことなく空しく學中に持殺して止まんに秀吉は隨て取れを從て用敵の棋を以て敵を攻るの一具とすの差あり其地を得るの多少固より宜なり本章に於て其一例を見るに足れり

(百四十二) 勝頼亡て後信長信玄の館を見んとて馬を乗入んとせられし馬進まさりしかは引返されけり 東照宮は程經て甲州を治めさせ給ふ時信玄の館の跡御覽の時館の門外にて御馬より下させたまひしとぞ

織田豊臣徳川三氏の性よは三段の階級ありて存すること固より人心の同じからざる其面の如くなるよ因るべしと雖も其事業の上に影響を及ぼしたるは甚と嚴にして後人の宜しく鑑ざるべからざる所あり或日織田羽柴徳川の三氏一場に會して酒宴を催ふしけるに道は善き會なれを座興と添へんが爲め各々其意見と子規に詠せんとて先づ信長詠じて曰く鳴かざれば殺して鳴かす子規と次ぎに秀吉詠じて曰く鳴かざれば鳴かしてみせう子規と尾に家康詠じて曰く鳴かざれば鳴く時待ん子規と三氏漸次詠じ了りて雷笑して止まず臈て酒宴終りて散會なしけるが是れ能く三氏の思想を發露するものにして信長は性急よして烈火の如く鳴かざれば直ちに之を殺して鳴かさんとの氣込にて雄猛殺戮に果す故に天下を取ること最も早し然れども得

るに速きものは失ふにも亦早きこと造化自然の道理僅に二代にして滅亡たり秀吉は性急なるも稍々緩にして鳴かざればなかりてみせうと半急半緩或は威し或は宥め慈父の小兒を養育するが如し故に信長に繼て天下を得而して其弱を保つこと一代延ぶと雖も敢て其長きを保つこと能はず終よ三代よきて滅亡たり然るに家康は其性寛大にして鳴かざれば鳴く時待んと時勢の巡還已れよ利運と與の期節を待て天下を取らんとするよありて専ら寛を主となしければ天下を得ること尤も晩かりしか其弱を保つこと長く十有餘代に至る是れ職とて之を得ること晩きものは之を保つも亦長きの道理によらざればあらず泰の二世にして斃れ漢の四百有餘年を保つ亦此理よ由れり本章及び次章に於て織田徳川兩氏性質の寛嚴後日事業の成敗思ひ知るべきものあり然りと雖も彼の二千三百年代の初め世に輩出したりし英雄豪傑が其隣國を併呑と以て大國を形造りし後にあらざれば織田氏の兵鋒銳しと雖も其國を廣ること彼れが如く其れ速かなる能はざるべく而して織田氏の攻伐四出以て海内を震懾せしめたる後よあらざれば豊臣氏の百方講和と主として以て親和を求むるも諸侯は輒く首を垂れて之に服従するを肯ざるべし而して豊臣氏の甘遇優待以て諸侯と連合したる後よあらざれば徳川氏の威風當時に雙びなく威ありて猛からず専ら寛大を主とするも焉んぞ能く關ヶ原の一戰に以て天下を震懾せしむる此の如くまると得んや織田の業之を室を築くに譬ふ其蕪穢と治め其高卑を

鎗やぶて又之を爲し其材木を鳩あつめ後人として之が繩墨斧斤じようもくふじんと加へて之に居らしむ嗚呼其勞むし華ろ滅やぶすべけんや

(百四十三) 勝頼滅亡天目山よての事共甲陽軍鑑には切死きりせ没ぼつせられしよしのせたり甲州の士民のいひ傳ふるとは異なり鶴瀨も勝頼に背しかば天目山をさして落ゆかれしに一揆所々より起りてければ百姓の家に従ひし婦人どもといれ旁の人家に茅の有けるをいこばせて出入る口をふさがせ火をかけられけり小高き所に上りて武田の家代々持傳へられし楯無といへる物の具ものぐと信勝のぶかつに着せしめらる土屋總藏肩入の役をしけりさて勝頼薙刀を横たへ寄くる一揆に向れしを總藏そうざう屋形は新羅三郎より二十八代弓箭の家をつがせたまひ今はのきひに及ばせ給ふとも一揆をらに御首をわたり申さん事口惜く候と諫ければ尤なりとて物の具ぬを總藏そうざうに介錯せさせて終られしとぞ相従へる人々皆互に刺ちがへて勝頼の供しけり總藏そうざうと僧の麟岳りんがくと残りともまれるが皆事よく終りしと見とめて後總藏そうざう自害しけれを麟岳刀を口にくはへ貫れて死しけるとなりされば後甲陽軍鑑天目山の事こともとより彈正の筆記に非ず後の人誤り傳へて書たるなるべし
(百四十四) 勝頼父子の屍田野かたのたのよあれども信長を恐れて慧林寺けいりんじの僧を始として斂あつむる人なし田野たのの西北四里計に中山といふ所の洞家の禪僧廣嚴院來りて勝頼夫婦信勝己下の屍をささめ葬はらひる其後 東照宮甲州と御をさめ一寺と建立有て景徳院と號し田地ちけいと寄附よけわり小宮山内膳友信が弟の

僧なりしを住持の僧とあしたまへり

(百四十五) 勝頼亡て後武田家尊崇しける慧林寺けいりんじ前將軍義昭公ぎしやうこうの使大和淡路守三井寺の上福院佐々木承禎じやうてい三人かくし置たる聞きこは有ければ早く出す可と信忠下知せらる、事三度及べども出さず信忠怒いかづつて累世の且越頼勝をば少の間も境内けいんにどやめず其遺骨いこつをだより斂あつむすして詮なき者ものをかしたるとして津田次郎信治長谷川與次郎等をして寺をとりまいてさぶさる、に二人はとく逃さりぬ僧徒皆山門の樓うらよ上りてこもりたるを其下に燒草やぐさを積つて火をかけたれを快川かいせんを始として坐して合掌して焚死やけしと其餘いそおめささけんで燒死ける者寶泉寺ほうせんじの雪峯東光寺せつぽうとうこうじの藍田長禪寺らんてんぢやんじの高山かうざん等兒童じぞうよ至て八十四人なり

又禪僧の語り傳へしまたは快川濃州かうがうのうぢうよ有し時信長招待せいたいすれども背そむけず今川の家に行て甚今川家を輔佐ほすけしたりければ信長よくまれしまたは甲州かうぢうよ往ゆて慧林寺けいりんじの住持ぢゆうぢたり信玄の死しと深くかくしければ信長しんぢやう愈い怒いかづつてさまじくまたはさぐり聞せられしまたは快川かいせんの方かたより泄もれは信長怒いかづつまたへかねられしまたは武田たけだの亡ほろむ故ゆゑ遂つひに焚殺やきころされしとなり又其時樓下ろうかよ鎗先やぶをそろへてあまさじとしたりしまたは快川かいせん弟子でしの南華なんくわよ法の絶たえん事ことくちとじとしても逃のがるべきにあらねども樓ろうより飛とびて死候へしと云しかば南華飛とりししに群むらりたる士卒しその鎗やぶぶすまを作りたる者ども鎗やぶとふせたりしかを南華なんくわたすかる事ことをえて後豊後月溪寺ほうごげつせきよありといへり又つついて飛とびたる者もの十六人じゅうろくにん有ありといへども其

(百四十六) 天正十年三月 東照宮江尻に御軍を出され成瀬吉右衛門正一を以て田中城を守りける依田右衛門佐信蕃に降参をす、められ武田の舊臣悉く背て滅亡近きにありとく城を出候へど仰おくられけるよ依田従ひ奉らず武田の長臣其の書簡を得て虚實を定むべき旨と申す其後先年遠州二股の城にてゆかりも候へば大久保忠世に城を渡すべしと申せしかば 東照宮尤なりとて穴山梅雪が書簡を送らせらる信蕃こゝに於て城を忠世に渡すれば降参せば信州の本領を移て行るべき由仰出されしに依田承り勝頼の存亡を審に承らざる間は仰を承りがたしと申て信州佐久郡葦田に趣けり勝頼既に亡て信長今度勝頼に二心なき輩といふとも武名ある者は諸將召か、ゆべからずと下知し猶かくれ居る者を捜し出して死罪を行んとなり 東照宮此事を以たませたまひ信蕃を市川の御陣に召れ密旨を蒙り主従六人遠州飼東郡二股の奥小川といふ所にかくさせたまひけり其餘仁徳によりて人あまたたすけさせ給ひけり

(百四十七) 天正十年三月武田道遠軒信綱降参しける信忠森武藏守長可に下知してころされけり長可各務兵庫元正を使とし武前采女を添たり信綱刀を膝下に置てはなたず各務武前行向て武藏守が愛する馬の候なぐさみに見たまひんやといへば庭に出る處を元正二尺六寸有ける雪次の刀にて一太刀斬たりしに信綱小脇差を抽處と采女つゞいて切伏たり小性河野といふ者信綱の

刃と持居たりしが 即抽て采女と切兩士遂に河野とも討とめたり元正鎧を合せ首をとる事廿一こそし高遠の城攻にもさまより伺見て群たる真中へ飛入倒れたるが起わかりて散々に物あひ首とりけるが雞尾の棒のさま物としてあたりをばらふ有さまと信忠見て誰と問長可わが家の士各務兵庫と申ものなりといへば誠に今日の見物なりといはれしとぞ

(百四十八) 高遠の城にて戸田半右衛門重政一番にかけ入時赤はるに金乃尻竹の出し戸張隠のす戸衝木は當り通り得ず尻居に倒る、其間に信忠の小性山口小辨佐々清藏ふみ越てかけ入たり戸田後入に語りてわれらが如き武功にていほろ指物の門木戸につかゆべきと心つく事へあき物なり敵と見てかゝる時外の志はなきものなりもし勝れたる武勇の人ハ別の事よといひけり半右衛門後武藏守と稱し關原おて討死せり信長後に感状とあたへらる、時先小辨は手づから國久の刀とあたへ次に佐々に長光の脇指をあたへ汝が武功は誠に大功の内藏助が従子なればと詞をかけるる二條よて明智信忠と攻る時清藏小辨に向ひすはだよて死んば屍の上の恥なるべしとて打て出一人つ、敵を斬伏其屍を引入物の具とりて打着又切て出討死せしとなり共に十六歳容貌世に超て美しかりけるが面に血を濺ぎ髪の亂れしを見る人殊々惜みあへり小辨は伏見の賤き者の子なれども美少年にて叫出されけり

(百四十九) 小山田兵衛尉信茂は武田累世の長臣なりしに勝頼に叛き降参して善光寺に有しを

信忠堀尾茂助も下知してころせとなり則武三大夫と討手とす士一人そへて甲冑を送り一禮せん
時刺殺せとの事なり三大夫善光寺に赴き甲冑を贈りまゐらす由いひけれを小山田出て一禮す
れども則武討べきけしきなしや有て則武しづるに武田の家士大將として數世重恩の身今度
主君よ叛き不義の至に候故討手よ參候たり向それよといふ小山田聞て口をしくも討られけるよ
とく首と刎られよといへども則武直勤かす小山田刀よ手をかけ是まで候といへば其時則武立
わがりて首と斬たりけり

(百五十) 勝頼亡て後馬場美濃氏房が女召出さるべしとて甲州の郡代鳥井彦右衛門元忠も仰出
されしに尋ねさがし候へど行へしれざる由を申けり程經て其あり所しれたる由を申す人の有け
れば東照宮向かたにゆくれぬたるがと御尋あり即鳥井がもとに潜り匿し置たるを申けれを
すべて彦右衛門をぬからぬもの哉と仰有けるとぞ

(百五十一) 辻彌兵衛盛昌へ天正三年の勘氣にて七月甲州を出て信州小諸の與良遠江がもとに
しのび居たりしが勝頼亡て後徳川家へ仕へ奉る甲陽軍鑑も勝頼天目山に落行時辻一揆の長とな
りて攻たる由をしるせるは非なり

(百五十二) 明智日向守光秀信長を弑せむと思ふ事久し天正十年六月朔日の夜明智左馬助秀
俊と寢所によび入かたへの人としりげけ一大事の有なり蚊屋の中へ入れといふ秀俊頭と蚊屋の

中にさし入て何事にてか候といふ光秀汝が首を得させよといへば秀俊聞て一人のみよて候かと
問光秀三人の命をもらひ猶足ざる故なりといふ秀俊いと易き事にて候大事ことよく成へしとい
へば光秀いかにしりたるやと問ふ事新き仰と日比の恨思ひ合せて候といへを光秀いさ信長を
討んと思ふなり汝を偏に頼み思ふぞよ先汝も語らんと思ひしに中々諫争ふべし汝力と合せ
すば志遂がたからん従はずは汝と斬んと思ひしとて盃を出す秀俊先臣一人も語りたまふあ
らば諫申すべしはや外にも語りたまはんには駟も不及と申事の候泄聞えて臍とかひとも益なし
とく打立給へとて夜半計に俄に軍兵をれし出し明れば二日の曙も信長の宿せられし本能寺を
どりかこむ森蘭丸長定何事ぞ物さわかしきとて白きかたびらの上に淺黄かの子の小袖をはをり
立出て見るに壁の外み水色の旗見ゆる信長敵は誰と問る、蘭丸明智にて候と申もはてぬに笑
浦大藏古川九兵衛天野源右衛門等大庭にみだれ入信長白きひとへ物を着弓持て射られしに弦き
れたり地臙脂のかたびら着たる廿七八歳計の女房十文字の鎗を持來りけるを信長おつとりしを
し防れしが内につと入て障子をひき立たれども燭臺のいまだ残し火も信長のかけうつりたるを
見て天野鎗をどりのべ刺通す蘭丸弟の坊丸十七歳力丸十六歳なりしが切て出討死しける隙に内
より火とかけ灰燼となりたりけり

(百五十四) 明智長信と殺する時秀吉は備中にて毛利家に向て陣せしが秀吉所々にしのびの者

と置れしに備中底瀬にや性しげなる飛脚の者を生どりたり秀吉其書を披き見るに信長と討とら
能秀吉必敗北すべし秀吉を追撃れよと毛利家へいひ送る書なりもし此書毛利家に至らばいか
なる謀あるべきもしるべからず秀吉の慮淺からずと人いへり又高松の城いたやすく攻落す
べきよ水攻にして日と経たるは信長常に大功の速ふ成を思ねたもの心あるを察しての故なり
と入り

(百五十四) 秀吉備中へ陳して毛利と和平せん事を計り密に手だてを運し西國の米を價と貴く
買れしかば城米を出して賣る者多し小早川隆景一人固く制してうらせし信長殺せられて秀吉と
毛利家手ざれなるべかりしに兵糧のゆたかならざる故終に和平に及べり
(百五十五) 明智江州坂本に城と築く時三浦といふ者

波間よりかさねあけさや雲の峰
光秀わきに

磯山つたへしける松村
又光秀丹波龜山より愛宕ふつ々ける山に郭をかまへ此山を周山と名く自ら武王に比し信長を般
の村王またとふる心後にあらはれたりといひひけり又志賀唐崎の松いつの比にか拮たりしを光
秀植つぎて今の松なり光秀よめる歌

われならて誰かいうるむひとつ松こゝろしてふけ志賀の浦かせ

一説青蓮院宮尊朝法親王の辛崎の松の記にて見れば大津の城主新庄駿河守直頼舎弟松菴
玉雜齋直壽 此雜齋天正十九年卯の秋植られし由其時のうたよ

かのつから千代も経ぬへし辛崎のまつみひかる、みそきなりせば
これを今の松の此新庄の植られまか

(百五十六) 森蘭丸は三左衛門可成が子にて信長寵愛厚し十六歳にて五萬石の地をあたへらる
ある時刀もたせ置れしよ刻鞘の數をかぐへ居たり後に信長かたへの人とあつめ刻さやの數い
ひわてなん者に此刀とあたふべき由はれければ皆おし料ていひけるに森はさきに數へて覺
たりとていはず信長其刀を森にあたへられけり信長森の明敏と試らるゝ事多かりければも一度
もあやまらなく其才老年の人も及ぶべきに非ず明智の恨める事を察し潜に信長の前に出で光秀
飯をくひながら深く思慮する体にて箸をとり落しや、有て驚たり是ほど思ひ入たる事別の子
細はよも候はる恨奉る事まかくなれば大事をたくむならん刺殺すべしといひけるを信長いや
とよ佐和山へは終よ汝もあたふべしといひければ森これより先に父が討死の跡にて候へば
坂本と賜れど申けるを明智と與へられしかば讒言すると思ひ信せられず果して弑せられさ
森蘭丸若し常人なりせば刻鞘の數を云ひ當てなん者に此刀と與へんと云ひし時直らあ答て何

個なりと云ふべきに突然斯る問と試むるは我が疑きに敷へしを見しに因るなるべしと思ひに
ければ疑きに敷へて覺ゆたりとて云はざりけるなり其狀淡泊無飾にして深智の程こそ感せら
れける

(百五十七) 光秀天正七年六月修驗者と遺して丹波の守護波多野右衛門大夫秀治がもとに光秀
が母を質に出したをかりければ秀治其弟遠江守秀尙共に本目の城に來りけるを酒もりしてもて
なし兵を伏おきて兄弟を始從者十一人を生どり安土につかひしけり秀治は伏兵と散々に戦ひし
時傷を蒙り途中にて死す信長秀尙以下を安土にて磔にせられたり丹波に残り居たる者ども明
智が母を磔にしたり明智遂に赤井等を攻したがへ丹波を信長より賜はりけり又信長ある時酒
宴して七盃入のさかづきもて光秀よしひらるゝ光秀思ひもよらずと辭し申せば信長脇指を抽
此白刃とのむべきか酒をのむべきかと怒られしかば酒のみてけり其後稻葉伊豫守家人と明智
多くの縁をわたへよび出せしを稻葉求れどもとさす信長もとせと下知せられしとも肯はず信
長怒て明智が髪を掴みひきふせてせめらるゝ光秀國を賜り候へども身の爲に致すことなく士を
養ふを第一とする由答ければ信長怒ながらさてやみけり 東照宮御上京の時光秀は馳走の事を
命せらる種々禮の設しけるに信長鷹野の時立より見て肉の臭しけると草鞋にてふみちらされ
けり光秀又新に用意しける處に備中へ出陣せよと下知せられしかば光秀忍かねて叛じといへり

されは信長の暴なるもとより論と待す光秀土地を畧せん爲に老母と質にしてころしぬる不孝を
信長の賞せられたる君臣共に惡逆の相あへる終を全せざることを理なり

(百五十八) 光秀信長と弑する時秀吉備中より引返さる此時備前の浮田八郎秀家幼少あれども
長臣老將の面々いかなる謀あるや料りおたければ先使を岡山の城にやりて一刻もとく馳上
り吊軍を志候岡山にて相謀べしと云せられける浮田はもとより光秀に心を通じけれを秀吉
の歸路をふさぐべきやいかせんといふ處まかく告來ればさらば城中にて討とるべし願ふ處の
幸なりとひそかに悦あふて其謀とぞ相議しける秀吉六月七日の明がたに高松より引返し
午の刻ばかりに宮内に着てやがて岡山と赴くべしといひふらしけるが俄に霍亂したりとて
臥しければ秀家の使來りたるに近習の者共出逢て只今霍亂にて吐瀉せしが腹の痛少しやみて寢
入候とあへしらひて時を移す其間に秀吉は奥州驛といふ名馬を乗雜卒おまじはり吉井川をわた
り片上を過宇根に馳つけたれば馬つかれたりさて使と岡山にやりて急ぐ事の候てわき道と通り
て過候ぬといはせられしかば浮田の人々皆あきれけるとぞ

(百五十九) 秀吉信長の吊合戦せんとて備中より引返されし時姫路に立よらるべしと人々も
思ひけるに黒田孝隆姫路に馬を駐らるべき事少の間も然るべからず候かりそめの旅にも家出は
遅々する人情なり今度は主君の仇を討べき爲の軍にて候大和の筒井細川を始明智がしたしみあ

る者ども馳加りなばゆゝしき大事なりいゝにやせんと思慮のいまだ決せざる中にいとぞておし
つけられよと謀りたりければよくころいひたれとて一人も姫路へよりたらん者をば忽誅すべ
しとふれさせられけり孝隆先達一人を走らしかし姫路の町人ども河原へ出粥を志たくして軍兵に
もてなすべしと下知したりければ食肴を河原へ持出たりければ立よらずして山崎表へかし付ら
れけり太閤記に姫路に二日滞留といへるの誤なり

(百六十) 光秀信長と殺せし時筒井順慶は光秀としたしければ必與せしあらんと人々思へり
龜田紀伊守其臣日置猪右衛門土倉四郎兵衛丹羽山城三人を使として順慶のもどもやらせらる三
人承て順慶もし明智にくみせば刺殺すべしと申す紀州公いやとよ汝等死せばわが片手を折れ
たるに同じと制せられしかば三人かさねて順慶と軍せんにいくばくの手れひ討死か候べきさら
ば三人も討死すべきにて候三人をもて多くの味方にかへたまへ順慶とうちとらば光秀必敗北す
べしと申て順慶がもどもにゆく順慶出あひていかでか光秀が不義にくみすべきと信長の 吊軍
せんといふにけにも偽ならぬ体なれば三人悦て歸る道よて山城今日順慶いなどいはんに刺
殺さんと思ひて坐中ときつとみたりしまかたへに十六七歳ばかりなる男の順慶が刀持て居たり
しつらたましひ只者ならず順慶に飛のゝるならば頭二つよ切わりつべく見ゆしと語りければ日
置も土倉もされば我等もと思ひつる事よといひけりかの小性は牧野兵太とて武者修行して世ふ

聞ゆる剛の者となりよけり

(百六十一) 光秀信長を殺して安土の城を攻めとし左馬助秀俊に守らせて山崎に打向ひ秀吉と
戦て敗北せり秀俊安土を出て光秀を救んと京をさしてすゝむ處にはや光秀討れたりと聞ゆし
かを坂本の城ふ入んと粟津を北へ大津とさして行所に秀吉の先陣堀久太郎秀政に行あひけり
秀俊小勢なればうち破られぬ本道は敵にふさがれつ湖水に馬をうち入れおよがせければ秀吉の
軍兵ども汀に並居て溺れん有さまと見よと笑ひあへり秀俊は白練に雲龍と狩野永徳にか、せた
る羽織を着二の谷といふ冑を着大鹿毛と名づけたる馬に乗年久しく坂本より有て大津より唐崎ま
での遠淺はよくしりたりたやすく唐崎ばまに乘わけひとつ松の下にて馬よは息あひの薬と飼退
くる敵と見て居たりしが又馬に乗坂本に入る時十玉堂の前まで馬よりかり手綱もて堂に躍き矢
立の硯どり出し明智左馬助潮水とわたせし馬なりと札に書て手とりがみに結つけ坂本の城にい
り光秀の妻子は天守にいれ安士より光秀が奪とり來れる不動國行二字國俊の刀薬研藤四郎の小
脇差なら柴の肩衝乙御前の益などいへる名物の器を唐織の肩衣に包み天守より投おろし其後女
童と刺殺し火をかけて自害せり二の谷の冑に羽織と黄金百兩添て坂本の西教寺に送りけり後に
山中山城守長俊が孫作右衛門友俊冑をのぞみ乞て得たりしが程經て紀伊の士宇佐美造酒助李定
が許に傳えりぬ羽折は行方としらず馬は無双の駿足にて秀吉志津織の軍に此馬に乗れとたり

(百六十二) 信長弒せらる、時 東照宮は泉州堺よおはしましけるに小勢にてかゝる亂れに
 ると三河へいかでか引せられたまふべきと人々いろを失へり 東照宮素より地理をしるし
 めされ河州飯森の宮は要害の地なれを其地と守て軍あらんと仰わりて森口よ着せ給ひし時本多
 忠勝京都に御使に参りけるが道にて變を聞引返して來り敵大勢ひて候らんとく御歸國然るべか
 らんと申すを聞き召案内者いいかゞすべき敵道を要らん必成なりやみくと討れんは口をし
 からばやと仰有ける處に信長より馳走につけられし長谷川竹丸當國の交野郡津田のあたりは信
 長の恩を蒙りたる者のあまた候へば道しるべき候べしと申す宇津越と經て山城の相樂郡を過
 木津川をわたりそれより宇治橋の上一里計東の頼を涉り江州信樂に出それより伊賀の上野鹿伏
 兔越を伊勢の白子に至て船に召れ然るべからんと定られけり忠勝崎崎斬と名づけし鎗を提げ其
 邊の百姓を打具し此殿の案内申せといひてそれより道々の村々にてかくしたりければ津田よ
 りも案内者來りぬ其日は山城相樂郡山田村よとまらせ給ひ所々より心をよせし人々どもあまた
 警衛し奉る穴山梅雪はあれまで從ひ奉りしがひき別れけり
 宇治より木幡越を江州高島に至り濃州ふ越さ甲州に隨るべき旨と申てひき別れしが一揆の爲
 に山城の綴喜郡にて殺されけるぞう
 其翌日本津川に至らせたまふ柴船二艘あり忠勝からんといふに 肯さればあけい奴かな切て棄

んどいふふ恐れてのせ奉るやがて涉りをはらせ給ひて二艘の船皆打りて棄たり其わけの日一
 揆石原村にあつまりて待のけたり大和より從ひ奉りし吉川善兵衛其子主馬助柏の木を馬じるし
 よして先がけして追いらふ柏を家の紋ふせよと仰有けるとぞうりれより宇治田原の地土山口玄蕃
 御膳と獻じて宇治川に至らせ給へば船を一榊原が士原田佐左衛門馬を乗入瀬みして打わたす
 酒井忠次船一艘とさが出して渡し奉り雑卒にいたるまで替わたる事を得たり江州信樂までは
 險路なれども警衛につぎ從へる人々多く一揆手さす事もなし多羅尾四郎兵衛光敏の世々信樂を
 領しけるが其子長兵衛御迎ふ参りたり人心はありがたしと人々恐る、處は忠勝いや、光敏御
 敵するならば彼が家に入れたまはずとものがし奉らじ一向入せ給へと申せば皆尤なりとて立
 よらせ給ふに御もてなしを設け人々勞を忘れたり

又忠勝此とき多羅尾二心有と見ばとらへて刺殺すべしといひける故立よらせたまふともいへ
 べし
 五日には高見嶺を打越たまふ御供も 候ける服部半藏正成のもと伊州生れの八なれば忠勝下知
 して伊賀の案内者したりけり國士あまた参りて警衛を奉りて上栢植より三里半計鹿伏免越と
 いふ深山と越たまひて六日に白子の浦に着せたまひて長谷川竹丸秀一五郎と始として和州山州
 伊州の士に御暇たまはり時と得て濃松に参るべきよし懇に仰を蒙りけりそれより三河に事な

く歸らせたまひぬ伊賀は去年九月信雄攻入て打たたがへられし比逃のくる、者を求出し殺害を
專とせられしるば國士ども三河に參て御恩を蒙りたる人々多かりしかば其徒類皆奮固し奉
りけるとなりやがて明智と追討の爲御軍を出されしに伊賀の國士どもあつまりつとひて參りけ
るを多くは大番に入させ給ひ恩賞にあづかりけり

(百六十三) 黒田美濃守職隆後宗圓わ備前國福岡の人なりしが播磨の小寺藤兵衛政職に仕へて
子官兵衛孝隆と稱す後如水共其功名ありて用られけり播州は其比所々に人々地に據りて守り軍せしが
小寺を五着に有て姫路に小城をかまへ黒田父子あゝに有て秀吉にたのみて信長の旗下に屬す孝
隆の子長政其比は松千代といひしを人質にして秀吉の居城近江の長濱に置たり此比毛利家の兵
勢強かりしかば小寺約を變せんとす孝隆此は然るべからず信長物わらざり人なれども一旦天下に
旗とあげられん行末はしらず先時の宜しきに隨ふべし松千代を棄るを悲みかく申すに非ずとい
さめけり小寺聞入す孝隆父宗圓に父子ども誅せられぬべき密謀と告宗圓物なれたる士五六人呼
わつめ所存と問に官兵衛五着に至られなば危かるべしといふ孝隆されば諫は尤もれども事も
見ずして姫路にたてこもらんは君に弓とひくに非ずや五着に赴きて力を盡し奉公しかなはずは
自害せん其後人々心を合せ父の御事たのみまかする由決斷せられしかば人々父子おし隔られむ
はいか々候べき只病として五着の奴原に使もて編誦ひ欺くにしくべからず討手來らむ力なし其

後一戦を遂て五着を打破るべし罪なくて討んとする惡逆の人天の咎なからんやと口々にいへど
も孝隆 各存する旨の誠にことわりなれども今病といはんは實とい聞入し 必主君は叛くど人
も誅られん事士の志に非ず君は深く思ひ入たる忠の空しくならんは運のきはぬなれば力なし
われ一人誅せられたりともいひにかせん此姫路とだに取れずは天下の安危歲月を經ずして定る
べしとてとまる色の見はされば宗圓家の恥を思ひて身をすてむと思ひ定る事士の志なりとく
五着にゆきて事かなはずは自殺せよあとの事は心安く思ひ候へ君の志たがふともわれ叛くべ
のらずといひしかば孝隆打わらひさらばとて座を立人々只今思召きられたの仰は遺言にあ
らずやもし五着にて難のがれたまはずは其時人々五着の城と枕ふせんと誓ひけり宗圓官兵衛
は官兵衛をせよ人々は人の志とせよと下知されしかば孝隆五着に趣けり宗圓みかくり
子ながらも恥かしき事なり先だつべき親の留りて子に死ねといふまそ口をしけれされども君恩
淺からざるは人の存る處なり今讒言と信せらるゝこり悲しけれ孝隆をやらすして引こもり謀叛
して命はとしき物ぞと教るは父の道は非ず仇となりて身を殺すは恥とする道なりけりとてさめ
いゝと泣たりけるがさう五着にてたばかりてみんな今姫路に弓をひく駁なし酒もりして時々
舞うたひて日をおくれといひしと孝隆は五着に行て心おくれべき人のもとに使して求め來れる
着ありとて装ししめやかに語りて打とけたる体なればいかにつくるふとも必の外にあらこれぬ

事はわらじなどいひわへり又此を疑て黒田父子は謀たくまじき者よてよき士あまた有城よ
 こもる用意せん間に官兵衛と以て欺くべきも計めたしとて姫路の様を聞ふ宗圓金剛も舞まはせ
 て打とけたる体なればさては別の事もわらじとへり此時攝州荒木攝津守村重は毛利に屬し信
 長と戦ひ利あらずして有岡の城にひきこもる此由小寺聞て孝隆とよびてこれ毛利にくみすべき
 とは内々荒木といひかはしたる故なり今毛利家にたよらん事はわが過なりと覺ゆるぞされど
 も此中、にて手ざれとせんに表裏者といはれんも口としければとく有岡にゆいて荒木と謀ても
 し聞入バ秀吉に謀りて信長と荒木和平をとり行ふべし攝州信長に從はわれも眞に心をひるが
 へして信長に從ふべしといへば孝隆聞て信長と荒木と和平は思ひよりも候はず荒木度々信長に
 背きたればいかで其言を信せらるべき参りたりともいたづら事ならん然るも辭し申せば勇なき
 に似たりとて有岡に趣く路姫路に立よりて父子對面し有岡に至らば必首をはぬべしかあさへて
 囚とするか二つの中に過候まじ五着に死んより有岡にて死候は信長も聞又世の思われどもな
 り候べしと思ひ切たる色と宗圓見て涙にむせびしを「物をもいはざりしがや、有て誠に困厄の
 至極なれども名あかへて身とすつるは義と思ふ故なりとて見送りしがば孝隆有岡に趣きたり小
 寺兼て村重と密に毛利に一味すべきに黒田父子人質の松千代を信長に出し置たればかの父子は
 織田に内通の志ありと告しらせつれば有岡の本丸によび入生送りて牢におしこみけり五着に此

由聞はしかは小寺いつはりて齒がみをなし荒木が狼籍の次第遺恨深し然れども此上は信長よ一
 味のころと易て毛利に與し官兵衛を引とる謀や有べきといはせしかは宗圓怒て官兵衛生と
 りに成しかば是非の論なし年老たる身の子と失ひ候事は誠に力なき次第なり然るも官兵衛をす
 くせん事いはれなきに非れども先松千代を信長に出し候事ハ君も又臣父子と相計れる處にて候
 ん今度官兵衛を有岡よて捕へたるは荒木が横さまのふるまひなり相はかれる處の人しちを棄て
 かしとめたる者をたすくべきは逆ならずや只順道に隨て天の冥見を待にしかずわれわかき贈
 より度々の軍よ臨み小寺の家の危難を救候に今齡かたふきたのみ切たる長子をすて候事は口を
 しく候へども首をくだかるゝとも毛利に一味せよとの仰をは得承らじとて刀を抜き搦てけれ
 ば使も言なくて歸りけり宗圓が士ども五着と攻破らんといへども川ひす村重心あらばいたはる
 べしもし五着を攻なば村重も官兵衛を殺害すべししらぬさまにてわれよかくあらんと思て官兵
 衛が女房をば潜よ此頃引とり置たりとて驚かず村重は小寺にたのまれて孝隆を生どりたれども
 己かかたきよも非ればいたはり置けりかくて信長有岡を攻るよ及びて毛利家の後番もせされば
 城落たりけり孝隆は牢の中よわきれて有ける處よ栗山備後其時時々有岡よもきてしのびて商家
 よあたらひ牢の後の沼より姫路の事どもかたりし事度々よて案内としりたれば牢に走り行て見
 れば番人も落うせたり此はと驚き且悦て善助すて置たる斧にて鎖を破り引たてければ三年

居かゝみ其上に濕瘡と病て起事あたはずのたへなる半中の人をたのみかきおひせて城と出奇手の陣にもきさて姫路に歸る事と得たり秀吉播州に攻入るに及て小寺は但馬におち行黒田父子危難を脱る、事と得て孝隆に宍粟郡と賜り姫路を秀吉の城とす後に如水と稱して智謀たくましく秀吉の功臣第一と聞はしわぶの孝隆なり

(百六十四) 黒田孝隆播州にて秀吉の命を請長の坪といふ城と攻落し井口猪之介三宅藤十郎に其城を預け孝隆は秀吉の先陣たる處に其城より逃落たる者ども一族と催し其夜攻よせたり井口三宅人も少く攻破りて普請もいまだせざれば守りがたし殿いまだ遠くはゆるせたまはじ切ぬけてまわり後巻の事申すべしと云合せ三宅は百二十人計にて搦手に有しが人数を減し二十人計を連圍を出る敵利を得て攻入たり井口は大手にて防戦しが翌朝辰の刻後巻の旗先見ゆる比羅刀にて片股をなぎ落され石垣にたより居たれども敵恐れて近付ず最後に大音あげ此城の大將井口猪之介を首とれとて自害しけり藤十郎は後三宅若狹とて武名あり猪之介に三人の弟あり六太夫甚十郎與一之助といふ六太夫は播州北條の構を守りて討死しけりある時孝隆の士罪ありて討手を向らるゝに却て討手と切て兄弟三人町に出大なる屋に取こもりたり甚十郎見て參らんといへども孝隆ゆるされざりしに再三に及ければさらばとてゆるされたり甚十郎其處よりゆくと忍門の潜戸をひき放し楯よりて飛こみ戸を以て二人と打伏せ一人は切殺し打倒したる二人も切て

首三つとりて馬ふ乗二町計歸る處に罪科人の從者主人乃首とみて鎗にて甚十郎が馬上を目かけ飛かゝりて突つかれながら其者を切てすてたれとも痛手にて馬より落少時有て蘇生したるを戸板にのせて來る孝隆膝を枕にさせ手は如何と問るゝ如此に候と一言いひて終れり兄弟三人皆わが爲に死たる事報ゆるに詞なしとて孝隆其父與二右衛門が宅より自往て吊はれ與一之助七八歳なるを呼出さる既九つに成ける比三人の兄は勇氣ゆゑしき者なりけれども人の生質は計がたければ試んと思ひて磔とみつるやと問るゝにみずと答ふ今夜は月明なりその所の磔木の下にゆきしるしを立て歸んやといはるゝに承候とて自御幣と切り竹よつけてあたへらるゝを與一持行て立んとするゝ磔木動くを見て死きらぬの留をさしてとらせんとて木にのぼるに驚て磔木より飛下り逃るを與一さてはにくき次第なりのがすまじと追かくるせん方なく宮のありし内へ入戸をたつればいつまで待ても出るをきらん物とを呼るさま、いあすかま名といへども歸らざれば殿の仰よておぼしの爲よ來たりきさせ給ふ帷子の片袖を證據にとりてゆるされよといふによりて歸りぬ朝鮮にて竹も木もなき廣野に一筋の道窪くて切通しに似て其向ふ處大山の麓よて曲尺の如し大穴を穿ち射手を籠置て行かゝる日本人あまた射殺され屍相重れり山かげの敵多少をしらざればすゝむ者なし井口が從者山崎喜兵衛見て參らん馬を扣て待れ候へともひすて走りこむ井口も馬より下りて走り入山崎先射手三人と討とり其首を持って大音あげ

て名のりたり井口攻入退ちらす井口其時は兵助といひけり此賞美に朱柄の鎗をゆるされ候へど申す卒爾にゆるしがたし一日に首七ツとりてこそ朱柄はゆるさる、と申聞へて候と人々申けるゆゑ事延にけるが其後井口一日に首七ツ山崎も首六ツとりしかを朱柄を兵助にゆるされたり晩年に村田出羽吉次と稱しけり

(百六十五) 別所家にて首供養したる人有と孝隆聞て秦桐若首二十一とりたるに惜むべきは死したりき吉田六之介正利供養すべしといはれしに正利首數二十七とりて候とて辭したりけり孝隆小氣なる男かな今年三十一歳なり此後首とるまじとや先供養して後に其數を合せよとて米百石あたへ供養して播州青山の南に塚と築きたり後所々の合戰朝鮮の軍までにとりたる首五十ふ及べり後壹岐といふ

(百六十六) 天正五年黒田孝隆播州佐用の城を攻る時生田木屋之介夜中忍びて城際に近づきより懐中の小鏝をもて塀柱の根と切目とを切して翌日城攻にかの柱に鈎繩と付て引倒し先がけして城に入けり木屋之介も隅田小介といふ日向國隅田刑部少輔が嫡子なり十六歳の時傍輩を討て出奔し播州を行て孝隆の士井上九郎右衛門と頼みけるも留置いまだ對面せざる處に其夜隣家に人を殺し取籠りたる者あり夫をからめ出すに付即時に孝隆より申てそれより奉公しけり播州生田城のにて高名ありこれによりて生田木屋之介と姓名をたまはる是りの高名をながく顯

さん露とかや

(百六十七) 文明十五年十二月十三日備前福岡の戦

備前はもと赤松氏世々領せしに嘉吉元年赤松満祐滅亡の後備前とは赤松相摸守教之と賜はり教之の代官小嶋大和守備前に有應仁の亂の後備前津高郡金川村玉松の城主松田左近將監元成を細川勝元相語らひしかば元成兵をまつめ小嶋に攻んとする事より赤松が家人ちりくになりし者共元成にくみし小嶋と攻おとしぬ赤松兵部少輔政則元成を賞して伊福の郷に置ぬ山名宗全細川勝元共に病死の後京都は少しづかなれども諸國は彌大に亂れ松田が一族をも備前西郡の中あまた押領す政則と將軍家より功を賞せられ播磨備前美作を返し賜りぬ山名右衛門督政豊これと怒り文明十一年九月京都を出て但馬の國に馳下るかれば政則も播磨に馳つけて此ついで備前の松田が恣に攻とりたる所とせめたゞさんとせり元成此由を聞兵糧用意の爲にしたる所は返すべけれども伊福の郷に於ては軍攻によりて賜はりたる處なれば返すべからずこれハ事に托してわれを打亡んの謀ならんとて金川に城を構ふ此城は麓は大川流れ峯高く四方險にて要害よき地なりされども後卷の手だてを謀り備後國山名俊豊に告て備前を切とりまぬらす可と云ければ俊豊是を悦べり政則備前より越き松田がおして已め地としたる所々をとり返しければ文明十五年九月山名も備後の尾道を出て同國分寺より着三千餘をかり

僅し十一月七日備前の國に打入しかば松田が一族相あつまり邑久郡福岡の城の西北の山に陣
とりたり福岡の城は東西に大川流れ中よ島山あるを城に據て政則の守護代浦上喜三郎則國を
始として二千餘人たて籠り川上の瀬は長船右京亮等よ野伏と添て陣とりたり十一月廿一日お
しよせて合戦あり浦上が家人に猶村與三兵衛同又四郎とて兄弟あり是より前よ元成よ奉公し
ける因ありしかば密よかたらひて十一月廿三日夜半風はげしき便に陣屋に火をかけたり寄手
内通に力を得てやがて攻よせたりしよ城中さびしう支戦て追返す其後事あらひれて猶村兄弟
をからめどりこれを誅しぬ寄手其後相ばかりて十二月十三日に又富岡といふ小山に兵よ出す
城よりも打て出散散ふ相戦ふ寄手も城兵も討る、者多し

福井小次郎はもと京都の人なりしが四歳の比父源左衛門當國の在番の時連下り城中よありしが
ことし廿一歳なるが其日の軍に父子の間を敵味方よおま隔られ父は城中よ入たると思ひ走り
歸りて尋るに見得ざれば又城外に打出て寄手よ向て福井小次郎と名乗たてさま横さま切て廻
りしがあまりに戦ひ疲れしを家人肩にかけて城中よ引入しに淺手深手二十六所被りければ終に
死したり父城に歸りて小次郎が手箱を開て見るよわまた書置たる其中に母の方へ幼少より分れ
まゐらせて此まよ討死せば御なげき有んこそ心よかり候へしば一此世に残り給ふもと終に
は逢奉るべきにて候へを思しめしわけてなぐさませ候へとこまよと書ておくに「生れこし親

子の契りいゝなれハ同じ世にたに隔はつらむ」と書たりしによりて思ひ定めたる討死なりと人
言をしみけるとぞ

(百六十八) 文明十六年正月六日又福岡にて軍あり城兵敗北する處に薬師寺四郎左衛門藤刀を
とり返し合せ爰にて討死するよとて支戦ふ同彌四郎等四郎左衛門を討せしとつて返し津坂の
山の麓より城際まで僅の兵にて多勢を防て拂退にしけり寄手の中に福屋九郎右衛門とて剛の者
鐵形打たる冑を着透間もあく四郎左衛門に切てか、りしに四郎左衛門が家の士返し合せて福屋
は討れぬされども寄手彌ふひつめしかば薬師寺次郎左衛門額田十郎左衛門片岡孫左衛門三人
引返し枕をならべて切死にしたりけり是は三人必死と約束したる故とぞ是より前三人物がたり
せし時次郎左衛門いひけるは此度の軍必味方打まくべし松田はもとより當國の者なり後卷を
味方より申せども播州の加勢も來らず政則眞弓峠の軍に打まけ姫路ふ引退しと聞ゆれを味方は
力よ失ひぬらばとて討死すべき身にて人の後にながらへてあらんも本意にあらす重て軍あ
らば必討死せんと語りければ兩人聞てたれくも同じく存る事とよ互よ同心處に討死せん
と約束まけるが今日次郎左衛門打出ると唯今敵の手にわたるべき首なり最後の對面すべしと
て鏡に向てにつこと笑ひて出しとを額田岡本は筑後守に向ひて予にて候又三郎は一子なればと
りわけて不便に存る也われと一所にあらば必死をのがすべからず宜しく計ひたまはれといひけ

れば心得たりとて引わかちしかをさふ討死をせざりしとなり片岡はわが家來に向てわが首必敵にどらるべしこれをするしむ死體を尋ねよとて小よりとめて左の二腕を二重に結させたりしが果して是をしるしに死體と求め得たりとてかや

(百六十九) 山崎合戦の時堀久太郎秀政の士の子何がしと以へる者明智がもとに奉公して有しが光秀夜のいまだ明ざる内そ寶寺の山に兵とあしあぐべしと謀りしと父のもとに告りておもひよらず敵味方となり明日は一戦に及ぶん事を歡きける其書狀と則秀政に見せたりければ秀政夜半に寶寺の山におし上り陣し待かけたりけるを以かで知べき夜明がたに明智が先手押寄せたる處を秀政山上より鉄炮と打かけ不意に切てか、り追崩して一戦に利を得たり

(百七十) 山崎の合戦に明智が先陣と護國公の先陣と戦をいどむ時に侍大將森寺政右衛門忠勝眞先かけて敵を追たつる森寺が馬印檜木笠なりしと明智が者共見てけふ檜木笠の馬じるし持せたる大剛の者下知せし有さま目をかどろかし候姓名を承らむやと度々呼はりけるを秀吉聞てけふの軍森寺が一人の武名をあげしとて桐の紋付たるのををあらへられけり

(百七十一) 山崎の軍に堀尾帶刀吉晴の士則武三太夫首を取て吉晴の前に来る吉晴おもひしよりも出かしたりと詞をのけられしかば則武怒て首を提てそ、みよりかゝる時は大將も目のくらくなる物と候則武三太夫が取たる首よく御覽候へと罵る吉晴もにくき奴哉といふま、に刀を抽

て斬られしと宵の星を削りたり則武眞一文字に敵の中にかけ入又首を取て歸吉晴は必則武は討死せんと悔おもはれま處に則武來れば大悦んで汝をさきにはめたる詞賞する餘りにおもひしよりもといへる剛の者にいふべき詞あらずわが過にてこゝろあれ汝が二度の先がけ大きにすぐれしよと感ぜられけり

(百七十二) 天正十年瀧川左近將監一益の信長の命により關東の管領として諸將の質をとり上野の厩橋にありける處に六月七日信長弒せらるゝの變聞老臣ども事をかくさんといへども一益惡事千里といふ諺あり秘すること能はじとて上州嶺の城主小幡上總介信眞鷹巢の城主鷹巢三河守信尙金山の城主由良信濃守國繁館林の城主長尾但馬守顯長小股の城主澁川相摸守義勝倉賀野の城主倉賀野淡路守秀景白倉の城主白倉左衛門佐藤岡の城主内藤大和守秋宣安中の城主安中越前守高山の城主高山遠江守重光五開の城主五開刑部小泉の城主富岡六郎四郎石倉の城主兵根縫殿介大戸の城主大戸民部直光木部の城主木部宮内貞利和田の城主和田右兵衛太夫信業那波の城主那波對馬守宗元武州忍の城主成田下總守深谷の城主深谷左兵衛憲盛松山の城主上田又次郎政朝等の諸將を招き信長の變をつけ各の八質を歸しいそぎ上京して吊軍すべき旨をかたる諸將大に感じ此一大事と告て八質を歸されんと候にいかでか二心候べき八質を其まゝ置て仰に従ふべしといへば一益諸將の義心謝するよ詞も候はす北條の表裡定めて一益を討取て上野を

かし取べきあらむ此方より打向ひ一軍せんものをとて城には同姓の彦次郎忠社を守りに置一萬計の兵を率めて神奈川に押出す

一説に北條家より人質を渡しはやく城を出よさらずは一戦をへしと云送る一益吾信長の命を受關東の管領たり今危に臨て何ぞ北條が下知に付べきやとて兵と出せりともいへり

北條氏直果して小田原より兵を出し武州兒玉郡本庄に著て先陣北條安房守氏邦神奈川にれし寄す一益ハ川を後よして相戦ふ大敵支がたく討る、者多し一益麻橋に歸り其日討死せし人々の姓名を過去帳に書て黄金ノ添寺に送りて供養し諸將をあつめ暇乞とて酒宴し一益鼓をうち兵の交り頼ある中乃どうたひければ倉賀野淡路守なおり今はと鳴とりとはやし終夜酌酔て太刀刀取出し上州の諸將に引出物にし懇に暇を乞て六月二十日麻橋を打出て各人質と歸しけれども皆請取ずして驛馬等の事沙汰し是と送りて笛吹嶺に至る時國人の人質恣く歸し木曾路より歸京す瀧川彦次郎は一益が長男三九郎二男八九を伴ひ木曾路よかゝる時一揆起り八九と奪ひとられまを一益が古市市九兵衛一揆を追拂ひ八九と奪ひとりて一益と同じく長島に歸る
一説神奈川の合戦に八九生捕れしを古市進討て其敵を切ふせ八九を奪ひ取て連歸るといへり
また笹岡平右衛門津田治右衛門ふみ留りて討死しける其間に一益兵を納て麻橋に歸るといへり
笹岡平右衛門は一益の馬とりより取たてられ氏は笹岡彦次郎是をわたふ武功度々に及て士

大將となり武者奉行かり又酒宴の倉賀野よての事ともいへり

關東よて一益麻橋と引はらひたるふるまひ殊に賞美しけるごと

(百七十三) 天正十年五月廿八日光秀愛宕山の西坊にて百韻の連歌しける

ときわ今あめが下しる五月かな

光秀

水上せさる庭のなつ山

西坊

花おつるあがれの末をせきとめて

紹巴

明智本姓土岐氏なれば時と土岐とよみを通はして天下と取の意を舍めり秀吉既に光秀を討て後連哥を聞き大に怒り紹巴を呼天が下しるといふ時は天下を奪ふの心あらはれたり汝しらざるやと責らる、紹巴其發句は天が下なると候と申しからは懷紙と見よとて愛宕山より取來て見るに天が下しると書たり紹巴涙を流して是とみ給へ懷紙と削て天が下しると書換たる迹分明なりと申すみなげにも書かへぬとて秀吉罪をゆるされけり江村鶴松筆把にてわめが下しると書たれども光秀討て後紹巴密に西坊に心を合せて削て又始のごとくわめが下しると書たりけり
(百七十四) 織田信孝秀吉と弓箭をとる時信孝の乳の人を人質よ秀吉のもとに出し置れしと際よして誅せらるゝの亂の人は幸田彦右衛門とて信孝の士大將なり是より前秀吉信孝の長臣等とかならばるゝに岡本下野守は同心して信孝ふ背きけれども幸田は背らず幸田が母誅せらる



に及て子の彦右衛門に書を送りて我今空しく成ことゆめく歎くべからず親は必子に先たつ習ひなり唯忠義を守りて君よを背き参らせそと云遣はしければ聞人感じあへり天正十一年四月十八日秀吉の先陣信孝の地に責入る時幸田兄弟いさぎよく討死したりけり幸田が母は實は漢の王陵が母の志とも云つべし但し王陵が母の天下を去るしめすべき高祖の事を識たれども只今危難に迫れる織田家に忠を盡せと云へる眞にありがたきことあるべし

(百七十五) 佐久間玄蕃盛政柳瀬にて中川清秀を討取りける時秀吉長濱より一騎がけにて來られける志津が嶽に到れば日暮ぬ陣の相去る事二里計なり盛政使を以て早くも軍を寄られ候相待候ほどよ夜明は矢合仕るべしと云送りける秀吉聞て是より申さんよ、しくも承り候明日いさぎよく軍をとげ候べしとて使を返して後吾も忘れさせ夜討せんとの事ならん遠き異國の張良はしらす我を誑るべき者日本よ有との覺えずとて野にも山にもかかりを透間なく焚て白日の如し佐久間は敵人馬の行程を急て疲れたる處へするりと押奇打破らんとおもひけるに秀吉の謀に夜討の支度空しく成にけり

(百七十六) 志津が嶽の合戦に堀久太郎秀政兵を分ち出さんとする時其臣堀七郎兵衛押留て曰勝家の陳より佐久間が陣に頻に使來ると見ゆ疾引とれとの事ならむ若引取は玄蕃本の道をば歸るべからずまからば間近き所にて戰有べし玄蕃引取ずは勝家必來て軍あるべし此二ツを出べ

からず兵を分たすして待へしといふ玄蕃も退す柴田も進ざりまかを勝家運盡たりと云しが果して敗北しけり又志津が嶽の事を老功の人に問し勝家の詞のおとく玄蕃引取は勝利と全うすべし玄蕃か言の如く勝家押詰來らば必敗軍すまじきあり兩將互に猶豫して勝と失ひたりとぞかたりける

(百七十七) 志津が嶽にて佐久間が人数亂るべきを秀吉見て近習の人々も向て愛す鎗を合せよと詞を懸らるれば各競ひ進む福島市松加藤虎之介加藤孫六郎片桐助作平野權平脇坂基内糟谷助右衛門七人なり其夜秀吉今日の七本鎗の者として呼れられども誰といふ事を知らず其時指を折てゑぞへられしかを前より進み寄たり是より志津が嶽の七本鎗と世に唱へけり中よも福島壹番に進て鎗を合せたる上首と取たりしるは五千石わたへられけり其餘は皆三千石與へられぬ福島紙の切裂しなへの指物加藤嘉明は紫ほろ清正は紙のしで馬れん片桐は銀の切裂えざる平野は紙子の羽織精谷は金の角取紙のにづるの指物さへれたりとぞ

(百七十八) 志津が嶽の前夜石川兵助と福島市松と口論し既に刺違ふべき体なりしを座に有し面々明日の軍に身と捨て高名と逐らるべきにこはいかなる事ぞと押留ければ石川面々の前にて口も得明ざる市松何とてまはさ鎗先に向ふべき明日わが後影を見よかすと云捨て出けるが直よ柳瀬に趣て只一人眞先にす、みて討死しけり人々其勇氣はいかめえけれども其怒りは戒と

すべしといひあへり秀吉石川が弟長松小感状を與へられけり其文曰
今度三七殿依違軍 擊濃大垣之處柴田修理亮勝家出 張柳瀬欲 遂一戰之時兄兵助先趣
合鎗令擊死拔群之勳也 動發於眼前見之爾雖爲若輩 念兵助之壯志與秩千石向後 愈可抽忠
節者也

天正十一年七月五日

石川長松殿

秀吉

とかゝれたり

(百七十九) 志津が嶽の軍破れて佐久間を生捕來る秀吉見て汝は武勇逞しき者なり助て國を與
ふべし二心なからんやと問に盛政冷笑ひ我も國を與へなば汝と生捕搦ん事今日我身の上の如く
せん新よ恩を受るとも柴田を忘れんやといふ死すべきま及て大紋紅裡廣袖の小袖白帷子も空
だきまて呉られよ一生の終りに風流を盡したし是一つの望なりと言しむを秀吉其望にまかせら
れしかば大に悦んで是と着たりけり玄番其時廿七才みな人をいみあへり

柴田亡て後其從子佐久間久右衛門安次源六郎實政兄弟紀州お遁れ粉川法師三池をかたらひ河
内霧坂に城と構へ後亦南河内天野山の國見を要害として度々軍しけるが遂に秀吉に攻落さる
後に小田原に入南條亡て兄弟金澤の稱名寺にゆりて秀吉傳へ聞伯父勝家の爲に吾と仇とする

志 誠 又大丈夫といふべし今日日本平均しぬれば心を改めよとて安次に一萬五千石實政に一

萬石與へて蒲生氏郷に附らる兄弟氏郷に一禮しける時躰さけると人皆笑しおば氏郷物の思慮
なく汝等か奉公ぶりを彼に競ぶる事よ兄弟とも疊障の士にあらざる物をと云れけり

(百八十) 尼子家十勇士と世に唱へけるは山中鹿之介數原次之介五月早苗之介上田稻葉之介尤
道理之介早川結之介川岸柳之介井筒女之介阿波鳴戸之介破骨障子之介なり

(百八十一) 秀吉信雄を打亡さんと謀て先信雄の長臣岡田長門守津川玄蕃淺井田宮丸瀧川三郎
兵衛とまねき 懇おもてあして後信雄に自害をす、めよさらば忠賞あつく行ふべしと語られけ

り開入すを首を刎ん景色なる上神文を書よと責らる四人刀なく承りぬと云て起請文を書け
り秀吉も約と背かじと神文と出されけり是は一人づゝあたらふべきを一同に括きたるは信雄も

告知らする者有て残る者と誅せさせんとの 謀なり又皆秀吉に實に心服せずとも既に神文を書
たれば疑ひて一和すべからせと思慮せられたるるべし瀧川素僧なりしを信長呼出し四萬石の

地と賜りし身なれば長嶋又歸て信雄に斯と告申せば頓て三人と誅せんとして長門は飯田半兵衛玄
蕃へ土方勘兵衛田宮丸の森源三郎と討手と定められけり土方承りて長門を臣に仰付られ候

へ打留申さんといふ飯田既に定りたるうへは何の申條のあるべきといへば信雄さらば長門と
ば土方討候へ飯田は既に下知したれば討たるに同じとて長門を土方に譲りけり土方が斯云ける

又故あり土方は始彦三郎と云けるがふとく逞しく胸より手足に至るまで毛生熊の如くよて勇猛
 の士也長門常に土方に語りて殿は人の申事軽くしく信せられて日比我を疎まるゝやと度々云け
 るを土方夫はたはふれか又は汝の心の違たるならんといへば長門いやゝ此長門をば必誅せら
 るべし其時汝討手なるべきよたやすく討るべき身よわらずといへば土方聞て討手の仰を奉ら
 んに此勘兵衛ならで又誰か有べきと語りたるに長門仰ふ寄て此七ツ胴切落したる脇指にて汝が
 頭を斬破んと云ける詞は依て斯く申せしなり天正十二年三月三日の禮は岡田信雄の前に出ける
 を相圖とせられけり岡田其日は脇差を横たへて進み出る信雄新造らせたる鉄砲のみよとて指
 出ま此臺尻の穴の何の爲ぞと問るゝに岡田少し差うつむく時土方つと寄引紐たり岡田己とやと
 いふまゝに脇差を七八寸抽けれども大力に強く抱かれて抽もはなたずね合ける處を信雄土方
 放せ我自ら切んと詞と懸られしに臣と共に斬せ給へとてはなさず信雄放されのいつまでも斬ま
 じといはれしかば土方岡田と突はなしざま小脇差を抽て指通せば信雄すかさず切て殺された
 り津川は此騒ぎと聞て走り來りけるが信雄に行逢刀を取延て切たりしに廊下の長押に切付たる
 を飯田傍より刺殺しけり淺井をば森討留たり是よりして秀吉と弓箭をさらけけり
 (百八十二) 平松金次郎重之甲州の温井と同日く天龍川を渡る平松先達て陸に上り船は残れる
 從者温井は無禮の事有て忽ち切殺しけり扱平松は斯といふ間もなくと云けれは無禮する者は

吾も捨指とて色も變せず人みな平松を誹りける處は幾程なく長久手の軍は平松と鳥井金次郎
 と先を争うて鎗を合す平松が相手は森武藏守長可の士山田八右衛門とて始播州三木の城主別所
 長治に仕へて名高き勇士なり平松肥ふどりて小男なりしかば 東照宮さす走廻り不自由ならん
 どて常々笑はせ給ひしに其日御前も進み出不行歩者今日鎗を合せて候と立ながら申て傍若無人
 の有様なり賞せられしかども猶不足なほもひけるに前田利家の士山田出羽其時平一郎とて秀次
 む仕へしが秀次に申て一萬石の祿よてまねかれけり平松是よ約し京へ趣く時心易き朋友に暇乞
 して立去けるを聞し召追て討手と出させ給ふ大剛の平松なればとて第一番ふ渡邊半藏續て河村
 善七郎大久保與一郎坂部治兵衛段々追かけける坂部袋井よて逢平松ハ久能へ行本坂越に遠州
 可睡齋の禪寺 立寄と物語す坂部は兄三十郎も用の事有て横須賀へ行とて打連たり道の別際
 て久しく逢じと馬より下り暇乞する時坂部平松を一太刀斬たるにかゝしたりけし切はつしけ
 れば平松坂部が眉間を切坂部 眩れどもさしもの者にて落人あり打留よと呼はるを聞近所の
 郷氏群り出るにより平松可睡齋へ入たるを取圍み横須賀よりも馳集り寺と取巻けれど平松は
 爰に居らずといふと小僧を捕へて責問ふにより平松何方へも逃る者にあらず爰よて腹切んとて
 立出坂部三十郎に向ひ治兵衛は殊に親しく語りけれども不便をら身にかゝる火を拂ひて是非
 なく切たりといふ三十郎聞て治兵衛疵淺しと答ふ平松吾斬る程にて助るべきや日比の交り故と

やめは刺ざりきといふて腹切とき三十郎介錯せんとすれば平松治兵衛と吾手にかけて今汝も首を討れんは心よからずとて同心せざりしとなり

又一説に平松は度々口論の時後れ有殊遠州新井の渡り舟よて柏原新五郎平松が従者を討たるにめくとして有けれを人々嘲笑ふ 東照宮聞召人は何ともいへ平松が眼ざし剛の者なりと仰られしが果して長久手にて懸り兼たる處に平松書の羽織と着十文字の鎗と提と、み出池田家の軍兵の真中に鎗を入たりける其後出仕の中に諸士に向ひ吾胎内より厚恩を請みだりに一命と捨じと思ひしが今早思ひ残す事なし誰にても出られよ撫切にすべし昔れ金次郎と名思はれり殊外あら者に成たりと大言しけるに一人も答ふる者なき平松が勇名高く聞て先年天王寺勝曼の鎗貝殿塚の鎗備前八濱の鎗をこそ言傳にたれ平松が鎗は近き頃まれありと世の人賞しけり秀次一萬石にて拵かれしかば平松立退けるを聞し召小栗又市渡邊半藏河村善七郎坂部治兵衛を追手に出させ給ひ岡崎へ早飛脚にて本多作左衛門も御下知有平松終よ袋井の北なる可睡齋にて自害すともいへり

(百八十三) 長久手の軍に水野忠重の嫡子勝成の目を病て胃と着す鉢巻したりけると父見て汝が胃はゆをり壺にしたるかと思われしかば父ながら餘りの詞かな眞先がけて首を取か吾首を敵よどらる、か二ツの中よといふま、よ馬引寄て打乗もろ鎧をわて、かけ出す忠重あればいかに

とて太田重助といふ士として呼稱されけれども耳にも聞入す又水野喜右衛門はせ来り引とめんとするを勝成のたど睨て壘の上の諫は聞も入べし只今大軍の中にかへ入功名せん時止れとて引返す様や有るといひすて、秀次の將白井備後守が陣に突てか、り胃首ととりてはせ歸る此日の一番首なり勝成あら者に人を物どもせず忠重の心よ忤ひ虚無僧となりて國々をめぐりて武者修行す後に忠重死して 東照宮勝成に三州菊屋を賜はり日向守と稱して大坂の時大和口の先陣として大功有し人なり勝成十萬石と賜ひて後愈士より下り身をいやしくしてすべて士も貴賤はなきもの也主君となり従者となり互に頼みあひてこそ世はたつ習ひなれされを大事の時い身をすて、忠義をなす事ぞかし汝等我を親と思はれよ我汝たちを子と思はんと常に士にいはれけり年老て鷲野に出る時行歩かなはず蒲團にのりて士よゑ、れ士番所にてはふとん共よ下に居て年寄の鷹狩とかしかるべし鳥とらん爲よあらず心ありての事なりと度いひて打過られけり或時鷹狩の野にて昔勝成に仕へし士をみかけいかになつかしや我方にて祿三百石なりしよ立去て越前みて千石の祿を聞今爰よ來られしはいかにと問に彼士仰の通祿は越前よて増候へども殿の下をいたはり懇もてなし給ふなじみ祿には換がたく暇乞うて歸り候ひぬと申せば勝成大悦び折よふれ思ひ出せしなりとて即日祿を増與へられけりその後勝成隠居して又鷹狩の時彼士の家の門閉たるをみていかにと問る、よ美作守の心に背く事有暇と乞走ぬと答へしかば彼

者は越前の祿千石を捨て小祿の我家としたひて歸り去るに在るに作州の思へるにやのくい
ふ勝成は若き時心得過て武藏の金川根笹流の弟子となり尺八一本携へて虚無僧となりて日本
國をめぐり或時は堂塔に夜を明し或時は野にも山にも日を暮し嶽に艱難にわひ人ふも誹られ
しが一言虚妄といふ事なく不仁のふるまひせざり去故にや今福山十萬石を賜りぬ然れども下の
情としる事はこれ虚無僧たりし故なり返すくも惜むべき士を失ひぬるよ美作は下の事ハしら
れぬぞかしすべてよき士は主君又は頭の下知をも無理ある事は心服せずまこと少しの過ありと
も能士は二度も三度も知らぬ体して猶已がたくは傍輩は諫させんものを美作の政事をげかしき
ぞとて泣れけるとのや

(百八十四) 東照宮小牧に陣しておはしませしが秀吉兵を分ち中入すと聞し召敵の迹に従うて
向はせ給ふ小牧には石川伯耆守敷正酒井左衛門尉忠次本多平八郎忠勝を殘させ給へり然るも秀
吉大軍と出して長久手に向はれけるを見て忠次の秀吉の本陣樂田へ押寄火をかけて攻撃べしと
云けれども石川秀吉後に變有と聞て彌怒られなんと強て押へて止りけり忠勝は秀吉の馬じる
老を見るより僅く五百計引具えて小牧をかけ出小川一筋隔て秀吉に相ならび長久手として馳向
ふ路ふて足輕を進め鉄炮と打るけ一軍せんとすれども秀吉見ざる体にて取合ず龍泉寺の前まで
忠勝馬を川に打入口と洗ふ秀吉あ鹿の角の立物の冑を著たるは大將と誰か見知たると問る、

に稻葉伊豫守道嗣過し年姉川の軍と武者出立見知て候本多平八郎にて候と申もあへぬも秀吉涙
をそらくと流し五百も足らぬ士卒をもて吾八萬の軍おかけ合さんとする千死に一生もなきが
かし然るに道を隙せらせ己が主君の軍は勝利あらせんとの志勇と云忠と云誠と云類なき本多か
な秀吉運強くは軍よかたんあたら者と討べからずとて弓鉄炮を制せられけり斯て忠勝長久手よ
馳付たれば軍終て敵味方とも見えずこはいかにといふ所は味方打勝小畑に入せ給へりと聞
もみにもんで退付奉り御馬の側に乗寄云がひなくも小牧お拾せ給ひかゝる軍に合不申と申け
れば聞し召取あへず汝が躬は我身なりとかもひて小牧にとめ後より危き事なくとて軍には勝
たれと仰ありけり其後天正十八年秀吉北條を打亡し七月廿六日野州宇津宮まで平八を呼れけり
忠勝は下總の應南に有けるが急ぎ參る秀吉諸大將並居たる中に呼出し熊野より佐藤四郎忠信が
冑と得させたる者有四郎が忠義後世まで語傳ふ四郎に劣らぬ人は着せなんとかもふに誰か有と
いへれしと答ふる人なく其時秀吉四郎にまされる者は平八なり子細いしりくならぬ長久手の
軍物がたり忠勝の有様密に云れて則冑と忠勝に賜りければ忠勝面目身にあまる心地して出
られけるに其晩又忠勝を招き傍の人を遣ぎけ自茶と興へけふいくらも諸大將並居たる中にて
汝が武勇と褒擧たるは秀吉の思ならずや主君の恩といずれぞと問る、に首と低て物云す類よと
いへければ忠勝承り誠に忝しとは申せども累世の主君の恩とならふべきに非ずと申れしかば秀

吉 愈 感 せ ら れ け り

一説に忠信の冑と賜はりければ悦ぶ色なしいかにとどへいやはと忠信武勇のみ羨しくもなし主君と仰ぎし九郎判官も吾爵位も同じ唯世々家に傳へたる鹿角の冑こそよけれど云れしとぞ後忠信の冑は二男忠朝に譲り鹿角の冑を嫡子忠政に譲られたりき忠朝もいふ所やありけん其冑にしころも付ずして置れとぞ

(百八十五) 小牧陣の時榊原康政秀吉の事を誅て札に書織田家に向ひて弓を引事不義逆の至りなりと書て所々に立たるを秀吉齒嚙していかり康政が首をとらん者には十萬石の地を與へんとぞ觸られける其後 東照宮と和平して婚姻の約ありける始の使ふ康政と賜はるべしと秀吉申されて京に上りしに秀吉對面し小牧にて札を立たる時汝が悪き首を一目見ん事とのみ思ひしに今斯和睦及べば其志を悦び思ふなり此事を直に云んが爲に迎へたり小平太と呼んはいかなり叙爵然るべしとて式部大輔とて此時よりぞ申ける倍蓰禮有て厚く馳走ありけるとぞ

(百八十六) 勝頼亡て後武田家の士多く 東照宮に仕へ奉る前に領したる祿知と書てけれど仰出されけるに初鹿野傳右衛門へ加藤駿河守が二男にて兄の源五郎は川中島にて討死しけり傳右衛門其祿を受繼たりし故祿地を書て出しけるが駿河守の二百五十貫の地をも合せて番記せり駿河守が嫡子丹波三男を彌平次と云兄弟共に傳右衛門は源五郎が祿をこそ申へけれ駿河守が祿と

合する事の有べきやと云事聞て本領四百貫のみ下し賜りぬ傳右衛門人は皆親兄弟の祿地を記し出して其儘賜りたるに吾ひとり不然とて御朱印に墨を塗り語はざるゆゑにかゝる有様なりといふを岩間大藏左衛門 訴 申て無禮なりと仰有て祿を召放さる翌年長久手にて傳右衛門密に御旗本に來り眞先のけ三宅彌次兵衛と争ひて首を取傳右衛門は内藤四郎左衛門が 傍よ參りて申給はらんやと云を其間十問計にて御覽せられ傳右衛門連來れと仰られしかば御前に 跪くいかに汝が無禮なれどもけふ軍の先がけたればゆるすと御詞に傳右衛門涙と流しける時三宅先に臣を一番高名と御詞をかけさせ給へと傳右衛門は猶すゝみて首と取候と申ければ三宅が實なる志と感じさせ給ひけり

(百八十七) 東照宮の小牧の陣を秀吉二重堀の城の櫓に上り見やりて高山右近太夫幸任と呼で小牧に書翰を送り一戦せんと思ふなり十三萬の軍兵陣を整へて押出し後に柵の木結て引退ざる手立せんはいかよと云れしかを高山是は思召止らせ給へ小牧よりの返書必怒らせ給はん事と申來るべしといへども秀吉増田長盛も書翰を書せ長岡忠興に敵陣の木戸なる道に立よと下知せらる高山色を變じ仰なりとも行なとぞ制しける秀吉忠興は弓箭のはげしき所へは思ひもよらじ剛の者を使よせんと云れしかば忠興高山を睨みてつと立て馬に乘竹に書翰と挟み乘行て村だつたる松原の小塚の上で押立て踊るを見て秀吉悦ばるや、有て小牧の陣より月毛の馬に乘紅

吉愈感せられけり

一説に忠信の冑と賜はりけれども悦ぶ色なしいかにとどへばいやと忠信武勇さのみ羨しくもなし主君と仰ぎし九郎判官も吾爵位も同じ唯世々家に傳へたる鹿角の冑こそよけれと云れしとぞ後忠信の冑は二男忠朝に譲り鹿角の冑を嫡子忠政に譲られたりき忠朝もいふ所やありけん其冑にしころも付ずして置れとぞ

(百八十五) 小牧陣の時榊原康政秀吉の事を誹り札に書織田家に向ひて弓を引事不義逆の至りなりと書て所々に立たるを秀吉齒嚙していかり康政が首をとらん者には十萬石の地を與へんことを觸られける其後 東照宮と和平して婚姻の約ありける始の使ふ康政と賜はるべしと秀吉申されて京に上りしに秀吉對面し小牧にて札を立たる時汝が悪き首を一目見ん事とのみ思ひしに今斯和陸及べば其志を悦び思ふなり此事を直に云んが爲に迎へたり小平太と呼んはいかになり叙爵然るべしとて式部大輔とて此時よりぞ申ける諸饗禮有て厚く馳走ありけるとぞ

(百八十六) 勝頼亡て後武田家の士多く 東照宮に仕へ奉る前に領したる祿知と書てけれど仰出されけるに初鹿野傳右衛門ハ加藤駿河守が二男にて兄の源五郎は川中島にて討死しけり傳右衛門其祿を受繼たりし故祿地を書て出しけるが駿河守の二百五十貫の地をも合せて番記せり駿河守が嫡子丹波三男を彌平次と云兄弟共に傳右衛門は源五郎が祿をこそ申へけれ駿河守が祿と

合する事の有べきやと云事聞て本領四百貫のみ下し賜りぬ傳右衛門人は皆親兄弟の祿地を記し出して其儘賜りたるに吾ひとり不然とて御朱印に墨を塗り詔はざるゆゑにかゝる有様なりといふを岩間大藏左衛門 訴 申て無禮なりと仰有て祿を召放さる翌年長久手にて傳右衛門密に御旗本に來り眞先のけ三宅彌次兵衛と争ひて首を取傳右衛門は内藤四郎左衛門が 傍よ參りて申給はらんやと云を其間十問計にて御覽せられ傳右衛門連來れと仰られしかば御前に 跪くいか

に汝が無禮なれどもけふ軍の先がけしたればゆるすと御詞に傳右衛門涙と流しける時三宅先に臣を一番高名と御詞をかけさせ給へと傳右衛門は猶すゝみて首と取候と申ければ三宅が實なる志と感じさせ給ひけり

(百八十七) 東照宮の小牧の陣を秀吉二重堀の城の櫓に上り見やりて高山右近太夫幸任と呼で小牧に書翰を送り一戦せんと思ふなり十三萬の軍兵陣を整へて押出し後に柵の木結て引退ざる手立せんはいかよと云れしかを高山是は思召 止らせ給へ小牧よりの返書必怒らせ給はん事と申來るべしといへども秀吉増田長盛よ書翰を書せ長岡忠興に敵陣の木戸なる道に立よと下知らせる高山色を變じ仰なりとも行なとぞ制しける秀吉忠興は弓箭のはげしき所へは思ひもよらじ剛の者を使よせんよと云れしかば忠興高山を睨みてつと立て馬に乘竹に書翰と挟み乘行て村だつたる松原の小塚の上で押立て歸るを見て秀吉悦ばるや、有て小牧の陣より月毛の馬に乘紅

の母衣掛たる武者書翰と取て歸るしばらく有て金の枇杷へらの指物さし鹿毛なる馬に乗たる武者書翰を竹にのさみ元の所に立てけりあれ取來れと云れしかば忠興又馬に乗馳行て取歸るを秀吉披て讀るゝに 東照宮の返書ふはなく渡邊半藏重綱水野太郎作兵衛が書簡にて其詞に後に柵結て一足も引まじきと思ひ定めて軍あらん事鬼も角もの事候三河者下部に至るまで一足も逃ると申事露斗も不存候とぞ書たりけり秀吉讀も終らざる怒られければ高山され斯候はんとて申たる事よと居たけ高に成て申も秀吉冷笑ひ馬率出させひたと乗僅四五騎斗にて松原の小塚に上り臂を打た、き敵の大將是嶺へと大音に呼るを小牧より唐冠の冑に孔雀の尾の羽織着たるは秀吉よあますなとて鉄砲と打かくる秀吉天下の大將軍には矢れ中る物かはと云てしつゝと歸られけり

(百八十八) 尾州蟹江に瀧川一益中入すと告來る時祐筆尊通といふ者御出馬可被成者也と書けるに 東照宮此可の字を削れ今日よ於ては一字も大切也太敵を前に置可出馬とはかくれたり出馬するに其時をぬかさぬ也と仰られけり

(百八十九) 東照宮長久手の軍に勝せ給ひ勢州蟹江の城前田與十郎を御攻めらんとて打向はせ給ふ所に加勢多く馳入けるを御覽じて敵いかはとも城中へ入よと仰られを酒井左衛門尉忠次承て何とて押留給へぬぞやと申す 東照宮いか々思ふぞと御尋ありしかば忠次城は堅固なり多

勢こもりなば争か攻落すべきいかなる御心候と申すを聞召大將 謀と云やうや有と仰られけるが其後援兵の乘來りける船と追拂はせ粮道を絶せ給へば粮 忽乏しく成て城を渡し降參しけり 東照宮四十二才の御時なりと云や

(百九十) 蟹江にて井伊直政兵をす、む秀吉の舟手大將九鬼大隅守嘉隆日本丸といふ大船に乗蟹江の湊に漕入て打上り堤と隔て戦はんとせしが引退て船に乗とるに入江の湊に 東照宮の兵船角新造といへるを横様にして左右に亂杭をうち真中に取圍んとす直政は追かくる九鬼が者共多く討れ水主楫取 驚駭ぎて船と出し得ずかゝる處に九鬼が士村田七兵衛鉄砲と薬を込間宮造酒亮が船先よて下知しけるに大音上て静と相だめにするを兩軍なりを静めて見物す其中に九鬼が者共ひたゝと船に乗組たるは村田が躬を捨てしづめん爲の 謀ゆゑなり斯て村田おもふ矢坪に中りて間宮倒れしかば九鬼が者共力を得鉄砲を打かけ船と乗浮めて湊を出にけり 百九十一 秀吉小牧に陣と出す時紀州の根來雜賀の一揆を押へんため中村式部少輔一氏と岸和田の城を置れけり紀州の一揆秀吉大坂を打立と聞て二萬三千計二手に分れ一手は東の山際より堺へ向ひ一手は岸和田に押寄るはやり雄の若者ども二騎三騎城を出て密手に向ひしかば士大將早川助右衛門川毛惣左衛門引歸れと使をやるを一氏聞てかゝる時進で重りたる武者を引んとすれば敗北するものよいざ打出んとて鉄蓋が蓋と名付し冑の緒を城を乗出す先に進んだる

者共菅笠の馬印をふりかへり見てすはや殿よと出給へ軍は勝たるよと云程こそあれ一萬餘の紀州勢に面もふらそ切掛り打破て七筋に分て逃るゝ追ふ一氏は三百計にて堂の池といふ所に拵て先陣の歸るを待處よ堺海道に馬煙くらう見ゆ是は堺に向ひたる敵の返し來れる也荒手の大軍よかけ合て戦ん事思ひもよらず疾風は楯籠らんと口よにいへば一氏いやく退ならば味方氣挫て打負なん一寸も退く時は先陣を捨殺し城よも攻落さるべし一揆何百萬もわれ先陣をだふ切崩すならば二陣は忽敗北すべし我に任せよとて敵の一同ふか、りがたき地の理を判り堂の池を前にして大敵と待れけり一氏馬をば悉く城へ返し候へ馬と引付置時は引退たき心の起るをとて將凡に腰かけ旗本三百計の勢鎧を膝の上に置て折敷たり新藤勘左衛門強弓矢繼早の手利なるの散々よ射る射まらまされて手負死人倒れ重りてためらふ時一氏弓の者の羽壺を勘左衛門に渡せと下知せられしかば愈指詰引詰射ける矢にあだ矢なかりけり一氏麾と取か、れというに立上る黒田如水の大坂よありしが岸和田に敵押寄ると聞子の長政十四歳よなりしが岸和田にあればいざすくはんとて七百計にて敵の後にかけるを一氏見て愈す、みをめささげんで切てか、り退立て八百餘の首を取たり如水は長政いかにとおもふ處ふ黄羅紗の羽織着て鹿毛なる馬にのり今朝討取し首を鞍の四方面に付て馳廻るを見て悦る、事大方ならず秀吉一氏に感狀賜ひてけり一氏は豊臣家諸將の中にも勝れし勇將なれを加藤嘉明もうらやみ慕ひて吾子の明成を式

〔更増〕 織田信長石山本願寺を攻んとて大軍を押向けて取圍みけるが城中鈴木重幸なる者ありて種々謀略と運りして防戦をしける程に信長却て屬々憂惱まされける然れども城中固より糧食に乏しきことをれば城兵之を愛ひ如何にかして糧食を得んと種々心を碎きけるが時しも秋の末なれば最早稻の熟するもの往々に見ゆる程よ城中の諸將之を討取んと憚りくを重幸禁めたししが更に用うべくもあらざれば左らに稻蒔に出でんも亦よから然しなから唯だ無謀よ出するも劍呑なことをなれと我れ聊が謀略を授けんとて數十流の紙旗を興へ之と傍の森林或は敵中よ隠へし竊に精兵を伏置き以て安々と稻を刈取るべしと申けるに諸將然らば軍師の教へに従はんとして馳て小川と一流隔たる此方よ於て頻に稻を刈取り居けるを織田方の士卒見付けてあれく城兵のねどまじさよ此の大敵と拵て稻蒔とは如何にとやよく糧食の盡きぬることゝ覺えたりいでや一蒐に追散せと憚りきけるに腫子を定めてキト彼方の敵中を見れと數十流の旗旗散亂々を見ゆるにぞ倍てこと迂かとは進まれしと暫し躊躇ふてありける程に先鋒の大將來りて此の勳譚と見るに眞の旗旗とは見ゆれども何様風に靡くの様子は眞旗旗としも覺へず或は紙旗のやうにも見ければ、と腰打ち鳴し倍ては城兵偽兵の謀計を以て稻蒔とると覺えたりいでや追散せと彼の小川を乘り越えて追散らせは蜘蛛の守と散亂すが如く追々の體にて逃げ行くを運さしと追進の程に今まで紙旗の偽兵なりと覺はたるもの眞の旗旗にて背のよと咄と開を作ると

者共菅笠の馬印をふりかへり見てすはや殿あそ出給へ軍は勝たるよと云程こそあれ一萬餘の紀州勢に面もふらそ切掛り打破て七筋に分て逃ると追ふ一氏は三百計にて堂の池といふ所に押て先陣の歸るを待處と堺海道に馬煙くらう見ゆ是は堺に向ひたる敵の返し來れる也荒手の大軍よかけ合て戦ん事思ひもよらず疾城に楯籠らんと口々にいへば一氏いやく退ならば味方氣挫て打負なん一寸も退く時は先陣を捨殺し城をも攻落さるべし一揆何百萬も小れ先陣をだふ切崩すならば二陣は忽敗北すべし我に任せよとて敵の一同ふか、りがたき地の理を料り堂の池を前にして大敵を待れけり一氏馬をば悉く城へ返し候へ馬を引付置時は引退たき心の起るぞとて將凡に腰かけ旗本三百計の勢を膝の上に置て折敷たり新藤勘左衛門強弓矢繼早の手利なるの散々射る射まらまされて手負死人倒れ重りてためらふ時一氏弓の者の羽壺を勘左衛門に渡せと下知せられしかば愈指詰引詰射ける矢にあだ矢なかりけり一氏魔と取か、れどいうに立上る黒田如水の大坂ありしが岸和田に敵押寄ると聞子の長政十四歳となりしが岸和田にあればいざすくはんとて七百計にて敵の後にかけ來るを一氏見て愈す、みをめささげんで切てが、り退立て八百餘の首を取たり如水は長政いかにとこもふ處に黄羅紗の羽織着て鹿毛なる馬にのり今朝討取し首を鞍の四方手に付て馳廻るを見て悦る、事大方ならず秀吉一氏に感狀賜ひてけり一氏は豊臣家諸將の中にも勝れし勇將なれを加藤嘉明もうらやみ慕ひて君子の明成を式

〔更増〕 織田信長石山本願寺を攻んとて大軍を押向けて取圍みけるが城中鈴木重幸なる者ありて種々謀略と運らして防戦をしける程に信長却て屢々撃惱まされける然れども城中固より糧食に乏しきことなれば城兵之を愛ひ如何にかして糧食を得んと種々心を碎きけるが時しも秋の末しが更に用うべくもあらざれば左らを稻苅に出でんも亦よからん然しながら唯だ無謀よ出づるも劍呑なことなれを我れ聊か謀略を授けんとて數十流の紙旗を興へ之と傍の森林或ハ敵中へへし竊に精兵を伏置き以て安々と稻を苅取るべしと申けるに諸將然らば軍師の教へに従はんとして馳て小川と一流隔たる此方お於て頻に稻を苅取り居けるを織田方の士卒見付けてあれく城兵のれをましまさよ此の大敵と扣へて稻苅とは如何にぞやよく糧食の盡きぬることゝ覺えたりいでや一蒐に追散せと俾めさけるに腫子を定めてキト彼方の敵中を見れを數十流の旗散亂々々見ゆるにぞ倍てこそ迂かとは進まれじと暫し躊躇ふてありける程に先鋒の大將來りて此の動靜と見るに眞の旗旗とは見ゆれども何様風に靡くの様子は眞旗旗としも覺へず或は紙旗のやうにも見ければハハと腰打ち鳴し倍ては城兵偽兵の謀計を以て稻苅すると覺えたりいでや追散せと彼の小川を乗り越えて追散らせば蜘蛛の子と散亂すが如く這々の體にて逃げ行くを遠ざしと追進も程に今まで紙旗の偽兵なりと覺れたるもの眞の伏兵にて背の方より咄と関を作りて

裏てか、りけるに先に逃げたる兵士も取て返し前後より狭撃ちけるに不慮とくらひし織田方の面々散々になりて敗走せり是に由て城兵は討取りたる多くの稻を荷ふて城中に於て持込みける智將を欺く者は以て未だ愚卒を欺くに足らず愚卒を欺く者は以て未だ智將を欺くに足らず故に智將と欺以て兼て愚卒を欺く者は殆んど稀れなり然るに今鈴木重幸の謀略は一計と以て愚卒と欺き又兼て智將を欺ひけること實に驚くべき堪たり即ち織田方の智將出でざるに於ては通常の偽兵にして止み安々と稻と討取行かんと企てにて若し智將出て偽兵たることを知らば忽ち慮と變て實となし其追撃兵を却て破るの工夫を運らしたるものなり然るに世間並々の武將が計所は智將を欺かんと欲して唯だ其智將を欺くの手術をのみなし愚卒を欺かんと欲して只だ其愚卒と欺くの手段をのみ爲取て其餘に不及に案よ相違して智將を欺かんとしたる所へ愚卒出づるか愚卒を欺かんとしたる所へ智將出づるに於ては忽ち其計る所いすかのいしとくひ違ひ其謀計宜しき高餅ふ屬するのみならず却て我が敗を惹起すの基となりぬること間々之れあり稻刈陣の謀計眞田幸村亦之れあり共に絶妙にして大に人を感せしむるものなり眞田は眞と稻と取ると欲したるにあらざ唯だ敵と計らんとしぬるものにして鈴木は眞に稻を取らんと欲し其目的を遂げんとして計りしものふして其趣きと異すれども其妙は共に一なり但し眞田乃稻刈陣と他所出したれば讀者宜しく参看すべし

部少輔になしけるとぞ

(百九十二) 竹中半兵衛重治は美濃の菩提の城主なり後秀吉の軍奉行たり謀略有人をれども打見たる處は婦人のおとし軍に臨む時も猛威なる事なし馬の皮にて包める甲と若木綿の羽織一の谷と名付たる冑の緒をしめ静り返りて居けり重治向ふ度おとに士卒戦して既勝たりと勇みあへり重治或時軍物語せしに子の左京いまだ幼かりしが座と立ければ重治軍の國の大事あり何方より行と問則にゆくと答ふ重治爰に溺をたるゝとも軍物語の大事の席と立事あるといかられけり

(百九十三) 稻葉治左衛門は美濃齋藤家の士戰場にて必眞先に獨進み出芒の如くなる所居ける故世の人は是を芒乃治左衛門と云けり澤喜藏は美濃飛弾に隠れなく若く頃より功名有草がら島の鎗澤一番なりと云と吾にあらざ稲葉なりと云て互に譲りて決せず澤は吾早く進みたれども稲葉がほろの手をしむる隙に先に乘込たり實は一番稲葉なりといふ人皆是を賞しけり有吉武藏が足輕鐵炮に鎗と持添て鐵炮を持其上に壹番鎗と合せたるが吾一番よあらず園部儀太夫がほろの手をびるを見て駈出ぬ園部が一番也と譲りしと同事にて戦國にかゝる士はまれなる事にこそ

(百九十四)

羽柴下總守勝雅の許に二藏三藏とて物し有いつれの城よての事よ有し下總守城

取てか、りけるに先に逃げたる兵士も取て返し前後より攻撃せけるに不慮とくらひし横田方
 の面々散々になりて敗走せり是に由て城兵は討取りたる多くの船を荷ふて城中に於て持込みける
 智將を欺く者は以て未だ愚卒を欺くに足らず愚卒を欺く者は以て未だ智將を欺くに足らず故
 に智將と欺以て兼て愚卒を欺く者は殆んど種れなり然るに今鈴木重幸の謀略は一計と以て愚
 卒と欺き又兼て智將と欺ひけることを實に驚くべき堪たり即ち横田方の智將出でざるに於ては通
 常の偽兵にして止み安々と船と討取行かんと企てにて若し智將出で偽兵たることを知らば
 忽ち慮と變て實となし其追撃兵を却て破るの工夫を運らしたるものなり然るに世間並々の
 將が計所は智將を欺かんと欲して唯だ其智將を欺くの手術をのみなし愚卒を欺かんと欲して
 只だ其愚卒と欺くの手術をのみ爲取て其餘に不及に案も相違して智將を欺かんとしたる所
 へ愚卒出づるか愚卒を欺かんとしたる所へ智將出づるに於ては忽ち其計る所いすかのいしと
 くひ違ひ其謀計官よ書解ふ屬するのみならず却て我が敗を惹起すの基となりぬること聞々之
 れあり稻刈陣の謀計眞田幸村亦之れあり共に絶妙にして大に人を感せしむるものなり眞田は
 眞と智と取るに欲したるにあらす唯だ敵と計らんとしぬるものにして鈴木は眞に智を取らん
 と欲し其目的を遂げんとして計りしものにして其趣きも異すれども其妙は共に一なり但し眞
 田乃稻刈陣と他所出したらば讀者宜しく参看すべし

部少輔になしけるとぞ

(百九十二) 竹中半兵衛重治は美濃の菩提の城主なり後秀吉の軍奉行たり謀略有人をれども
 打見たる處は婦人のおとし軍に臨む時も猛威なる事なし馬の皮にて包める甲と若木綿の羽織一
 の谷と名付たる背の緒をしめ静り返りて居けり重治向ふ度おとに士卒戦ずして既勝たりと勇
 みあへり重治或時軍物語せしに子の左京いまだ幼かりしが座と立ければ重治軍の國の大事あ
 り何方へ行と問則にゆくと答ふ重治爰に溺をたるゝども軍物語の大事の席と立事やあると
 いかられけり

(百九十三) 稻葉治左衛門は美濃齋藤家の士戰場にて必眞先に獨進み出芒の如くなる所居け
 る故世の人は是を芒乃治左衛門と云けり澤喜藏は美濃飛弾に隠れなく若く頃より功名有芋がら島
 の鎗澤一番なりと云と吾にあらす稻葉なりと云て互に譲りて決せず澤は吾早く進みたれど
 も稻葉がはろの手をしむる隙に先に乗込たり實は一番稻葉なりといふ人皆是を賞しけり有吉武
 藏が足輕鐵炮に鎗と持添て鐵炮を持其上に壹番鎗と合せたるが吾一番よあらす園部儀太夫がは
 ろの手をみるを見て駈出ぬ園部が一番也と譲りしと同事にて戦國にかゝる士はまれなる事にこ
 そ

(百九十四) 羽柴下總守勝雅の許よ二藏三藏とて物し有いづれの城よての事よや有し下總守城

より出て働き引取たるを敵付來ると敵付來る二藏三藏門を固めて揚糞戸と下まて敵とたてこめたり勝雅下
知して門を明て敵二人を出して討取す近藤石見守加勢たりしが其子細を問たてこめられたるは
死地に入たる敵なり是と討ば城兵餘多死傷すべし打とめたれをどて軍の勝敗にあづからずと答
ふ石見守武功の人なりし故大に感じたり

(百九十五) 瀧川一益佐々成政等信孝と推崇て秀吉と弓箭を取しに天正十二年九月成政八千
の兵と率ひて加州金澤の城主前田利家の士大將奥村助右衛門永福伊藤が守る所の能登の末森の
城と圍む成政旗本と以て後巻を押へ嚴しく攻る此城だに打破らば能登は一日に討從ふべし後巻
なき中に乗取れど下知しけり奥村僅に三百計の士卒よて爰を詮度と防ぎけるに餘りに強く攻ら
れて今は是まで也自害せんと云けるよ助右衛門が妻小袖とかい取鉢巻をし刀を横たへ女房に粥
を手桶お入させ堀裡の人々に自ら飲せ昔桶とやらん云し大將の日本國を敵よして城に籠りたり
しと聞明日は金澤より後詰の候べきに只一夜防ぎ給へと云て打廻ると奥村見てけふの振廻男子
に優れり此城を女の力にて持得んは口惜と自負の色あり此城たやすく落べからざるを見て火攻
にせんと云者あり成政いやく大手の城門と取て富山の城門とすべし又石動山の衆徒も吾よ心
を合す火攻よはずべからずと下知して既よ二三の丸を攻取て夜の明るを待居たり末森より金澤
へ行程九里計其日酉の刻よ斯と告て夜の明るまでは堅く守るべしと申送る利家聞もあへず金澤

の城の廣間へ出利長を呼で汝へ城の留守せよと下知せらる利長いやく奥先かけて佐々を打破
るべし殘止らん事思ひもよらずと申されければ利家さらば父子打向ひ敵の不意を討に利あら
ん軍兵と整るよ及ふべめららず馬は鞍だよ置ならば一騎かけに打出よ一足も疾出るを今宵の功と
すべしとて富田與五郎後越に汝津幡よ行て不破彦三よ末森の後巻の先手せよといへど下知せら
る富田巳が宿所に馳歸り馬引出し打乗諸鎧を合せてあけ行けり利家士卒みな汗とかけて飯をく
へとて物具せらる庭には黒の馬を引立たり利家の北の方春院三方にのしと入父子に參らせられ
扱人々聞給へ我は利長の母なり今日の後巻は賊に大事の軍なるべし各心を合せ功名し給へ末
森と敵に取れなば各達も討死し給へ我も人手にかり候まじとて利家の側近く進みより末森を
敵攻落しなを討死せさせ給へ利長も母が此詞を能聞れよ生死の別れありといはれしかば利家あ
ら心よや成政と打破らん事必定ありといひもあへず物具の上帯とび結べる端を切て捨て馬よ打
乗父子の兵五百計よ過ざりけり利家馬上よて味方の小勢は吉事なり佐々が思ひもよらざる所よ
切てか、り打勝べし奥村討せなば生がひあしと云つ、津幡の町を北へ打過られたる時富田乘來
る津幡は金澤より四里餘りの行程成利家汝いづくに寢て有けるぞ罵らる、と富田聞て津幡よ
馳付不破が門を叩き申渡し不破物具着て候を見て打出候へばはや門外に旗を指出し候ひぬ何國
にか寢申べきといふ利家尙聞入ざりしかは富田怒て其日の一番鎗を合せけり是利家士を激せる

の術なるべし利家の士卒追ひ馳付けければ三千餘りに成けるを二陣に分一陣は敵の後に打かゝり一陣は敵の旗本に突てかゝる成政軍兵疲れし上思ひ寄ざる所に奥村も門を開きて打て出しかば成政大に敗北せり是天正十二年九月十一日の軍をり後に聞に成政山の尾崎を越敗軍を集め陣を立直し見よ／＼今前田といふ男が勝に乘陣を亂してかゝり来るべし大返しにして利家を打取べしとて物見二騎を出せしが乗歸りて敵の城を後にあて辭りかへりてのゝり来るべき物色候のまといふ成政謀違ひけり

末盛後卷の事加越合戦記にみえし處大同小異よて詳なる故併せて爰よ記す利家は加州の内石川川北能登全州を治め金澤の城よ有成政は越中の守護よて新川郡富山の城よ有しが越中立山さら／＼越の難所を僅よ從者百計よて忍びて打通り東美濃へ出秀吉と織田家の弓箭大敵よたやすく勝がたからむ成政北國より攻登りて前後より挾打て秀吉と亡しなるとよは加賀能登越前三州と賜はり候へと信雄よ相約しまたさら／＼越より富山よ歸り佐々平左衛門神保安藝守と相計り成政の二人の女ありし中一人は秀吉へ入質よ出置たりしかを其妹を利家の二男利政に妻すべき由を平左衛門して言せしかば兩家縁を結び目出度といひあへり天正十二年七月廿三日成政の使佐々平左衛門金澤に趣き祝ひの物取揃へ相贈りけり利家篤實の人なれば成政の奸謀有ともしらず引出物して悦びの上村井又兵衛を謝禮の使とせらる成政八月は忌候と

て延置夜々北の櫓にて軍計定せられけるに心付て密に利家にしらする者あり利家盧實辨へがたしといへども怠りて不意の變に打負なば弓箭とる身の耻辱なりとて加越の堺朝日山よ城を搦へ村井又兵衛を大將として千五百餘りよて守らしめんため櫓を付廻る處よ八月廿八日成政より佐々平左衛門前野小兵衛よ五千の兵を指添て押寄たり加賀の者共居住の支度せんとして金澤よ歸りたるも有て折節七八百よは過ぎりけりされども村井大剛の者よて味方を勇め立る處よ利家馬廻りの士阿波賀藤八江見茂十郎見廻りよ參合せしが急ぎ歸りて注進を頼ばやと云ければ兩人色を變じ金澤よありとも斯る事聞を馳來るべきよ參合せたるこそ幸あれ然るよ空しく歸れといふ事や有と怒りければ村井聞て誠に頼母しき事悦ぶよ餘り有但し路次よ一揆起りなんは必定なり各歸りよ恐あらば爰よ止られよと云しかば兩人此詞を聞て扱ひ路の一揆を恐れて歸るまじとやさらむかけ歸て申さんとして馬よ打乘金澤へ四里半計なる道と只一時よ馳歸り斯と申せば利家さらば後卷せよとて不破彦三田野村三郎四郎片山内膳岡島喜三郎原隠岐武部助十郎などを打具し具を吹せ揉よもんで急がれる折しも大雨降しかば成政の兵も一時よ攻破りがたしと思ひけん城を攻ずして引歸しぬ是より和談破れければ能州七尾よは利家の第五郎兵衛安勝同孫左衛門良繼高島織部中川清六長九郎左衛門等三千余よてこめ置能登加賀越中の境末盛よ奥村助右衛門よ千秋主殿助土井伊豫を添て千五百計よめられたり加

州津幡の城は前田右近越中の堺鳥越よの目加田又右衛門丹羽源十郎ノ籠られたり成政も俱利加羅の嶺は城を構へ佐々平左衛門二千餘利波の城は前野小兵衛よ千野山の城は國土菊地 豆守荒山は城を築き神保安藝守氏春の家老袋井隼人に守らせて七尾の押とす神保は成政の聲なり四千の兵をもて森山と守りけり利家と秀吉よ告られければ秀吉聞て休々を疑ひ加州よ又左衛門を置つるは吾謀りしは違はざりけり利家兵少しといへども必成政よ切勝べし頼て師を出し成政を討亡すべきよとて使者よ黄金三十兩與られぬ九月十一日成政未盛へ押寄せ二里計かたへの坪井山の切所を前よ當て陣し佐々平左衛門山下甚八前野小兵衛を始として八千餘攻よせ外構の町家よ火をかけんとす土井伊豫敵よ町家を焼れての生かひなしとて二白計よて突て出敵よ戦ひければ大敵よかけ合せ終よ討死す城兵も爰を最途と防ぎける 速よ落べしとも見はざりしか成政後巻心元なしとて神保安藝守氏春よ四千餘を差添て川尻といふ所よ陣して加州の道を塞ぎたり利家未盛より告來ると等しく金澤を打立不破彦三村井又兵を先陣とす

一説よ成政きびしく攻て二三の丸水の手を棄とり本丸よ攻結たり末森の飛脚息切るばかりよ金澤よ馳來り文箱と投けるとす
 十一日未の刻の事也末盛は水よ乏廣岡の水よ汲てさゝいよ入急き追付よ後巻の土産よせん

ぞ下知せられける倍同國松任といふ所全澤より三里計隔りて利長居城成むとらうく末森へ向はれよと言送られけり金澤より四里計成ける津幡の城へ急ぎ押付られしかば弟の右近秀繼廊外よ出向ひ利長を待つべきやといれしかば城よ入れしよ利長成の刻ばかりよ津幡よ馳着れけり利家悦んで吾成政と若き頃より數度の軍よ逢つれども利家を越したる事一度もあらざれども成政侮るべきよは非れども無二無三よ一合戦して勝利と得ん事 掌の中よありと大音揚て呼はり勇み進まれけるよ寺西治兵衛入道右近と相議しはや末森は落たるならん殊更川尻よ神保多勢よて道を切塞ぐと聞え候へば後巻いかに候はんと申利家大よ怒りきたなき諫は必口よも出すまじし事とよ人は一代名の末代とこりきけ契村や土井と捨殺して己來たとへ日本の主となるとも此恥辱すくべららず成政大軍よもあらばあれ吾馬廻り計よても快く軍して勝負を決せん事不足なりいか村井汝は如何思ふぞ是非一戦と思ひ定めたるぞと詞をかけられしかば又兵衛聞もあへず有無の一戦外何の是非か候べきと云利家悦んで村井が心も吾よ同じとて打立れしよ右近茶漬飲を進め且上手の占師の山伏の候召て軍を占せられんやと問利家氣色よからねど夫とて叫出されけり五十計の山伏なり 懷より書物を取出す利家ともあれ後巻よ決定したるよ能みよといはれしよ山伏書物を懷よ入今日吉日あり時も吉時ありといへば利家汝功者なり頼て打勝負美すべしと快げよ打出勇み進んで押行れけり村井不破先陣原隠岐前田又次郎片山

内膳二陣田野村三郎四郎青山與惣兵衛近藤善左衛門前田慶次郎押續く宮川但馬武者奉行たりといへり川尻のこなた一里計高松といふ所よて利家肯と取て着忍びの緒の餘りたるを切て捨られしるばさては今日限り軍よと人々生て歸るべしと思ひもよらず藤原基六とて利家の近習の士二十三よ成しが横根を煩ひ起臥も心よ任せずされども是非打立べきとせし汝は残り留りて吾討れなば堅く城を守りて秀吉の後巻を待候へ叶はずハ其時腹を切と下知せられしを心残りけるが乗物よ乗與力の士二十騎打具し川尻近く成て馳付藤原勘六參候ひぬと大音よ呼はりけれを是を聞人々天晴剛の者ありと云わへり川尻よりは津幡よ人を付てうゝはするよ馳蹄て前田父子津幡まで出たれども後圍有べしといふ見ゆすといふと聞て神保は大よ備をゆるめけり利家先陣よ乗行て村井不破は濱際と一騎打よ馬の舌を巻せいにかよも靜よ押通れと下知せらる神保は兵を押し待かけたりと物見の云しかば又富田越後(此時六右衛門といへり)を物見とせらる馳蹄りて敵は一入も候はず川の杭の多く候と人と見誤りたるならんとうく押せられ候へと申利家川杭とは何と證よせんと問るよ越後されば候武者ならば並びの備ひ候事有よしと存猶も借よ見ん爲よ川中まで馬を打入て心靜よ見て候是よ見損じ候程ならば再び弓箭は取まじと申す利家故が見る所こそ正しけれ士の手本よせよと悦れけり倍兵を進めて押通るよ神保是とば夢よも知ず後れて聞付たれども利家は今讀といへる右の上なる山よ兵よ押付陣せられしよ。脱有可シ夜明

よけれバ利家馬を乗廻し兵糧を遣ひ候へ今日の軍勝べき事心易のるべしと下知してみな馬より下たり爰よて見れば利長七八百計兩先陣千三百計旗本千五百よは過ざりけれ利家けふの軍よ功名せん輩は取分て賞すべし若討死せば必子孫を見放まじと高らかよ下知せられ夫より山を下りて兵を進むるよ道二筋一筋は末森の道一筋ハ成政旗本への道あり村井坪井山へ押寄成政を虜よせんと申利家聞て尤なれども成政必險を前よ當てや陳すらん只末森へ馳付敵を追崩し城中の者共よ力を付んはいあるよ村井承り可然候城中の士ども只今の仰を承りさる辱からんといへり程なく末森近く押詰たれば村井が者共餘多首を取來る末森よは二の丸よ籠りたる千秋主殿助澁津金右衛門已下寄手攻入ると退出し力の限り戦ひけるが討死餘多よ及べり本丸も既よ危く見ゆれども奥村右衛門少も氣を屈せず支戦ひける處よ砂山よ當て朝霧の晴間よ利家の馬印見ゆしかば力よ得勇み悦ふ事大方ならず今少し後巻遅かりせば城陥るべきよ運を開きしは偏に利家神速の兵機と得られし故なりけり村井又兵衛田野村三郎四郎と始として鎗を打入散々よ戦ひけるが成政先陣の大將佐々與左衛門を村井突伏ければ士三十餘人杭を並べて討死す利家の先陣佐々を討取関と作りかけ切崩せしかば寄手敗北しけるを利家見て搦寺へ廻れけり寄手よも究竟の兵餘多有て待かけたれば利家旗本五十騎ばかり靜よかりける所よ半田半兵衛真先よす、み一番鎗よ名乗ける所を櫻甚助鉄砲よて打たりしかば左の手よ當り鎗を抱て倒れたり半兵衛と

其介は從弟なりしが指物よて見知ける故甚介も半兵衛あがらへずは不便なる事としたるよと涙を流しけると後よハ聞えけるとかや利家敵の鉄砲烈し延よせば叶ふまじた々懸りて追崩し候へと金の切裂の再拜を取て下知せられしは會釋もなく競ひのりて押崩し寄手餘多討れて敗北せしかば金澤の士勝鬨をどつとぞ上たりける利家城中よ乗入て奥村をはじめ詞をかけ今度籠城の勳言語ハ及ぶべきにあらざり利家いかにおもふとも故がいひ甲斐なくて城と明るか又攻落されなば口惜かるべきにかゝる功名やあるといさめ立ちらる其時野村傳兵衛山崎彦左衛門一度に鎗を合せたりとて一二の争論せり利家半田が眞先がけしたるに冥加なく深手負志と遂されども勇士の志と顯はれたり二士一同に鎗を合せたれども傳兵衛名乗たれば一番をば野村よ極めたるとぞ下知せられ二人よ千石乃加祿を興へられけるとぞ半兵衛は疵をえて二千石與へ士十五人與力に付られけり成政の旗本へも後卷のよし聞えしかばさらそ一軍せんとして八千計押出せ利家はとみて武勇める勢には百萬もあれ恐るに足らず先陣は又兵衛せよ二陣は城主なれば奥村三番ハ不破彦三と定められけり能州の國士長九郎左衛門四五百計よて馳來る敵味方分明ならねば物見をやるよ長が兵なり遅く馳付つる事口惜き事なり弓箭の冥理よ盡たりと憤りけるを物見の脇田善左衛門野村七兵衛聞て馳歸て具よ申せば利家長を感せらるゝ事大方ならず昔とりくよ長が志を衰立れば努々後れたるよ非ず淺からざる譽也と誓紙と添たる書を長よ與へられたり成政

いかよ思ひけん打出たる兵を引まよひ山よ添て引退く折しも武者修行して來り居たりし本多三彌は無二無三よかりて成政と討取べきよと云けれども猛將の成政なればこり手經く引拂ひたれど人々云しかば付幕はすして止よけり討取首七百五十三とぞ聞えし利家は成政城を攻落さず空しく引返す事と怒り引退く体にして津幡の城へ寄んも計り難しとて奥村を城に止め兵を餘多指置て末森を打出られしに追々に兵加はり一萬斗に成にけり又不破村井を先陣として濱邊に指か、り津幡に馬を入られしかども成政ハ津幡に押寄すして引取けり佐々が軍兵金ののし指物したれば坪井山は輝きわたりて見白けるを利家打詠めあはれ見事なる脩立頼て成政を攻亡候し我士卒に指すべきよと云れけるとぞ秀吉此勝利を聞日本に比類少き武功と賞せられぬるかや

利家奥村よ其日持せられし馬印金の切裂の再拜着られし甲冑を賜りて賞せられしといへり(百九十六) 天正十三年四月八日前田利家金澤を打出鳥越の城へ押寄らる鳥越の城は金澤よりも兵を入置たるが去年末森の時城と明退て成政の軍兵入替り守りければ利家はと憤りて攻落さんどの志なり城兵も久瀬但馬守其外撰みたる者ども五百斗門を開て突て出利家の先陣と追立る利家はかたへなる山の尾崎よ陣して馬を立られしよ味方敗北すると見て山崎少兵衛ハ如何したるやはや返すべき盤合なるにと云も終らぬに白き羽織よて進み出たる者の候といへば利家

山崎出たるよ早味方勝たるぞと云れけり旗本の早うとの者どもかけ出んとするを敵の勢競ひ懸りて足踏止がたき時なり今少し待候へと下知せらる徳山五兵衛只今鎧を合たると見たり地煙立候と云けり然るに近邊の越中の兵城々より助來て敵の陣は黒みけれども山崎が與力警津丸藏と名乗鎗を打入り早か、られ候へ左なくバ九藏危しといへども山崎静れと云詞乃中に九藏倒れたると見て山崎進み出て鎗を打入押崩きて城際まで追打したりけり城兵門を指固めければ利家強て攻めて引返されぬ此軍の前利家の近習の士九里少藏勘氣を蒙り居たるが成政馬廻りの將杉江彦四郎と組打して谷へ落組しかれ杉江刀に手とかけたる處を下より少藏小脇指よて具足の鎖のはづれを刺通し刃返しけれども氣つかれて首を取を待ざりしよ片山内膳が從卒來りて少藏を押のけ相討と云て首を取たり利家細やかよ事と糺明して少藏が功名よ定り勘氣をゆりし鞍置馬を與へられけり

(百九十七) 天正十三年三月 東照宮濱松の城よて疔を病せ給ひ近習の若き人に膿と強く押せ給ひしにより痛み甚しくすでに事切させ給ふと城下には申ける程の事なりけり今はもうとや思召けん御遺言を仰出されしよ本多作左衛門重次参りて先年臣を療養せし糟谷政利入道長閑か薬と付させられよと申けれども聞し召入させ給はざりしかば作左衛門大よ怒り殿は徒よ死し給はんよ此作左衛門を年老ぬれば只今自害して待奉るべしとて座を立けるを御覽じているに作左

衛門氣狂ひたるか未ながらへたるに自害とは何事ぞ吾なのらん後こそ大事なれと仰られし時作左衛門夫は人によりての事に候若き時より幾度とあき軍場に數ヶ所の手と負世の中の崎といふ崎は身一人にか、り候ひぬ今日まで殿の御情おて人がましくも候也只今殿過させ候ひなを北條を始として敵國より攻來らんに殿ふかくれ奉りはかくしく軍する者や候べき國は忽滅亡すべし其時作左衛門は路の邊へ餓死せんながらへたらばあれこそ徳川家に奉公せし本多作左衛門よ何を頼みにながらへたるなど人よ嘲り笑えるべし近き比武田の内にて甘利殿とて人の敬ひたる人も武田の運尽ぬれば今は本多平八郎が組となりか、まじり居るを見るも哀なり是は人の上ならず勝頼の不道にて滅したるも殿の薬をさらひ給ふも同じ理に候と申せば 東照宮 尤也とて長閑を召頼て薬を奉り灸を大にして作左衛門する奉りければ夫より痛みや、軽くおらせ給ひければ作左衛門聲と上泣て悦びしとぞ

(百九十八) 天正十四年正月秀吉織田源五郎長益羽柴下總守勝雅天野佐左衛門三人を使として東照宮よ和平を乞れけり三人歸て和平おもひもよらず重て來らば首を切んと徳川殿申されし由申入る又あさねて三人を三河へ遣し強て和平と請せらる 東照宮三河の吉良にて左の手に鷹を居させ給ひて三人よ御對面わり三人申けるを信雄卿の厚恩を忘れての事には候はねども秀吉計畧し澁川三郎兵衛よ羽柴の姓を與へ下總守になし神戸の城主とし三萬石の加祿し其外數多都

又妻子を置自人質と成候ひぬさまの謀候へ此度和睦候はずの秀吉軍を出し清洲まで勢揃して打向ふべきとなり四國中國の兵も相加はり去々年小牧の時より兵十萬も多かるべしゆ、しき事に候と申ければ、東照宮聞召去年十一月伊勢の奈合まで信雄卿と和平の時わが方にも已來別の事あらじなぞ云たるも我とればかるの謀にて吾家の石川伯耆守に十萬石與へて我に背かせたり吾弓箭と取て發向せんと思ひしかども織田殿の國を打過て軍せん事いゝに怒を押へて止ぬるに無禮の事どもなり秀吉清洲にて勢揃せんこそ望む所なれ鳴海表にて一軍まゐるべし然らずは東美濃に打出て土岐遠山惠奈三郡を切取べしとてむちを指上られ此鷹一もとにて手配すべしとて打笑はせ給へば三人歸て秀吉にかくと申す秀吉聞てさても大勇將かな今夜思慮すべしと云れし時丹羽長重進み出必軍は思召止り給へ長重が士ども刀の鞘袋を設し故子細と問に鞘に三ツまきを拵へ合戦の時ハ鞘袋と捨て三河武者に紛れ命を助るべき支度なりと申も果ぬお蒲生氏郷堀秀政もみなく士卒其心得に候萬に一ツも利候まじといへば秀吉よししく徳川家を打破りて各にみせん物をとて止みければ三人退出道にて彼猿は死所なくて物に狂ふやと私語たり翌日諸將をあつめ三河と打滅さんは安ければとも智勇の大將なれば吾日本を治むべき事を相談せん爲に縁を組妹と嫁して和平せんとて又三人をやらせしかば、東照宮三ヶ條の誓文を御所望有秀吉許諾して和平及びせ給ひけり四月秀吉の妹濱松にわはしまして後に京に登らせ給ふべき

むねと秀吉請て秀吉の母大政所を質とせられしのは都に登らせ給ふべきに定りけり長臣とも是は危き事也然るべからざる由諫め申せども聞召入給はず其時申けるは和平又破れ秀吉攻來り候とも素より鋒先の強きは云にや及び候へき何十萬の大敵なりとも打負候まじ強て思召止り給へと申ければ、東照宮聞召諫る旨尤理なりされども秀吉に畏れて行にはわらず日本久しく兵亂にて四民安堵せず此頃や、治りたるに復秀吉と弓箭をどらばいつの世にかは静謐せん只とく秀吉に對面きて日本太平の基とせん若危難及びなんに老萬民の命は替らんにか何か惜かるべきとて九月廿日濱松を御首途有けるよ定りければ人々廿日は四ヶの悪日とて千人出て一人も不歸と申傳へ候一日御延引然るべからんと申す、東照宮千人行てこそ大事もあらめ我今度一萬二千の軍兵引具し上京す此軍兵一人も生て歸らずは吾爲の大吉祥なりとぞ仰られける井伊直政を御留守居とて此度秀吉詐を拵へ變よ及ぶとも危からし尾張大納言信雄は必吾に告知せて味方たるべし丹羽五郎左衛門は秀吉に恨あれば心を合せなん其外吾に志を寄る人多し去せども我も亦其備なからんや秀吉不意に謀となすならバ京都に火をかけ東寺を楯籠るべし其時素より立置たる汝が組一萬を五百づ、二十に分ち外に酒井榊原が今度京に上る供の外留置たる兵一萬是も十二に分ち佐屋の渡を越千種と押上るべし若大津まで支るならば武田四郎が長篠にて懸りし如く切てか、らば上方武者一支もすべからず瀬田の橋と焚たらば宇治より攻人べし新七籠之

介と云角力取二人は宇治の案内者あれば召具すべし斯の如くならむ秀吉聚樂と退て大坂に引取
ん所を東寺と清水と兩方より挾て打破らんに恐るゝに足す秀吉詐妄の謀となさば吾天下と掌に
握るべき兆なりと仰られ御出馬有秀吉と御對面事故なく歸らせ給ひけりされば危しとはし
召れけるが故に萬民の命に替らんとすの御詞天地神明も感應して遂に國運を永世にひらかせ給ひ
けるにこそ

山陽外史當時の形勢と評して曰く徳川家康の天下と取る大坂にわらずして關原にあり關原に
わらずして小牧にあり夫れ家康は織田氏の屬國なり而して太閤其將校あり太閤織田氏の將校
を以て身と起し乃ち其君の遺孤と歎き之ふ加ふるに兵を以てせんと欲す諸同列其力を畏れ其
惠と私し逡巡して敢て争ふことなま而して家康獨り毅然として弱を扶けて強に抗し野次
一戰其二驍將と獲固より以て奸雄の膽を破りて天下の心を服するに足る是の時に當て太閤據
る所近畿諸州に過ぎず人瓦合鳥集觀望を懷きて家康參遠膠漆の民を以てし加ふるに甲信の精
銳と以てす勤舊忠義雪の如く雨の如し和親成らずして兩姓兵と搆へしめば天下の事未だ知る
べからざるなり昔者曹操劉玄德に謂て天下の英雄唯君と我れとのみ袁本初輩論ふに足らず
今太閤を以て柴田勝家等を視る猶ほ探の本初に於けるがおどくにして其家康を憚るや當に玄
徳ならず宜なるかな其卑辭厚禮百方講和す是れ太閤の至計速に天下を取る所以にして天下

の權己と徳川氏にあり何ぞや我れ戰ひ勝て彼れ和を求む求むる者を彼れにあり許す者は我れ
にあり我れ和せんと欲せば則ち和し戰はんを欲せば則ち戰ふ安危禍福一に決を我れに取る我
れ已に天下の權あるにわらずやと是れ能く當時の形勢實情を穿るものにして本章に於て其然
るを知るべし

(百九十九) 東照宮聚樂にて秀吉に御對面禮有ける日秀吉白き紙子の羽織に纏したるを着
られけり

蒲生民郷其頃三十二歳にて狐紙子と名付呼れしとあり
淺野彈正長政彼羽織を御所望候へりしと私語ければ 東照宮漫に人の物をもらひたる事なりと
仰あり長政又御所望候ひなば秀吉大に悦れ候べし素此羽織は物の具の上に着んと乃設なれば一
旦は辭し申さんを強て乞得せられなば秀吉何事の悦か是も増るべきとしひ申せむ 東照宮止事
を得ずして許客ましくけり 諸聚樂の城門にて毛利浮田と始め居並びて拜謁しさて茶を奉て後
東照宮彼羽織の事を仰出されしかば秀吉悦びて手づから着せ奉り扱大名よ向ひ我に物具させ
まじとの事あらずかや誠に天の冥加に叶ひたる秀吉なりと語られたる 東照宮歸らせなひて
後長臣達に聚樂の事ども御物がたりありける時吾も羽織を贈りて後秀吉吾も物具させまじきと
の志なりと諸大名に向ひて云れしは斯る後と争か秀吉の鋒先に向ふべきと中國西國と語りつ

き云ついで普く世人の口に有べし筑紫の未までも聞はなん是天下の大名に威を示すの謀略なり其遠大の謀略く測るべきよあらず力を以て是を推んとするとも及難き秀吉ならされども吾志す所を別有とぞ仰ありける

(二百) 太閤 東照宮と禮禮有しにかけ盤を始め 器不殘葵の御紋を落繪にし誠美と盡したる次第なりしと 東照宮本多正信に語らせたまひ如向なる思慮や有らん吾も亦遠き慮有べきなりと仰られしかば正信承りされば候小笠原與八郎氏次は勇將の譽れ世上に聞は候てたれくも旗下につけばやと 志し有しお氏次同心仕らで御家の旗下仰に従ひ候ひき彼が内々の志は信長と朝倉と一戦有ん時必三河より御加勢に御出馬有べし其隙をうらひ御家の領國は已が掌の内に握らんと存候て偽て二心なき有様に候ひし彼が計りし如く姉川の合戦信長援兵と乞れしに小笠原と先陣に命ぜられし故心中に挟む所ありといへども辭すべきやうなくて姉川にて御勝軍なりき小笠原が二心なき体に見せしに御乗ながら御心に乘せられぬ所有し故姉川の先陣小笠原と御定有て彼が支度相違せり人の乗る所をのらじとするも一物有て候乗る處と乗ながら乗ぬ心あるを善とす豊臣家の乗る所を右の謀にてあへしらはせなん事しかるべしと申ければ 東照宮尤なりと深く信じ給はせけり

(二百一) 東照宮の御女を北條氏直迎へて兩國和平なれども御對面なかりしかば天正十四年三

月使をもて拜謁して要害國境の城々守りの兵を攻候べし黃瀬川を渡り伊豆に至るべきかど仰遣はされしに酒井忠次黃瀬川と越氏政父子に御對面候ひなば北條家の旗下に屬候と同じ事にて候今徳川家は五州の御あるじ也いかでか北條家の旗下に屬すべき徳川家の瑕なりと諫め申す 東照宮されば其位争ひ無益の事なり過じ比武田上杉和平して犀川を隔て對面の時馬より早く下りたる方旗下に似たりとて 忽事破れ其場より鉄炮と打合諸卒血に染て相引にしたりき其時信玄廿七才謙信十八才の時夫より和平して京をさして上らんに信長も吾も争が支へ得べき其故に兩方に使を以て道理至極せりといはせしかば兩將廿四年の間和平せざりき其中に信長は近江和泉を打從へ吾も援を出して信長を後にして根を深くするの謀をせえが信玄死して勝頼父に優るべきと威とふるひ暴逆にして滅亡したり信長又勝頼は勝りて驕長じ様々よからぬ事のみ有て終に弑せられぬ斯の如き大將ハ滅て終をよくせざる事 理なり夫を見て 戒とせず位争ひをするは悪き事なり氏政吾も二心なく云かはさんに兩族にて東國を打平けなん其時に及て州あまた領する者上座に在ん位争ひ更に益なき事なりとて伊豆の三島にて氏政氏真と對面あり 武田上杉犀川を隔て對面の時無益の位争ひなどすることなく和平を整へたらんには天下は既に甲越兩將の中に屬せること必然の勢ひにして先づ謙信之と取らんら此時無禮を加へま者は信玄にして憤怒し者は謙信なり憤怒されば以て和平成るべし左れば此時和平の成ると成らざ

るとは一に謙信の心中にあり當時は雄中謙信と以て第一となし信玄之に次ぐ謙信の稱と妨碍る者は信玄なり故に此時謙信少しの耻辱を忍て和平を整へば天下に向て號令することと得べかりしに其耻辱を忍ぶ能はずして天下の大勢の已れに歸するを放棄たるは謙信の爲め惜みて止まざる所なり古人曰く敵は勝つを以て勇となさす己の情欲に克ち得て始めて眞の勇となすべしと然れど謙信は未だ以て眞の雄傑となすに足らざるか願て徳川家康の人と爲り本章の事情と見るに眞の雄傑と稱すべきものあり此時北條と即ち武田にして彼れより稍々無禮と加ふ然れども徳川殺て忿怒す北條は和平の成ると成らざるに拘はらず天下を取るべきの器ふあらざれば其和平成るも成らざるま致て甚だしき利害と感ぜずと雖ども徳川は其和平の成ると否とは終局の害利に大なる關係あれば一怒以て天下の勢ひと變するを恐れ北條の求めに應じたり後人其れ戒めざるべけんや

(二百二) 信長弓箭盛にして畿内を打從へられし比近習の者共 諂て斯強大に及ばせ給ふ事と知らで平手中務が自害しけるは短慮にて候と申けるを信長怒て色を變じ吾斯弓箭を取事みな中務を諫めて死けるに恥悔て 過と改めし故なり古今に例なき中務を短慮なりといふ汝等が志無下に口惜き事なりと云れけり

小瀬浦巷後に此事を傳聞て信長記と編ざる已前ならば必其中へ書入べき事を遅く聞て殘多し

と云けると也中務大輔政秀は備後守より信長の傳に附られたり信長甚よからぬ事多かりしかば度々諫争ひて後國の亡ん事を料りつ、一封の書を留直て自害して失たる事世に普く知られば具に記さず中務始は清秀と云ける故諸書はみな清秀と記したれども後に政秀と改めける故諫死の後信長尾州名護屋に一寺と建らし政秀寺と稱し寺領二百石寄附せられ臨濟開山派京都妙心寺の末寺にて中務の墓も其寺に有寺の縁起に政秀彈送の時信長柩に手と懸られたるよし記せり小瀬浦巷は田醫ふて加州金澤に居利家の臣横山山城守長知の許に心安く常に來て毎夜伽しけり長知は尾州乃人にて織田家の事能覺じたりし故信長其事を浦巷毎夜尋問且秀吉れ事をも問ける故長知或は委しく或はかるく語り聞せけると浦巷退て書記し信長記太閤記二部の書を著し世上へ出しけると長知聞て信長太閤の事を書記さんために尋問たらんといひ答んやうの有べきに遺漏も多く殘多き事也其事を聊もしらせざるに依て只一座の物語と云聞せたるを其儘に書著したるは今に於て甚遺憾なり浦巷馬鹿者なりと長知いひしとあり長知は初浪人にて叔山と寄宿し諸國を武者修行して後前田家に仕へ大膳と云加州大聖寺小松越中末森などの軍に武功有て一萬五千石領し其後同州太田但馬守を放討にせよとの命を受太田一萬四千石を合せて三萬石與へらる長知大功の人にて人の勇武をさのみ目と掲す大方の事は稱美もせず只武士の有べき事と心得たりし故浦巷に語りたる事遺漏多くて悔みけるとぞ

(二百三) 信玄死れし事を深く隠したるは北條氏政泄聞て謙信のもとに告やられけり謙信は春日山にて湯餅飯と食せられしが是より打驚きて箸と捨飯を吐出し英雄とは此人なり關東の弓箭柱を失ひたりとて惜まれけり信玄は將畧の謙信も及ばざる故に高野の成慶院にて大威徳明王の法を修し謙信を兒誚せられし其文今も高野山に傳はりけるといふ

信玄勇才は人に超たりと稱すべし父を逐ひ子を殺し降將を殺して其子を妾とし其餘不仁怨毒算へ盡すべからず姑く此二事を併見ても二將の賢否論とまたずして明なり又甲陽軍鑑に記せし處附會詐偽しひて拵へ設けて信玄の悪を隠し他と蔑らにせし事は又かぞへ盡すべからば一事を擧て論ずるに北條家と戦ふことより利有と見られたれども北條五代記に記せるは信玄川中島に陣せしに氏康夜討して甲州の兵敗北し八幡と書たる旗を捨て甲州へ逃入たりと見えたり甲陽軍鑑も是を思て津浪に旗を取られしと記したりとて北條五代記の説誤りたりといふとも津浪に旗を取られし陣所の地理にくらきにあらずや

(二百四) 甲陽軍鑑を高坂彈正書たりと世に傳ふる事久し勝頼に仕へし友野大膳武功の人にて甲州の滅て後引こもり隠れ居しが書たる物には香坂と記せり姓も違へり偽妄多き書なりといへども軍國の事情をよく書取たる故に其虛妄と人疑はず控弦の家専讀べきものと古人もいひし也然れども其事實を案じ其眞偽を考へずハ大ニ惑はされん事必然なり川中島九月十日の合戦の

事其記せしによりて是と論ずるに信玄の敗北たる事疑ふべからず卯の刻に始たるは越後の方勝己の刻に始りたるは甲州の勝なりと記せり軍は芝居を踏へたる方を以て勝とする事甲陽軍鑑も論明白なり然れども其日の戦信玄芝居と踏へられしとはいふべからず既に山本勘介が其軍と像めいひたりしにも二萬の兵を一萬二千謙信の陳西條山へ指向け合戦を始めなば越後の軍勝とも負るとも川と越退ん所を旗本組二陣を以て首尾を打んと謀りしなり然れば謙信客戦なるが故におもふ程利と得たりとも越後に引返すハ極りたる事なり是主戦の敵に勝たればとて空しく其地は有べきにあらざると以てなり是と以ていへば信玄芝居を踏たればとて勝とはいふべからず是一ツ又信玄芝居を踏へたりとも云がたきにや甘糟近江守犀川を渡りて三日留りたるを甲州より押寄て軍する事あはざりき是越後の軍芝居と踏へたるふあらずや是二ツ昔老人の物がりたりに云傳へし事あり信玄嫡子義信を殺されしハ繼母の讒言有しといへども其實は川中島にて信玄義信將机換りをして信玄は廣瀬の方へ引退く敗軍といひながら義信を捨殺すべき勢なりし故義信深く恨みとふくむを以て終に不和及んで殺されしに至れりとなり信玄其場と踏む事能はずして逃たるを以て芝居を踏たりといふべきや是三ツ謙信素より甘糟をもて川を渡るの後殿と定められしが三日留りたるを以て見れハ甲陽軍鑑に甘糟が兵散亂せしと記せらるる虚妄なる事論を待す甘糟三日芝居を踏たるは謙信何事に狼狽して主従三人高梨山に懸りて走るべきや謙

信既に其前夜軍評定有しと計りし如くなる旨甲陽軍鑑に記せし所明かなり初の合戦も打勝て已の刻まで徒ふ敵の歸り来るを待て敗走すべきや謙信の弓箭とされる越中の戦も其父の吊ひ合戦也信濃に師を出すは村上義清に頼まれて其求に應じて是を救ふなり相摸の軍の上杉憲政の來るを容て已事を得ざるなり故に其詞にも強て勝敗を見るにあらざる所なきて叶はざるの戦ひをなすといへり信義を守るを大將の可慎事にせり爰を以て深く頼みたるは始終約をかへず又其兵を用ゆる信玄の可及にあらざる山の根の城を攻落せしに信玄氏康兩旗にて後援する事能はず遙々と敵の中を旅行して京都も趣きたるも勝れたる事ならずや信玄の謙信小田原へ攻入たる跡に付てなしたるはなほ安さよわらずや甲陽軍鑑に長沼に城を築れし時判兵庫に信州水内郡にて百貫の地を與へ信州戸隠にて密供を修す爰に北越の輝虎議臣を企て此次されて見はずとしるせり永祿十一年謙信戸隠山にて謙信を信玄兒証直筆の書を見て打笑ひ弓箭取る身の恥なり末代の室物にせよと神職にいはれし由語傳ふ今其書紀州高野山に有といふ事詳し又出記せる物あり實は謙信を恐る、事虎の如しともいふべしにや村上義清再び信州を歸り入し事甲陽軍鑑に載すといへども永祿年中信州の中四郡謙信に屬し義清を信州へ入られし事記せるものあり甲陽軍鑑に長坂長閑跡部大炊助二人を奸曲の臣として勝頼寵せられし事を深く憤れるはざる事なれども二人權を取るは勝頼に始れるにあらざる信玄の時より寵せられし故勝頼に至て愈權威有き信

玄の時北條の兵に跡部敗れ走しを曾寵愛を憎みし由を甲陽軍鑑に載たるを以て知るべきなりまた云傳へし説に甲陽軍鑑を著せし本意は彈正にて筆取は猿樂彦十郎といふ者なり彦十郎は甲州滅て後大久保忠隣の所にて 東照宮の御事を書加へて一書となしたるとなり又或人の云しは川中島合戦の事を前夜に論じて謙信強敵たるの故對々の大敵にてさへ危きにまして信玄八千謙信は一萬三千なり勝といふとも討死めまた有べしと武田の各存るは理なりといひし事を甲陽軍鑑に載たれを勝は謙信にある事分明なると論せし人も有り又同書に載たる持氏生害兩上杉はこり恣にて武州河越にて北條を負たるは天の罰なりといへり持氏と兩上杉を時替り持氏の滅亡の永享十一年まで氏康とは遙に百八年を隔たるを同時と記せり北條早雲は延徳二年に相摸み打入りたり其頃上杉顯は越後にあり顯定は越後信濃の境長森原にて高梨に討れぬ早雲さへ兩上杉と如斯く氏康未生れざる已前の事どもを甲陽軍鑑に記せし事誤なり天文六年丁酉七月十五日管領朝定と北條氏綱と武州川越にて夜軍あり朝定討死せり此合戦を兩上杉と氏康夜軍となして記せるにや同十五年丙午四月廿日持氏五代の後古河の晴氏と管領上杉憲政と共に川越にて氏康と合戦有て晴氏憲政敗北なり是を甲陽軍鑑に兩上杉と氏康軍とせりされば五代已前の持氏とば公方と記し五代已後の管領と兩上杉となせるなり持氏四男成氏成氏の長兄公方政氏なり同人の長子高基高基の長男晴氏なりといへり又甲陽軍鑑に載る高名の事ども虚妄多し中に就て再

拜を手に懸て任し敵を討取て首を得し事を記せし事幾ばくといふ事と知を扱じて甲州に敵せし士は再拜を手に懸し見ゆ誠に笑ふべき事の記しざまより其餘無妄勝て討ふべからず然れども其時に居て戦國の勢ひと能知り且士の情も達せし者の書たる書なる故弓箭取者の 翫ぶべき書にて虚妄と棄べきにあらす

吾友の松崎惟時が語りけるは其師なりし寶山流の劍術の達人武藤十右衛門の論せしと戰ふは巧拙有とあほゆ太閤秀吉は戦ひには拙きなり小牧にて十萬に及ぶ兵を師めて 東照宮に對陣し誠に一刃も合する事能はず 東照宮の御弓箭世に勝れさせ給へるは論にや及ぶ然れども箕形原にて甲州の兵と御一戰有しに衆寡敵しがたき故にや利を失はせ給ひぬさらば信玄は海内無双ともいふべきに謙信と軍する度おとに打負られたり是ともておもふに戦ひの功拙は遙よ其科有にやしかれとも天下に旗を揚世を治め國を平かにするの道は別に有て戦ひの功拙にはよるべからずと語りしとて是又奇論とすべし

史の實を知り難きは社會の通病なるが身當時にありて當時の事を見聞するも尙ほ且つ其實を知るに難きハ世事の常態にて其事一説には何々と云ひ又一説には云々と云ひ孰れか其眞偽を判すべからざるものあるは普く世人の了知する所なるべし況してや其世代を異にするものに於てとや大に其眞を失ひ其實と遠ざかるもの多かるべし又況してや甲乙兩國兵と交へたる

乃事蹟を不偏不黨の他邦人著はずにあらすして其相偏する一國の人書くに於てをや如何ぞ其眞實の事蹟を得べけんや所謂我れの勝ちし角力は我れ之を談ずれども我れの負けにし角力は知らぬ顔の半兵衛彼れに就て聞かれよと心中竊に云へるの情理にて我れの勝利は遺漏なく記し瞞着の出来得る丈けは之と紛飾りて小勝も大利の如く書き立つれども我れの敗績は成るべくそ知らぬ顔にて書漏し大敗よして蔽ふべからざるものよ至り已と得ず此時利ならずと記すに過ぎず甲陽軍鑑の如き即ち其一にして虚妄多く殆んぞ見るに堪へざるものあり然るも尙ほ且つ其書中甲越の戦争互角の勢ひあるか寧ろ陰然の間に謙信勝利の狀を現はしたるを以て見れば川中島乃戰爭十の八九は謙信の勝ちにして信玄の敗れたること亦掩ふべからざるの事實なりとす且つ兩將の優劣固より日を同うして論ふべあらざるものあり然るに之を併稱て同等の人物なるが如く云ふものは猶ほ日月の併稱 金銀の併呼のおとし一口に之を併稱ると雖ども其内實の價値を異にするは微等の差ありて存するなり

(二百五) 秀吉島津と討んどおもふ事年久し天正十二年仙石權兵衛を商人の体にして九州に間者とし山々浦々の地理 悉く繪に書て起臥に見兵を分ち攻入べき道々を計られけり
(二百六) 島津中務大輔家久肥前に攻入島原の城を攻落したる所又龍造寺隆信大軍にて押寄たり家久わづかに三千計なりしを幾重ともなく取圍む家久是物ともせず明日の合戦吾先陣す

べし具を相圖に切懸るべしと定て夜の明るを待朝霧深く物の色も分たず家久將机に依てはれ間
 を待や、朝日出て晴わたりしに子の又七郎豊久十五歳なりける。近付大崎武者振、只上帯の
 結びかくするものうとて結び直し脇指を抽て其端を切て後よく聞け若軍に打勝て打死せずは此
 上帯我解べしけふの軍に屍と戰場にさらさん。島津が家も生れたる者の思ひ切たりと敵もしり
 我も黄泉に 悦ん物をどいひもあへず貝吹立させ真先に隆信の旗本へ切てかゝる島津家の弓矢
 の先駈の兵は矢一筋持せ射放ちて弓を捨長き刀を抽て切てかゝるけふも又まかしたりけり隆信
 の旗本乱れ立敗北すれば隆信きたなし返せと下知し遂に陥止り討死せられけり家久勝てはこら
 ず人数をまとめ陣を整へける所は龍造寺乃臣惠藤るれがし首一ツ血に染たる刀に持添大將は何
 國におたしまし候ぞ功名の印の候と云て家久ふ近付寄り首を投捨て馬の上なる家久を一太刀斬
 たりしに家久必疾く馬より飛下りたれば左乃草摺を切て餘る口膝にあたりけり惠藤を中に取こ
 めて討むとすれば家久わたら者討むと下知せければ生捕んとすれども素よりけふを最後と思
 ひ定め切て廻りしほと終に討れけり惠藤とのみいひて名をば名乗ば惠藤が首を膝の上に置並
 びなき剛の者義勇の士とは是と云へけれ生捕て對面し龍造寺に送り返さんと思ひしに思ひ
 切たる戦死せられまれば力及ばすとて近所の僧を請じ惠藤が吊ひの事念頃し沙汰し其有様詳
 記して其僧に頼み故郷にやられけり諸豊久を呼て今朝の約のごとく上帯を解たりしとかや家

久は島津家の士大將なり豊久後又中務と稱したり關が原に於て義弘の身に代り討死有しは此
 人なり

(二百七) 立花道雪は

始戸次といふ立花の跡を嗣し故立花と稱す始の名は鑑連男子なく高橋紹運の子を養ひて嗣と
 す
 若かりま時雷に震れ足痿歩行心に任せず常に手輿に乗り累代大友家に屬す大友家衰へければも
 道雪心を變ぜず武勇たくましく人にて士卒を見る事子を愛するが如し戦ひに臨む時は二尺七寸
 有ける刀と種ヶ島の鉄砲を手輿に入三尺計の棒に腕貫として手に提げ乗れ長き刀挿たる若き士
 百餘人手輿の左右に引具し軍始れば手輿と此士にかゝせ棒を取て手輿とたゝきぬいとぞ將を
 わげ此輿を敵の輿中に入るき入よとて拍子取遅き時は輿の後とたゝかれけるに敵も北たるより
 も恥として面もふらずかき入ければ手輿の左右の十三尺餘りの刀を抽連て一文字に切てかゝり
 けるに先陣の者どもすはや例の音頃よといひもあへず我先に競ひかゝりいかなる堅陣をも切
 崩さずといふ事なり若先陣退立らるゝ時は道雪大音上て我を敵の中へ昇入よ命惜くは其のち逃
 よと眼を見出し下知せられしに守り返し勝ざる事なし斯れば道雪の士と一日に幾度鎗を
 合せたりといふ者多き又道雪常小士によわき若はなきもの也若よわき者おらば其人の思きには

あらず其大將の勳さるるの罪なり吾士はいふにや及ぶ下部に至ても度々功名なきはわらず他の家にて後れたる主あらば吾方に來り仕へよ取かひて逸物にせん吾士の四月朔日在三兵衛は若き時初て後れし事の有しにいつの頃よりか血臭き事にあひて次第に物に慣れ今は五六人の剛の者と世よいはる、がかしとてたきく武功なき士のわれは明塞ぎの有は武功の事よ弱らざるは我見定めたり明日にも軍よ出んよ人にそゝろかされば必拔懸して討死し給ふな夫は不忠なり身を全うして道雪を見つぎ給はれ各を打連たればころ斯年老たる身の敵の真中に有てひるみたる色を見せざるぞといと懇に睦しくいひて酒酌かはし其比はせりける武具取出して與へらばければ是に勵まされて重て軍のわらん時必人に後れじと勇みて聊も武者ぶりの能見ゆれば呼出してわれ人に見候へ此道雪が見し所に違ふべきにあらすとて勝たる剛の者の名を呼て頼み候はどに能引廻てよといひ又人々心の合せらる、事此道雪は天の冥加に叶ひたる事よと勇め立若るき士の席上にて心得違たる事のある時は客の前などに呼出し打笑ひ道雪が士ふつ、かにころわれされども軍に臨て火花を散し候給へ此人こそ能すれとて鎗追取たるまねして譽られしかば人々感じ涙を流し此人の爲に命と捨んとえげみけり

立花道雪は士を勵すこと妙よして他の家にて後れたる士わらば吾方に來り仕へよ取かひて逸物にせんと云ひよしが爰に一人の後れたる士あり之れとも道雪の方に仕へば取かひて逸物に

なすことを得んか試みに記さん然らば其士は誰なるか即ち巖間大藏左衛門と云ふて武田家譜代の士なるが父の遺跡を繼て三百貫の知行を領す天性至て怯病者にして數度の出陣馬を出せども関の聲を聞くと忽ち身慄き一番よ逃出すこと度々なり元來何の手柄もなければ信玄も家に久しく仕へし者なれを憐れに思はれ何ぞぞ手柄こそあるやうにぞと御陣ある時は馬物具なぞと賜り此度は似合しき心ばせを致せと仰せければ大藏左衛門も度々の怯病の耻と思ひ潔く肯は申せども戰場に出づれを又怒ち戦ひ慄て逃出す而かも遠く逃げて漸々後れて歸ることも度々ありしかば信玄如何にもして彼れを勵まさんと比興の度よ或は叱り或は閉籠ること既に六度に及べども兎角して逃げまよふ程に信玄大藏左衛門を深く戒しめ若し此後合戦あらん時今迄の如く未練の舉動をなさば切腹して臆病の名を雪がさんとありければ大藏左衛門大に耻入り重ねての御陣には人のまゝき高名なくを生きて再び君の前に來るまじと誓ををしけるが其後信州發馬の砌り巖間を先將飯富兵部少輔の脇備に命ぜらる大藏左衛門甲州發足の時討死と覺期を究め妻子眷屬を集へ別れの盃を取りかはし奮然として出立しが既に合戦始まり飯富小山田が兩勢長尾政景が勢と遠慮けるよ大藏左衛門も亦奮然として飯富と共に馬を出せしが政景大返しに返して合戦始まり劍戟の交るよ見ると驚しく大藏左衛門忽ち全身を振はし馬を鞭打て逃出さけるに巖間が家十等馬の口に取りすがり這は心得ぬ舉動かな言ひ

甲斐なき御有様や此頃君の御前にて御誓言の上御親屬と盃まで取りかはしなから勝敗も未だ別たざるも何國よか逃去り給ふ此度御高名なくんば君の御憤りも逢ふて切腹仰付られんは必定なり唯々敵も向ふて馬を入給へ高名を顯して今迄の汚名を雪せ給へと引止むれば大藏左衛門耳も入れず只管に馬を飛して遠く逃去りぬ斯れば信玄も殿間が怯病は如何ともなすべからやなく古老の人々も召し殿間こそ種々威し透して取立れども生質の未練者なれば詮方なし然れども譜代の者を飢殺とは如何なれば似合しき役を申付くべしとて詮義の上分國の大身小身の侍或は僧俗一切の人の事訴への役と命せられぬと云へり此怯病者に誰か呆然として驚かざる者あらん此の如き怯病者も尙ほ且つ道雪も仕へれば取りのひて逸物にせんか流石の道雪も亦之には必ず閉口仕らん

(二百八) 道雪の側に仕る女に心をかよはず者ありけるをしらぬ体にてぞ有ける是をしるもの有てある夜物語の時申けるは東國の大將に誰どしらず候寵愛の女に密に情を通はす者の候ひしを誅せられきこあらぬ事を能といひて道雪の答を試みけり道雪打禁ひ若きもの、色に迷ひたるは必しも誅せずとも有なん人の上も居て君と仰がれんには假初の事に人を殺せば人背くもどよよ國の大法を犯したるには異なりとぞ語られける彼者傳へ聞て心も慙又道雪の仁愛に感ず其後薩摩の軍鎧が嶽の城を攻る時道雪城を出て取ひしに大軍押懸り危かりしは彼者大音上亂け

る味方を恥しめて散々ふ戦ひける其ひまに道雪城ちかく引取たるに敵僧きびしく進み來て城門をたてあへぬ斗也ければの者又取て返し武士の討死すべき所は愛にあり各是ふて討死せば城をば敵に奪とれと返せや人といふまゝに鎗と横たへ折敷ければ返合とる者三人あり面もふらず戦ひて討死しける間も城門を閉たりける

(二百九) 天正十二年大友宗麟猫尾の城と圍て數十日攻れども落す大友の兵長陣に氣疲れたり立花道雪高橋詔運聞て宗麟も馳加はり然るべしと相謀り俄に兵を出し二夜の腰兵糧を付よと陣觸して八月十八日打立たり士卒是は何方へ向る、にやと怪みながら下知に従ひて三笠郡内山江原へ打上る是より黒木の猫尾へ押行べしと下知し紹運先陣たり今宵は夜半過たり月傾きぬ筑後川の邊よて夜は明なん然らる敵の中數十里押通る事いか、あらんと紹運の從士云ければ道雪へかくと云送らる、よ道雪色とかへおはれ早く夜の明よかし見晴して敵出ば撫切にして通るべしとて乗物を叩かれしかば使者に行ける萩尾大學よしなき使をして恥辱も逢たるぞとて馳歸る紹運の從卒の謀しおとく筑後川へ押着れば夜明けり渡る處はかたの瀬といへり瀬踏にも不及混々と打入押渡る秋月種實の士芥川兵庫といふ者五十騎計ふて星野城より番代りして歸りけるがいつ方より誰の軍を押せられ候哉と問紹運餘すなど下知し取巻て一人も不殘討取首を小高き所へ並べ軍陣の血祭したりとて夫より石垣原へ押出し後陣と待揃へ耳納山を越んとする處よ

秋月種實筑紫廣門の兵共所々方々より兵を出し爰のつまりかしの切所は待うけ鉄炮を打か、
 る事敷をしらず中にも大木を小楯にして其陰より顔斗出して鉄炮を擲者あり殊に手にて手
 負敷多に及びり道雪の乗物昇たる人にも中りて倒れしかば乗物とはたと落しぬ道雪怒てあれを
 うてと下知して傍より頻に鉄炮を擲かけけれども面計さしのぞきて鉄炮を打出せばねらふべき
 透間なく中へあたらずらざりしは道雪いかよ紹運の士に手だれぬはさぬかめれうたせ給へ
 と詞をかくれば紹運市川平兵衛といふ士に命ぜられけり平兵衛承り候というて鉄炮を擲へ待所
 に又かの木陰より面を差出しければ市川手き、早に擲たりしに眉間より中り轉び出でうつふしに
 例れ死す敵前後より取狭みければ後陣の由井雪加より道雪へ使て唯今討死を遂べまよ申送
 るを聞て紹運大返しに返さずは味方の後陣危くて此切所を越がたかるべしとて取て返し敵を拂
 て耳納山の嶺に押上たりしかばいや夕日に及びり諸卒はるるど押來りしかば疲を休めよ今宵
 は爰に陣すべしとて曠原に折敷せたり俄に雨降來れども兩將打廻りて士卒は詞をかけたはら
 るるに本より兩將の恩恵になづき服したる者どもなればちつとも疲れ覺白ざりしとぞ斯て一
 夜はろくに陣し明の夜黒木に押付られしかば豊後の兵競ひあへり宗麟も兩將の舉動鬼神のわざ
 成べし崇敬し諸卒も及ぶまでもてなしせられけりされども宗麟よの人々思ひ放れたりし故田原
 親家も俄に心替りして兵を引具して豊後に歸りければおもひくにて事ゆかず宗麟も引返され

しのは兩將も高良山に陣して其年も暮ぬ明る天正十三年の夏に及びければ陣へすべしとて紹
 運は赤司に屯どかへ道雪は北野村天神の壇に移られしに病付て次第に重くなりしかば吾死した
 らば屍に甲冑と着せ高良山の好己の岳に柳川の方へ向て埋ひべし此事背きなば我魂魄必祟とな
 すべしと遺言して九月十一日七十二歳にて終られけり斯て此よし十時攝津守を使として立花の
 城にやり統虎にかくと申戸懸と只一人棄置んこと人の誹も免れがたし立花へ歸し入べき旨答へ
 らる十時陣所より歸り此由をいへば由井雪加されば仰の趣は不可なるに非れ共遺言の重ければ
 背きがたし雪加先爰にて腹を切御供に參るべしといひければ由井大炊某も腹を切右脇の御供に
 我立しといへば誰も争の残るべきと殉死すべき人餘多に及びり其時原尻宮内少輔熟々と聞て各
 達唯名聞と好み給んには然るべけれども統虎公の御爲によりかなりや夫程も存るならん嗣君も
 御腹召せたらんころよからめと荒らかにいひければ雪加聞て尤に候然る上の我思ひ止るべし棺
 をば立花へ歸し參らせ候はん事然るへし崇のあらんよは雪加が一族討を蒙るべまよとて九月廿四
 日陣拂して道雪の棺の供して立花へ引取けり
 (二百十一) 稻葉伊豫守一徹下人罪有て死罪に行ふ時聲を上げて泣く命をしきやと云へば彼罪人
 いやく命をしてみて泣にわらず命あらば一太刀恨むべきよ斯成果る事の口惜くて泣なりとい
 ふと人々悪き奴哉とらう斬棄よとひしめくを伊豫守聞てそれ助よとて繩を解せいのみもして

我わが一ひと太た刀た打うちよとて追お放はなちければ添たきよ三さんいひて立た去さけり其その後のち年とし経へて一いつ徹てつ病びやう重おもくなりし時とき彼かの下げ人ひと來きて力ちからを盡つせしよ本ほん意いと遂ついずとて又また泣なく頓とんて一いつ徹てつ死して葬はらひの後のち彼かの下げ人ひと一いつ徹てつの墓つちに詣まりて吾わがけふまでながらへたるは君きみと一ひと太た刀た恨うらみ申まへしと申ませしむ故ゆゑ也なり君きみ隠かくれさせ給たまひしに生なて居ゐたらむには刑けい死しよ及および泣なしは命いのち惜おしきに泣なたるなりと人の申まさん事こと恥はじく候まとて腹はら掻か切きて死ししけり是こゝを以もつて見るに戰いくさ國くにの時とき上かみの人ひと下したの人ひと其その情じやうの太たい平へい無む為ゐの化くわに浴よくしたる時ときの人ひと又また異ことなるを思おもひしるべきなり

(二百十二) 島津しまづ義よし久ひさ島津しまづ圖ず書しよ忠ちゆう長ちやう伊い集しゆ院いん右みぎ衛ゑ門もん太た夫ふ忠ちゆう棟とうを大だい將しやうとして兵へい五ご萬まんを以もつて筑ちく前ぜん岩いは屋やの城主ちゆうしゆ高たか橋はし紹しやう運いんと攻せき岩いは屋やは要きやう害がいの地ちにあらす寶ほう滿まんが嶽たけ楯たて籠かごて防ぼぐべしといふ者もの有あり紹しやう運いん爰こゝを去さて寶ほう滿まんが嶽たけに入いたればとて勝かつべきあらず敵たてに恐おそれて逃にげたりと誹そしられんも口くち惜おしし此こゝ城じやうと墓はかに定ぢやうめたりとてちつとも動うごかず四し方かたを圍かこみ嚴ごんまぐ攻せきたりければ紹しやう運いん聞きて何なに事こともか候まと問とに新しん納なつ申まける藏ざう守しゆ忠ちゆう元げん矢や留りゆうを乞こて城じやう中ちゆうに申まへき事ことの候まと呼よべければ紹しやう運いん聞きて何なに事こともか候まと問とに新しん納なつ申まけるは紹しやう運いんの武ぶ勇ゆう世せお名な高たかしといへども大だい友ゆう家けに組くみせられ亡なげ衰おとろへられん事こと近ちかきあり大だい友ゆう家けは切き支し丹たんを崇あそめ無む道だうにして復また家けの興こゝろるべきは候まはず古ふるき詞ことばよ一いつ張ちやう一いつ弛ちと申ま事ことの候ま疾はや義ぎ久きうと和わ平へいせられ候まへといひければ紹しやう運いん聞きて斯かく申まは高たか橋はし家けにて麻あ布ふ外げ記きと申ま者ものにて候ま只ただ今いま承うけり候ま旨さし紹しやう運いんに申ま程ほどの事ことにも候まはず聊いさ義ぎの當あたれる所ところを申まべし人ひと能よ聞きれ候まへ凡ま盛せい衰すい消しょう長ちやうは時ときの運いんよて古ふるの

細川ほそがわ島山しまやま赤松山せきまつかやま名なと始はじりして今いま川かわ武田ぶたに近ちか國くににて尼あま子こ大だい内ない等ら一いつ度たびは盛さかんで一いつ度たびは衰おとろへずといふと候まはず紹しやう運いん今いまの限かぎりに成なてよも肖あやを脱だつて降くだ参さんせうと存ぞんべきや大だい友ゆうの家いへも右みぎ大だい將しやう頼らい朝あさ卿けいの時ときより子こ孫そん國くにを受う傳でんへぬれど日ひ向むかの軍いに敗やぶれしより武ぶ心しんあるもの多く出で來きて今いまかく衰おとろへたりされども今いまにも秀ひで吉きち公こう大だい軍ぐんにて九州きゆうしゆうに渡わたらせ給たまひ陸りく軍ぐんに攻せき入いられんに鹿か兒じ島しまの破やぶれん事ことも遠とほからじ勢せいひ盡つ運いん衰すいへぬるを見て志こゝろざしと換かへるは弓ゆみ箭や身まの耻ち辱じやくにて人ひと又また爪つめ彈たませらるべし松しょう壽じゆう千せん年ねん終つひ小こ朽く事こと少すくかし人生じんじやうは朝あさ露るの日ひ影かげを待まちが如ごとし只ただ永ながく世よ小こ殘ざんらんものは義ぎ名な有あり候まと覺おぼえ候ま程ほどに降くだ参さんは仕しらじと高たか聲こゑに呼よべりければ新しん納なつも又またいふ事こともなかりけり外げ記きとは名な乗のりけれども紹しやう運いんならでかゝる詞ことばだゝかひせん人ひとやあると云いふあへりかくて猶なほ降くだ参さんをすゝめて莊せう嚴げん寺じの僧そうを使つかひしけれども聞き人ひとすさらば攻せきよとて天てん正しやう十四じゆ年ねん七しち月げつ廿にじ七しち日にち四し方かたより押お寄よ開ひらの聲こゑを作りかけぬいゝ聲こゑを出でして攻せきたりけり城じやう中ちゆうには思おもひ設たてけたることなれば爰こゝを限かぎりに防ぼぎけれども終つひに打う破やぶられたり三さん原げん紹しやう心しんい「うつつ太たい刀たのかねいひまきは久ひさかたの天てん津つ空くうも聞きぬわぐべし」と一首いつしよの歌うたを塙はらの柱はしらに書かきして討う死しす弓ゆみ削け平へい内ないは強ちやう弓きゆうの手てきゝなり矢や倉くらに上ありさし詰つめ宝たからつめ箭や種たねを借かます射い伏ふけるが左ひだりの手に痛いた手てと負お敵てきの中ちゆうにかけ入いて討う死したり高たか橋はし越こ前ぜん守しゆ伊い部ぶ九く藏ざうも聞きゆる弓ゆみの手てだれにく物もの具ぐのさハヤかなる敵てきと目めにかけてあまた射い倒たふし矢や種たね盡つければ太たい月げつの切き先さきを揃そろへて討う死して出で散さん々に戦いくさひ一いつ足あしも引ひす討う死ししけり尾山おんやま中ちゆう務むが子こ太たい郎らう次じ郎らう十じゆ六ろく歳さいなるが父ちちと一いつ所ところに死しんとて出でけるを母はは袖そでを扣ひかへけ



るゝ振切て敵の中へかけ入討死しけり其片袖母の手に残けるとなり寄手も討れしに屍四方の谷
 と埋るぬ既に城兵残り少くなりしかを何しと猶豫すべきとて討て出とめき叫んで戦ひけるが最
 期の軍よも人に笑はれじいとて或ハ腹を切或は敵と引組で刺違へ枕と並べて討死す紹運は江
 淵右衛門大夫三浦式部黒岩隼人女 童 をも皆刺殺して敵の手よな懸をと下知し薙刀打振薙で
 廻られしが今は是まで也とて和歌と門の扉ふとマめられけり「かばねをば岩屋の苔に埋みてぞ
 雲の空に名ととマひへき」一説なめれての末の世遠く埋れぬ名とやいは屋の苔の下水かくて
 行年三十九歳よて自害して失られけり士卒とわかれみ深く義厚かりしかば救もなき城を守りて
 千八百人の士卒一人も逃散者のなかりしは例少き事なり紹運始は鎮種と申けり
 一説は城中の婦人は 悉く圍るゝに先だちて寶満が獄に入られし故害にあはずといへり又紹
 運薩摩の軍とみ渡したるに馬煙黒く押來る紹運人ゝに向ひ今押來る敵六十已下廿才已上の者
 ぞもなるべし今軍に打勝て吾者共とく討死すとも彼敵兵も又三四年と過ずして野原
 の白骨となるべし人生の朝露の日影と待がおとし義名を萬世に残しなん事武士の本意なりと
 いはれしかば城兵勇氣十倍せし勢ひと透さず一陣に成て薩兵を切崩し一人も残らず討死すと
 もいへり又寄手の大將と島津家久なりともいへり紹運の物具の引合よ一封の書有島津中務殿
 と書たれば家久是を讀よ今度降参と勸らるゝの誅は從はず是義の故也別よ一封の書を大友に

送り届け給はり候へとなり中務類ひ稀なる勇將を殺しけるよ此人を友とせをいかばのり嬉し
 からん又惜事よ弓箭取身ほを恨めしきものなしとて僧と供養し葬禮を執行ひ壇を築きて
 家久香と焼再拜しけれを義と感ずる國風にて薩摩武者皆焼香して涙を流し紹運を稱美しける
 といへり又一説は天正十四年六月島津圖書頭伊集院右衛門大夫兩先陣にて筑後國高良山押入
 島津義久同兵庫頭義弘は肥後八代に旗本を陣し所と 燒 働す筑紫廣門の方に兼て懈りて
 有しかを俄に騒ぎ立防戦の備すべき様もなし七月七日薩州の軍筑後川を涉り其明の日廣門の
 館を取圍み廣門と虜りたり同月十三日先陣の兩 將 太宰府觀世音寺に着陣す其外龍造寺政家
 秋月種實を始として相加り十萬餘に及へり岩屋の麓筑山横岳二日市太宰府のあたり尺寸も透
 間なく陣し兩將より莊嚴寺に僧を使として此度太宰府に攻よせ候ハ紹運に對し弓箭取べきに
 あらず候筑紫廣門二心あるよより是を討べき爲よて既ハ廣門と生捕ぬ寶満が獄ハ紹運の實子
 を置れ候て堅く守らせられ候事謂れなきよ似たりとらうく寶満を渡され候へとぞ云送りける
 紹運 承り候ひぬ素より一言の仰なく押て大軍を以て 某 が守り候城下を馬蹄よ蹴散され候
 事弓箭の禮よ非ずと申べし扱統虎も 道雪の家を續 紹運も今よ有ては關白秀吉に屬し候へば
 寶満も岩屋も關白の城にて候を渡し參らす事存もよらず候との答を使僧歸て云けれとて
 も弱よと城を渡すべき紹運にあらすさらば圍むべしとて諸手口々の攻手を定め七月十四

日より柵をふり矢合を始めたりされども城中堅く守りてひるめる体もなく未申の方尾山中務
 が持口より鉄炮弩弓をもて城へ攻寄たる寄手は打懸敵百人打殺し手負の敵をしらず或時嶺の
 手の寄手より矢留を乞て新納藏人と申者にて候紹運公に申べき事候といへば紹運麻布外記と
 名乗て詞戦ひも及べり藏人詞を盡し利害を説大友殿には切支丹の宗門を尊信有て神明佛法
 を蔑にし天道に背れし故人心散々成滅亡近きに候とて島津に屬せられ候やうに申給えら
 んやといへども紹運節義を説て屈服の色なく來春關白九州へ兵へ出さるべく候さらば島津
 家の存亡も計るべからず主の盛なる時の忠を致し衰へたる時も操を替ざるを以て弓箭取身
 の道とす各達島津家滅亡の時臨て躬を隠す謀を廻らされ候へ只今おびたしく目に餘
 る十萬の士卒も百年の齡を保つべきの斯る心も候ひなんに士の義たる道をこそ存せらるべ
 けれど答へて降るべき事は思もよらず兩將重ねて莊嚴寺の僧を使として八ヶ國の大軍を引受
 堅固に城を守らる事廿日に及べり紹運公の武勇九州は無双たるべし寶滿立花岩屋とも子細
 候まじ和談を取結ひ軍を返し圍を巻はぐし申べし然れども十萬の軍兵の變も候間人質を一
 人賜りなんやさらば此後大友島津和談を紹運公の心も有べし事なりたらんは其時人質を返
 し九州一統島津に屬しなん其後中國に押渡り島津家天下に旗を立て候べしと云送りしるば紹運
 許容せず人質を關白大友家に出さん事いさも有さん秋月種實龍造寺に組し夫より一同に九

州の乱に及べり根本の人なれを秋月に腹切せ薩州の兩將より今度の弓箭は京都又豊州への還
 恨にあらせ筑紫廣門が反心と糾明せんためなりと神文を書て賜はり候ひなば紹運事よく計り
 候べし然らずに此城を以て墓所とすと答へられしかば和平も事遂げ遂に七月廿七日は諸軍一
 同に押寄て卯の刻より軍始りて午の刻の終まで寄手大軍入替て攻たりけるも手負討死いふべ
 からず去とも死骸と踏越息とも繼せず攻戦ふけふを限りと思ひ切たる城兵各持口を一足も
 引ず切死にしたりければ城陥りぬ紹運の左右は名と得たる剛の者共五十人斗に討ちされた
 るが後度の勝負をも思はゞこそ今を最期の軍なれば當るを幸ひに向敵は切先を構へて討て懸
 り一陣二陣と遙の谷底へまくり落しければ半時計は攻入得ざりけり紹運手負討死の士卒を見
 めぐりて死たる者には無二の忠切謝するも詞なしと一禮し息の通へる者には自ら氣付の藥を
 口に入らるかゝる際に及で軍兵に愛と盡されける有様數年城を守り度々の軍に功を顯し今度
 は萬一も運を開くべきもあらざる大敵の圍に運士卒一人も落散ざりし類なき事よじいひ
 あへり其後紹運薙刀を提思ふ程戦ひて辞世乃和奇を罪し書付三十九歳にて腹を切れしかば寄
 手攻入て敵ながら斯る大將も又有べきや士卒一人も降參せず逃散事なかりしを惜まぬ人ぞな
 かりける内室を始め刺殺すに暇なくてとらばれとなりければも深く寄手もいたはり養育しけ
 るとぞ統増此時室滿が獄に有薩摩の兩將使を以て城と渡されよと云送る統増今年十五歳也城

中以ての外軍兵少く防さ戦ふべき事思ひもよらず秀吉の出師と待受べき間しばらく生延て時を窺ふよしかずと相謀り統増を立花に送り届け給はりなんよは和平すべし然らずば城と枕に切死すべきと答へければ兩將より子細めらじと許諾し神文を書て送りしが俄に約と變じたばかりて立花に送り返さず其後肥後の吉松といふ所に移し番兵を付置たり紹運の内室は筑後の北の關といふ所に移し置倍立花へ使を以て降参せられんやと云送る統虎實父にて候紹運は關白の爲に自害と遂候ひき我又紹運の爲に自害と遂べしとて軍兵を寄られよ此城の切岸よて箭一ツ仕らんと答へられけりある處に八代に陣せられし義久より兩將に下知し秀吉師と出して打向はる、由云ふらせり疾兵を返すべしとありければ八月廿四日兩將太宰府を引拂ひぬ統虎陣を押し高取の城を攻落し城主星野中務大輔兄弟を始悉く討取られより岩屋に向る所に立花の内小野理右衛門といへる者忍入て火を懸たりしかばおはてさわざ一支もなく逃落けり秀吉威狀と賜はり大に稱せらる統虎又密に龍造寺に北の關に押込られし母を奪取給はらんやと頼れしよ龍造寺も薩州と弓箭を取べき志ありしかば心得候とて堀江覺仙といへる者に軍兵餘多指添て北の關に押寄薩州の番の者と追ちらし紹運の後室と奪取頼て立花へ送り届けたり後室此比は法名と宗雲といひしとぞかくて薩州よは統増を八代へ移し高津加の法華寺に置て警護の兵よ嚴しく守らせたれば附添たる者共さまぐに謀を廻らせとも本國とは違

ざりの謀もすべし術なく日と送りけるに尙心もとなくや有けん薩州に移し下堂院と云所に置けり秀吉九州へ渡海し先陣薩州千盛まで進まれしかば統虎使を以て統増と渡し給はらんやと義久の陣へ云送られければ義久子細に及はずして返し参らすへさよし答に及しおは十時攝津守を迎として下堂院に遣し付添たる面々も殘なく引取千盛へ行道海邊を過けるに秀吉の軍兵船を掛並へ居たるが落人を見ておますなとて小船のりひたぐと陸に上り取圍んとす十時勝て置き者にて逃りよ有ける小船をかり本船に漕よせ統増なる事を斷りければ大將と覺しき者船屋形より采配と取て諸卒よ下知し静めければ虎口と遁れて千盛に着兄統虎の陣に入て對面せられけり此統虎は後に左近將監宗茂とて驍勇無双の大將なり過にし天正十年十月六日秋月と道雪紹運宇龍野にて軍有し時紹運自薙刀をとり烈しく戦はれしに統虎十六歳にて初陣なりし其器量を見て道雪養子よまて家を嗣すべき事と紹運お乞て吾子にせられしとぞ(二百十三) 紹運若き時彌七郎といひし比兄の監理齋藤鎮實の妹を彌七郎よ妻せられよと約束せられけり其初豊前中國と軍有て殊よ騒しくて仰へ取ずして打過ぬ其後彌七郎鎮實よ對面の折から兄お申かはせし如く迎取べきよ軍の最中よて斯は遅り候頼て迎へ申さんと語られしに鎮實けりく申かはせしは可忘も候はねど其後妹の痘瘡と煩ひて以ての外にみぐるしく成ぬ中よかれが有様にて見届らるべきよあらず今にてい参らせん事叶ひがたしといひし時彌七郎色を

かへ夫は存も寄ざる仰を承りぬるなり齋藤家は先祖大友家にて武勇たくまじき弓取にておはすれば兄にて候もの、迎へ申さんと約束しつる事に候夫に辭退も候まじ我は少も色と好む心に候はずとて頓て婚禮あり其腹よ二人の男子出来にけり此迎へとりし頃紹運二十才に及びたりしと
かや

(二百十四) 島津義久大友を攻所々小亂れ入志賀太郎親次獨義久も降らず義久松の尾の城に在て秀吉大軍にて九州に渡らるゝ聞て薩州より引退く親次大に悦び嶮岨の地に兵を伏て打破るべしとて鉄砲の手利廿人擇み出し山海が嶽の林に待せけり然る處に首藤五郎太夫堀八郎といふ者此度の撰に残りけるを口惜き事にかもひ密よ道に隠て薩摩武者二騎打落してけり扱は伏兵有ぞといふ程こそわれ大軍林に入草を分てさがしければ二十人の者ども力なく藥と惜まば敵に打かけ追くる者共打殺して引退く親次大息ついで義久とば山海が嶽は越すまじき物を天の祐に逢たる義久なりと云れけり

(二百十五) 豊後國合志常陸介を大友義鎮攻る時佐伯紀伊守(一説は彈正少彌)惟教大將たり佐伯が士大將高畑三河一日に十三度の功名あり其後人問て僅に鎗刀一兩度追り合ても大に疲れ怠切て小兒にも負べきは一日十三度の功名はたどひ志は飽まで剛なりとも力も息も續きぬることいぶかしけれといふ高畑聞て打笑ひ別の子細もなき事也我戰場に打臨て勿論の事といひひな

から死生存亡の間に於て少しの思案を費すべき事なりとざる故に人は驕がしくても我は静なり大かたは鎗を合せ太刀を打ちかへざる已前に力を出し氣を張ならん是に依て精神草臥疲れたるならん我敵に逢ふ時我首と敵にとらするか敵の首と我取か此二ツの中天命に有とおもひて初と緩きに似たれども打合ふ時一決して一鎗の中は勝負分る、故に疲る、事なく候なり不入處にて氣を苦しめざるゆる幾度事に逢ても胸中安閑なりと答へけるぞ

(二百十六) 同じ城攻に佐伯に屬したる森迫(一本關に作る)三十郎親正首を取又戦ひて討死する時に十七才あり常陸介が從兵山本十郎といふ者其首をとる小鍬形二本菖蒲の冑なり短冊を付たり

命より名こそをしけれ武士れ道にかふべきみちしなれば
常陸介感じて其首死屍を高畑が訴に送り歸しけり親正は豊後大野郡三重郷の人なり

(二百十七) 天正十五年二月秀吉島津と討る、時大和納言秀長近江中納言秀次八萬餘島津が豊後府内より薩摩へ引退く後を追ふに亂人高城賤部の城と取圍み附城五十一ヶ所築きたり中に耳川を越て根白の砦には宮部善祥坊繼潤木下平太夫貞基龜井新十郎廣政鹽屋隱岐守光成福原右馬助直高一萬餘よて守りけり是は島津が後巻と防ん爲なり頃は四月十七日の朝島津使を根白にたて高城の城を渡すべし士卒を助け給はり候へと云送りければ宮部五十丁間隔たる秀次へ

此旨申て後兎角の返答を申さんとて使を返して後斯欺き怠らせ思ひもよらぬ所へ寄べき謀也
 其用意せよとて人夫千人俄に山々の竹木を伐せ陣の前に深き二間廣き三間計のあら堀とかまへ
 柵木を結ひて我もくく物具して待所に物出小出したる者ども走歸り敵押寄せと云も果ぬに義
 弘一萬六千餘の兵を率ゐる関と揚て攻寄たり宮部木戸口に進み出一番鎗と名乗て相戦ふ田中九介
 其子彦六國友半右衛門三村三郎右衛門を始の大剛の兵ども先を争ひて切て出相戦ふ義弘も義久
 の子にて素より聞ゆる勇將なり薙刀と提げ真先かけて只今此城踏破れ者どもと呼はり多勢堀を
 越胃の鏝を傾け蟻の如く柵の木に付て引破んとする時兼て巧みたればひかへの綱と斷り柵と堀
 の中へ倒せしかば薩摩武者討る、者八百餘人に及べり義弘愈怒り進で屍を踏越て内の柵に攻
 奇透間もなく戦ひけるが内の柵をも打破り十八日の朝三の丸と攻取たり宮部を始め愈死地よ
 入たれい愛と限と防ぎ戦ふ斯りしかば秀長三萬計にて耳川に打回ひ根白の方を見渡せば薩摩の
 軍兵雲の如く而卷て鉄砲の音聞の聲矢叫び相交り天地も動く計なり川を渡らんと進まれける小
 尾藤左衛門尉知宣秀長の馬の轡を取て義弘の鋒武出四郎が長篠の掛り口に似たり關白(秀
 吉)もかたはせ給ふべからずと強て留ければ既に川へ打入たる馬を扣て進み得ず藤堂高虎は手
 勢と率ぬ川を渡し搦手より根白にかけ入自ら鎗かつとり敵攻多突伏て宮部に力を合せけり黒田
 孝隆同長政も手の者と引分進み行道より村上彦右衛門と云剛の者を遣して唯今秀長六萬の兵よ

て後卷せられ候と呼はらせければ宮部と始め大よ勇み悦べり長政の士栗山後藤川を涉り義弘の
 陣に切てかゝる秀長の士大將羽根田長門守も千計の兵にて黒田父子よ劣らざる鎗を打入攻戦ふ
 小早川隆景も三千計よて耳川に来る秀長今敵陣にかゝるべきと存れとも人々同心せられず如何
 すべきと問るれとも隆景冷笑て物をいえずかゝる所に井上伯耆就遠浦兵部宗勝古き背破の物具
 着て進み出島津はけふの客人あり訪来るに出迎はせば弓箭の禮儀に違ふべし軍計定と申事や候
 と秀長と嘲りけれども進むけしきのなかりければ隆景馬を打入て川を渡り敵の後陣と取切んと
 進まれければ是より薩摩の軍亂れて北取しければ義弘の從子三郎忠親踏止りて討死しけり黒田
 小早川使を秀長の陣へ遣して味方は八萬に餘れり鉄砲三千計左右の嶺取切打立るはぞならば義
 弘を打取ん事掌の中よありと申されけれども知宣堅く留めて追ざりしるを義弘取軍の士卒と
 集め所々に火をのけ引取たり後れたる士卒五十餘人戦ひ疲れたるを生捕て引來る助て歸さんい
 かにといへば是見られよ生て又歸らじと紙に書て誓に結付て候が疾首を劘られ候へとて皆殺
 されにけり薩摩の人の勇氣とてゆゝしけれ秀吉宮部には日本無双といふ感状と與へ尾藤は領國
 贖州と召放されけるとかや

(二百十八) 秀吉島津を伐る、時浦生氏郷前田利長巖石の城と攻らる、に氏郷の先陣浦生源左
 衛門此頃と坂小坂といひけるが真先に進でかきにいでいらばんと墨黒に書たる白き吹貫を門の真

中より押立をめきさげんて相戦ふ雨の降如く鉄砲と打出せむ吹貫は芭蕉の秋風に破れたるがごとし大音上て一足も引な者共と下知し面もふらず攻入けるを後陣より是が聞ゆる蒲生が内の士大將に小坂といへる大剛の者よと口々に擧たりける寺島美濃守此頃は半左衛門といひけるが是を黒き吹貫おし立坂は續きたり利長の士原松久兵衛を始として先づ争ひ攻入終に城を攻落して首四百餘打取たり秀吉氏郷に感状を與へられ小坂に金銀千匹羽織を賜りぬ

一説に小坂を一番と記せり秀吉坂と賞して刀を與へられけるに坂申けるは一番の賞にて候へば栗田其一人也栗田は黒き吹貫にて候ひき坂が吹貫白くて目に立申たるなるべしと譲りければ秀吉彌大に感じ刀を栗田と與へらるともいへり

(二百十九) 野矢甚右衛門ハ敵五人討取首五ツ提て氏郷の前に來る氏郷たやすくも首多く取たるかな如何とて問る、に敵の大刀先左の腕に當ると存候時射出せむ中らぬ矢はなき物なりとぞ申ける

(二百二十) 秀吉島津を伐る、時秋月種長小熊の城を出て秀吉の陣に至り降参しければ秀吉對面降参の禮を受て後更に心おく事なし家に傳はりたる檜柴の茶入とて名高き物有とこそ聞わけはれ一目見むやと問れしに種長速に取來り候べしと云秀吉さらば使を以て取寄よとて秋月の從者を返してかの茶入を取來る秀吉見て聞しに優れる物なり家の寶たれども我に得させてんや

と懇にいはれしかば種長既に胃を脱で參候上は何條をしむべきやうの候べきと申す秀吉殊に悦ばれ久しく我陣所に在て軍兵ども怪しみ危ぶむべき疾歸れ我を防しは弓箭取身のならひなり降参の上は吾恨み露も不殘領地本のみとくなるべしといはれしは種長悦びて馳歸る種長が士卒若秀吉種長を害せらる、ならば秀吉の陣にかけ入切死にせんとおもひ定て居たりけるふ歸りて委しく秀吉の詞茶入を乞れし有様を語りければ皆思ひもよらぬ事よといひあへりかくと聞傳へて九州の敵多く戦はずして降参せり

(二百廿一) 新納武藏守忠元ハ島津家の士大將也勇名とて指を折る時第一なりとて大指武藏と稱しけり義久秀吉に降参の時新納は肥後の堺泉の城にあり一説に大口と有日本國の軍と引受一戦とせずして降参せんハ弓箭の無禮なり疾陣を寄させ給へ一軍して討死仕んとぞ申送りける秀吉頗て師と城下よ進めらる、にかの城の路三四里か程は馬に鞍をかろし鞍の紐と解ばかりの險難にて輒く打入がたし武藏守暫く支へて後一説に義久斯と聞て大に驚き疾く今は是までなり主君既に降参せし上の家臣の身として争でりの心に背んや弓箭の禮義をもてかく申たるにてころ候へ日本の軍を城より引受る事士の一面目よて候とて城を出よけり

一説に島津降参の後鹿兒島の外の城々は壞つべき由秀吉下知せられしに新納は城に籠り専ら防取の手段をなし其身も病と稱して引籠り居たりしよ秀吉聞ぬ体よして歸京ありけり其後島

津上京し武藏守も供したりしに程經て秀吉何とて新納が城をば壞捨ず合戦の設したるや怪しき事なりと問れしに武藏守人々の答と待す進み出て仰出されし旨義久下知せしかども承入ずして軍を志し居たりしに踏過て通らせ給ひしこそ恐多く候へども恨しく存候へ其子細は城と開く事も古より其例なき事にあらず只今日本の主と世に稱し申候關白様はるか筑紫のはてまで引出し奉り鹿兒島に申請候事は鳴津が家の譽とや申さん新納の城を破棄すは悪き奴め踏潰せとて軍兵を向られんい必定なり其時一戦仕らば關白の御馬を向させられたる城なりと末代までも申傳へなんには子孫の面目是に過たる事や候べき討て出火花を散し一足も引ば討死したりとも是又武名とや申べき敵に箭一筋も射かけばして城を破捨候事口惜く候ひき新納は日向口は在て宮部善祥坊と始として先陣の人々に迫合たりし島津降参のよし告來り引返し候ひぬ島津が兵と以て日本國の大軍を引受合戦始終の勝利と計るべきは候はねども新納肥後口を防ぎたらんにい地は險なり關白殿下いかに智謀たくましくおはしませ候とも概く攻入給せん事は思ひもよらざる事也嶺々谷々より種々島の鉄砲を打かけ思ひのまゝに先陣と打なやまし申べきも今に至て残念なる事どもなりと恐る、所なく申けるは秀吉聞て新納は聞及びたる勇將なりとて大言の咎は更になかりけり

評註 常山紀談卷之二
増補

〔二百廿二〕 秀吉黒田勘解由孝隆に豊前國を與へられしは一揆處々に起る中も岐井谷友房はも下野國宇都宮彌三郎友綱が次男鎌倉の比より地を領したる子孫なり毛利壹岐守勝信に誘れ郷士をかり催し民屋を放火す黒田父子は馬の岳といふ城を有けるを城下に押寄る長政其時十六歳岐井を討べきと勇まされけりも孝隆同心せられ長政其頃は吉兵衛といひけるが若士ども引具し切て出れば一揆も一支もせせ敗北するを追かけたり岐井は山中の險路にそびき人多くの大石の陰に逃隠れたり大野小辨といふ若武者具先進みたるを一揆起合せ七八人取巻て馬より突落しけり後藤又兵衛小河傳右衛門久野四兵衛馬の首を引返し敗北しけれども長政の馬廻りは具丸に成て一揆勝に乗押詰り合す一揆は木蔭谷かげより五人十人かけ出狩場の鹿と射ることく竹の鏃の矢にて雨の降様に射たりけり長政馬より下り立討死すべき色なりしを近習の者其馬に掻乗せ退きければ一揆頻よ追かけけり長政の馬矢に中りしは爰にて自害せんと云れしを菅六之介政利已が馬に召れ候へといへども關人早上帯を解んとせられけると三宅三太夫後若狭一走り大將の自害の所にては候はずとてから抱き馬を打のせ片手馬を牽き片手長政をさらへて我等生残りたるに殿を遺討せや念もなく候地乃利とみて引返し一揆の奴原追崩し申さんどて引退く管は長政の鞆の組違ひよ手をのけて少しも離れず木屋兵右衛門と長

政の鎗と持て歩立にて續きたり一揆政長と見知り餘さじと付幕ふ三宅曾木屋を始として岡本彌兵衛小河久太夫坂本七左衛門己下五十人計丸く成て思ひ切たる色と見静に詰めて二里計追かけて其後の幕さりけり後藤は如何したりけん猩々緋の羽織を脱捨たりを長政とらせ歸られけり後藤度々の武功有て一萬四千石與へ小隈の城もありしその後小井谷の軍物語に及べば俄に病出しとぞ木屋兵右衛門は長政に向ひ後藤小河か有さま大臆病の男よて候を親子共に取分て懇にせさ勢給ひ候此兵右衛門は誠にあるにもわらぬ体に候へども敵追結來りなば一番に討死して御目にかけて候べしさてもく敵かしき御眼力やとあくまで罵りて退きけり其後長政筑前を給りし小祿の士皆祿と増たりしに兵右衛門は六百石に鉄砲の者二十人司れりさのみ賞美なありまかば人木屋に殿を岐井谷まで罵りたる事とねたく思召て斯は有あらんといへば木屋我も左思ふ事よ此憤ならバ首をも刎られなんともへどもさもわらず是より後軍あらば度おとに大言を吐ちらし只今寵愛にはほる奴原の中よ武者振の悪者わらば恥を與へん事我思ひ出ありといひけれを聞者汝は下部のいはゆる口に倒されたるべしと諷けれバ今の祿と削らるゝとも口はきゝたき事よとて笑ひけるとぞ

孝隆は馬の岳の矢倉に上り長政の敗軍を見て笑ひ居られしかば側より危く候疾加勢とせさせ給へと口よいひけれどもいやく引おくれたる味方の眞丸になり静々と道を引退くは吉兵衛な

るべし危ふげもなしといはれしが果して長政事故なく引返されたり長政敗軍を口惜しとて引こもり夜の物打被て臥居たり孝隆物主を呼て弱敵とば恐れよ初め勝を勝あするもの也勝すくれば必敗の本なりと戒られけり惣屋善七郎といふ侍長政の近習に仕へて京に使に行此日の暮頃ふ歸て長政の寢所に行けふの敗軍是非もなき事に候さむかりの者共小弁を捨殺し殿をも捨て逃たりと承候殿もよき討死の所にて候ひき何とて敵に後を見せ給ふや父祖の高名に瑕付申こそ口惜けれ善七郎が御馬の傍に有ならば鎗を合せ一揆の奴原追立て引取べき後藤あらきたなき振廻に候はずや重て一揆と軍あらん必死と思召定められよとて座を立ければ長政も思召をもらひ思ひ切たる体あり翌日善七郎又申けるいあながち口惜とな思召れ候ひそ一揆押寄候ハハ眞先かけて切崩し恥を雪ぎ給へ善七郎は御馬の先にて討死せん逃たる奴原も勵されて軍するほ途ならを鬼神なりとも恐るゝよ足すと云慰めければ長政起上り物語せられけり長政は面目なしとて父の前よ出ず孝隆扱ひ必死と期したるなりと察し老功の者餘多長政に差添てをやりたる下知と禁せられけり一揆又上毛郡へ押寄ければ長政火隈の海近き所の山よ上り待かけて思ふ圖よ引受一同に乗出し馬のかけ場よかりければ縦横に乗制一揆敗北する處を退立たり鬼木惣田などいふ者討れ散々に成にけるよ長政惣田内記を手づから討取尙もかけんとせられしを老臣ども馬より飛下り押へて陣を整へけり惣屋善七郎は敵の中に乗入鬼木掃部か首と取右の方よ見れば長

政敵の首を取たりしるば又馬引寄打乗退詰て首二ツ取しが痛手負て精神も亂れたるが尙も若殿の功名と問聞て嬉しや先日の恥辱雪がせ給ひぬ此上はひもひ置事なしと云けり長政善七郎が枕元に居よられしかば長政の手をとり此後能心得給へ殿に討死し給へと申者はなき事に候と云ば長政涙を流し汝を先だつる事の殘多きよと咽ばるれば善七眼を見開き先の頃諫め申せしは必死と思ひ定めたるゆゑに候今度の高名ころめでたけれ今生の御目見只今を限りなり人は一代名は末代と申事の候といひも終らず空しくありけるぞ比類なき者なりと云あへり翌日孝隆火限よ來りて對面し若き者は懲る事なくては思慮の練ぬものぞかし終の勝を計れ只勝べきとのみ思へば敗を取なり良將ハ時により緩に見ゆれども卒爾の軍はせざるゆるる終の勝と全うするよと教へられぬ長政又押寄んと云れしと孝隆制して要害を設け兵糧の道を塞ぎ馬の岳は歸られけり斯て一揆勢ひ盡ければ毛利輝元を頼み和平しけれども友房は病ひとて出ず中津川より三宅三太夫岐井谷より傳法寺兵部使者往來して互に物語しけるに或時三宅云けるハ友房内室なしと聞勘解由に妹あり婚禮あらばいかにと云ふ傳法寺夫は悦しき事なり能はあらはれんやといふに三宅われ年若ければ老人と相計てこそといひけり傳法寺ハ敵ハ妹を人質と取んは然るべしとや思ひけんわりなく三宅を頼みけり三宅我主君の心ともしらで容易にも申出たる哉事調ずと面目も候はずなどいひて長政に斯と告て孝隆にも告遣しかば密謀をなし三宅に孝隆書を與へ縁を結

ぶは末頼母しき事なれども例の鹿忍ならんと書れたる三宅傳法寺は語りて潛に其書と取出して見せ吾をば常々鹿忍者と戒候此度も又しか也といへば傳法寺是を既に開届けられたるなりと悦びかくと友房に告て是より心置なく中津川へ出べきにぞ定りける三宅又迎ゆけば友房三百人計にて山中を打立けり三の丸の大手にて人を留次第に滅じてけり本丸の書院にて對面あり吸物と出して酌は小川傳右衛門なり野村太郎兵衛肴をばさむを相圖に傳右衛門一の太刀太郎兵衛二の太刀と定めたり長政孟とさしける時野村肴と持て出けるが持たる臺を友房に投付飛か、り眉間を切る小川おくれたりと脇指を抽て切付れをさばかり逞しき友房即討れけり供の者をば所々に手當して物具したる者共鎗ずくめよして殺しぬ岐井谷へ軍兵を向て打滅されけり小川野村一二の定有しに違ひたりしかば小川怒て其夜野村にいひけるは岐井を吾初太刀たるべきよ先を越れ面目を失へりいかにと問野村打笑ひ左思ひるハ理なり能聞候へ年をいへば吾ハ弟なり汝功名は四度に及び我は唯二度なり是ほど劣りたるもの、そなたよ先をさせて我後れなば是ころ面目を失ふといふべけれ栗山か又我兄の多兵衛とならば前後をあらそはれん事似合たるべしかく劣るたる我に爭れんははとをげなし只免され候へといひければ小川素より心易き事なり但し心安くも切れたり尤としていよく親しみければ人々野村が理りも聞事なり小川もよく聽入たりと感じける

〔二百廿三〕 秀吉北條を討る、時諸將浮島が原に並居て秀吉をまつ秀吉糸織の物具着て唐冠の青黄金をちりばめたる太刀佩て十俵の大なる羽盡に征矢一筋指仙石權兵衛が參らせし朱の磁藤の弓持て七寸有ける馬に金の瓔珞の馬甲かけ靜に歩ませて打通られけるが 東照宮信雄と共に出迎ひ給七を見て馬より下りいかゞ貳心有と聞たりいさ一太刀參らんと太刀の柄に手を懸らる 東照宮左右の人に向はせ給ひ軍始に太刀よ手を懸られ門出の目出たく候と高らかう仰有ければ秀吉何ともいはずして又馬に打乗通られけり

秀吉此出陣の時濱松の城に宿せらる本多作左衛門折部御使に參りて歸りけるが旅装の儘にて諸將の中よ進み出 東照宮よみかけ奉りていかに殿はいつよりかく愚まなり給へるや國を持つ人の城を人にかそ事や候さらば女房をも人にかし給はんかどぞ罵りける 東照宮彼は本多作左衛門と申剛の者にて候が家久しく睡くて只今のやうなることと申にて候無禮の詞と申候と仰有ければ人々 承り借は承り及びたる本多殿まで候ひけるよかゝる事申人多く有べきやと賞しわへり作左衛門物あらき入なりけるに三奉行の中よ命せられ 政を執しに甚 仁愛の事のみふて獄訟を断るに理正しく四民睦き服しけり 東照宮の神慮淺からぬ御事なり

〔二百廿四〕 東照宮小田原小向はせ給ふ時先陣は榊原康政と命せられ井伊直政御旗本と定めたまふ直政毎も先陣を好まれしに此時は少しも辭退の景色なかりしよ小田原にて秀吉かたへの人儘よ引具せられしとみて唯今取圍て討取べき時よ候と進め申せしを 東照宮聞し召入られざりしかばさらば先陣たらんといはれしとぞ

〔二百廿五〕 山中の城を責る時木村常陸介師春が士鳥井源八郎先がけして城に付名乗けり羽柴藤五郎秀一が士礮野平三郎續き來り汝は首取源八と世にいはれたる譽の士なれども田舎をだちなる故武功を辨へず斯る場にてハ人はあきれ氣後れる物ある故爰まで名乗れば是に心付て我先にと進むゆゑ思ふまゝある獨功名もならず物の譯もしらず名乗まじき處にて名乗なりと笑ひければ鳥井聞て平三郎は志の士と聞しに眞の士志をばしらざるよ人のあきれたる時は尙高聲よ名乗て人に心を付力を添て多くの人と用に立るこり武士の義なれ獨高名をせんとするは小事なりいふに足すと答へしかを平三郎云ふ事なかりけり

〔二百廿六〕 小田原と圍む時國清公の攻口は搦手の山の上なり目の下お見かろし鉄砲と打入けるみ城中よりあけ矢よろつ鉄砲烈しく士卒進み兼たる時南部越後銃口と空に向て打せたり其玉雨の降が如くなりしかば城中ひるむ所を見濟し鉄砲を山をなまならべ透間なく打せて攻破りけり

〔二百廿七〕 同時九鬼大隅守嘉隆日本丸といふ大船を乗廻し南の海上を取巻けり此所はわら海よて東風吹時は波浪山嶽を倒しおくるが如し船をかけ並る事思ひもよらぬ所あるよ秀吉城をか

こまれし間五十餘日風靜に波穩あり是よりきて小田原海邊風なき日を上様日和といひならはしけり

〔二百廿八〕 同時 東照宮伊奈熊藏を召て仰出さるゝ事どもあり其時伊奈去年より兵糧の用意して沼津に運びたりき然る小世笠根山中穀物の價江尻沼津と相同し遙く運漕せんより爰にて求る事然るべし心得がたき事なりと申けるを 東照宮聞し召夫は長東大藏大輔が謀なり長東は武功勝れたるにもあらざれども斯る謀は長じたる者なれば秀吉城主として寵せらるゝがし汝が職にては兵糧運漕の事よく心得べきに心得がたしといふは吾心も得がたしと仰有ければ伊奈汗を流して退出しけり

〔二百廿九〕 同時浦生氏郷金の三蓋菅笠の馬印ゆるされ候へと申されしは秀吉夫は臨ゆる佐々成政が馬印にてたやすくは免しがたし今度小田原の武功によりて望む所にまかせん物をといはれしかば氏郷今度の軍に人の目を驚かすかさらずは討死さかもひ定の繪像とありて日野の器提寺も籠め打立ける期て五月三日の夜かき曇りけるに紛れ城中北條十郎氏房が持口より夜討をしたりけり氏郷も今夜は討入べきと懈るなど下知せられしに果して廣澤兵庫秀信助重大將にて押寄たり氏郷の物見の兵衛野萬右衛門に行逢ぬ弓取直し指詰引詰射れども叶はずして引返せば敵進と來て柵の木を打破る浦生源右衛門郷成田丸中務直政町野右近幸和切て出爰を専途

と戦ひけり氏郷銀の鯨の尾の冑の緒をしめ

氏郷の許に新に仕ふる士に吾家よ銀の冑を若たる兵度ごとと眞先に進み出て闘くなり此男に劣らずふるまふべしと云れけり氏郷彼冑着て毎も眞先けられをぞ

兼て一丈餘の鎗を設け置れしと提げ追立々々進まれけるは廣澤兼て鐵砲を後陣に並べ置たれば追來る寄手を打立けり廣澤へ問ゆる剛の者をるが鎗と横たへ片足を堀の中へ陥入れ大音上一鎗參らんと呼はるを氏郷聞て飛り突合ければ浦生左衛門郷可同五郎兵衛郷治加又右衛門等かけ來りめきさげんで攻戦ふ廣澤は今宵夜討の大將廣澤兵庫一番鎗も高らかに呼はりけるを氏郷目よかけて堀の中へ飛入て撃とらんと面もふらず冑の鐵を傾け鎗を取延た、さ立られしに敵兵二人氏郷の鎗を取んとする事七八度に及びしかば氏郷廣澤とば討もらされけり寄手餘りはげしく戦ひけれを廣澤もかなはしとや思ひけん城をさして引退く氏郷いづくまでもと云ま、に先に進んで追れしかとも門を閉て鐵砲を擲出せば引返されしに冑に矢二筋折かけ物具に鎗の疵透間なく十文字の鎗ささらの如くなりしかば秀吉威狀にかの馬印を免されけり

〔二百三十〕 武州八王寺の城主北條陸奥守氏昭は小田原有て家臣留守したりしに前田利家上杉景勝攻むとて先に降参しける北條氏邦に使を城にやらせ小田原既に破れぬとく城を渡し候へと云送る中山近藤村野等從せず氏昭降参せば證書を賜へりて城を出べき旨下知すべし然らずし

て降参せば士の瑕瑾也氏那が如ら臆病者は一人も城中に候はずと答へけり利家景勝も其義も感ずといへども扱止べからざれを一萬五千の兵をもて圍れけり甘糟清長攻入て火とかくる狩野一菴近藤出羽助實金子三郎右衛門家重死在ひに切て出討死す横地監物は氏昭の第一の長臣なり火もの上れば今日を限りに敵々に戦ひけるに寄手討る、者多し中山勘解由家範は武勇の將殊に八條修理滿朝が馭法を傳へ關東無双と世に稱せらるゝ人なり大敵に少しもひるまざ二百計にて突て出爰を最期と切て廻るに寄手新手下入替攻ければ僅十五六人に討なされたり利家誰も中山もかりあると問るゝに松山の降人根岸主計定直が妻は中山が妻と兄弟なり小岩井雅樂助は中山が馭法の弟子なるよしを申す利家疾中山に味方に屬せよといふべしとて兩人と城中へ入られしに中山既に自害して其妻も自害したるがまだ息かゝりて有けれバ詞ををはして馳歸り斯といへバ利家大に惜まれけり監物は切ぬけて逃出けり北條家關東の城々多しといへども豆州菰山の城の外は多く降参しけるに八王寺の兵城を枕に戦死せし事を 東照宮聞し召其義を感じ思召れ中山か嫡子助六郎昭守二男左介信吉は祿賜はり昭守が子信守大坂の軍に功有信吉は後水戸中納言に仕へて備前守と稱す狩野一庵が子主膳も仕へ奉りけり

〔二百三十一〕 八王寺の城攻め城兵切て出死狂ひする時利家の小性大音藤藏一番首と取たる處に雨森彦三郎續て首取て利家の前に至て實檢に備ふ一番は大音なりと申て二番首の帳に記させ

たると利家大に感せらる其頃大音は利家の勘氣を蒙り居たる故數度高聲お性名を名乗しるば諸人一番乗といふ事を知てけり

〔二百三十二〕 北條亡びて後秀吉石垣山の本陣に諸將集りて酒宴に及ぶ時信雄は舞の上手と聞あはれ一曲観申度と秀吉ははれしに信雄吾を侮ると口惜くや有けん不吉の詞を舞れば秀吉かゝる悦の中に忌々しき事ども心得ずとて那須に退やられけり此時までも千餘騎の士を具せられしが儘に打連て都須も赴かれぬ時を計らす勢いと知す無益の空云ふ國を失はれし事のうたてさよと人これいひあへり

〔二百三十三〕 北條滅亡の後秀吉坂部岡江雪齋に汝先年北條の使として上京し約せし所忽背て名胡桃の城を取事氏直の姦計にや又汝が詐なるものと責問るゝに直に申さんと答へしかば秀吉大に怒り手枷足枷を並べ江雪を呼出し刀を奪ひ取左右の手を引張庭上に引居て後秀吉罵て曰汝を約せし處に背くまど誠に憎むと餘り有且日本國の兵を動かし主君の國を滅せし事汝に於て快きやと罷らるゝみ江雪色も變せず氏直更に約に背くの心なく候邊鄙の士愚にて名胡桃を取終に弓箭及て北條の家亡びぬる事江雪の思慮いかんともすべき様の候はず誠お家の亡ぶべき運命にや候わんされども日本國の兵と引受ること北條家の面目なり此外申べき事なし疾首を列られ候へといふ秀吉顔色打とけて汝を京に引上せ 殊に懸んと思ひしに大言を吐て主君と罵

しめず大丈夫といふべし命と助ん吾も仕へよとて許されけり坂部岡を改めて岡と稱しけるは此時よりの事なり

(二百三十四) 秀吉鎌倉の鶴ヶ岡に詣て八幡宮の戸を開かせ頼朝の像を見られしが脊中を打たしき微賤より出て日本と掌に握る事我と御邊と二人なり然れども頼義父子鎮守府將軍として東國の者ども久しく親しみ多かりき蛭が小島より兵を起されしに關東の靡き從へるも謂れなきにあらば我は士民の中より斯日本を思ひの儘にすれば功尙高しといふべしといはれけり

〔二百三十五〕 秀吉陸奥へ趣く時宇都宮まで佐野天徳寺を呼

野州佐野幸澤山の城主佐野小太郎藤原宗綱天正十三年討死して子なし家臣連判の起請文と小田原に送り氏政の弟氏忠をもて家と繼宗綱が伯父天徳寺了伯は佐竹の一族の中を乞て佐野の家を嗣んとすれども是を用ひす了伯は夫より京都に趣き黒谷に閑居せしを秀吉北條と伐る、時郷導とせられしなり

物語させて聞れしに武田上杉の弓箭盛なりし事と申ければ秀吉冷笑ひいかに天徳寺謙信信玄といふ坊主り疾死たるこそ幸なれ今にながらへ居ば一人には薙刀とかたげさせ一人には吾興の先をる米傘を持せて馬の前に召具すべきは此世よあければ力なし何條車が、り坐備みなたはことなりとぞいはれける

秀吉此の大言と放つ固より其故なきにあらねども果して此勇氣あらば何故に謙信信玄の生時にありて此の言を放ちて彼等と雌雄を決せざるや彼等と弓箭を執りて其生と同じうするもの幾何ぞ十有餘年の永き星霜よ及べるよあらず 此永き間取て彼れに兵鋒を向くることさく偶ま彼等より向くることあらむ程能く之を避るの形勢ありしにあらざるや尤も當時秀吉は信長の臣下のことよしめられ私に干戈を動かすこと能はざるべしと雖も秀吉の言ふことは言ふとして用おられざることなかりければ何故に武田上杉を撃べきことを勸めて二驍敵を敗りて天下と震懾せしめ一擧よて天下と掌に握るの策を取らざりしか武田上杉よりして上方に兵鋒を向けざるものは敢て織田羽柴を恐懼てにあらず甲越互に兵を結びて解ざるの故か因れり故よ若し夫れ兩將兵と結ぶことなかりせば武田上杉の中天下を一統せんこと必然の勢ひおして上杉先づ覇たらんか然らば信長は謙信の麾下に屬し秀吉は謙信の馬の口取りになされんも亦知るべからず然るに今既に謙信信玄なくして稍々時と得饒侍の覇をなしたればとて何ぞ兩將に對して誇るに足らん其の雄傑未だ必ずしも覇を成さず覇を成す者未だ必ずしも其の雄傑ならず之を要するも覇を成す者は雄傑と云はんより寧ろ狡黠横着の然らしむる所なり故に如何に絶世の雄傑と雖も此の狡黠横着の心なき者は覇を成すこと殆んど稀れなり劉備孔明の片隅よ割據整伏する司馬氏れ天下と一統する是れに因らずんばあらず 謙信若し狡黠横着の

必あらば天下は既よ謙信の有にして之れも繼ぐ景勝彼の雄傑なるに加ふるに直江兼續の補佐
 あれば織田豊臣徳川の三氏も亦頭を擡る能はずして止みしも知るべからず然るも謙信仁義の
 士よして村上一依頼を金銀より重しとして信玄と兵を結びしころ織田羽柴の大幸にして遂
 に覇を僥倖したる所以なり何んぞ誇るよ足らんと生時恐れて死して誇る小兒の狀態に近し近
 頃秀吉の言には似合ざることをなり謙信信玄といふ坊主も疾死たるこそ幸ひなるよあらず此兩
 坊主の疾死たるころ即ち秀吉の幸ひにして其天下を得る所以又今日其大言と放つことを得る
 所以なり全く主客顛倒す豈小其形勢を詳かに知る者と掩ふと得んや
 (二百三十六) 秀吉陸奥又極き浦生氏郷す八十萬石の地と賜はりけり氏郷退出し柱に倚り
 て涙ぐみけるを山崎の某居寄て辱く思はれん事尤なりといひまに氏郷私語て吾都近き所に
 て小き國一ッ賜はらむ終に天下一旗を揚なんに邊鄙に棄られたれば何事の仕出すべき志の空
 しく成たるよよりておほはす涙の流るよとぞ語られける
 遷史李斯列傳に曰く李斯の楚の上蔡の人なり年少き時群の小吏と爲りけるに吏舎圃中に鼠
 不潔と食ふて人犬に近づき數ば之を驚恐すると見斯倉に入りて倉中の鼠積粟と食ひ大庶の
 下に居て人犬の憂を見ざると觀る是に於て李斯乃ち歎きて曰く人の賢不肖豈へば鼠の如し自
 ら居る所にあるのみと乃ち荀卿亦從ふて帝王の術を學ぶ云々と評註者幼時史記を誦み此所よ

至る毎に未だ嘗て李斯乃心付善きに感服せずんばあらずしに今此書を評し來りて本章に至
 り浦生氏郷の悲みと思ひ合はすれば即ち是れにて其自ら居る所の地の如何と大に其人の事業
 の上に關係を及ぼし或ハ之を成遂げ或ハ失敗はしむるの幸不幸ありて存するよとなり拿破崙
 云へることあり曰く人は猶は數字のおとし其位置よりて價を異よすと是れ亦此意なり應仁
 以還天下麻の如く亂れ英雄蜂の如く起り干戈止む時なく漸く歸りて天文永祿の頃に至りてハ
 八す邊隅師割據して互に攻伐て諸國と併呑んとす此時に當りて九州には島津あり四國は長
 曾我部あり中國には毛利あり東海には今川あり關東には北條あり甲信には武田あり北越は長
 長尾あり奥羽には伊達あり此時足利の覇を既よ衰弱して天下に號令する能はざれば必ず彼れ
 取て代るの人なかるべからざるの時運なれと八雄各々覇と望みて上京なさんと志を其準備
 を整ふれば則ち他雄の妨礙る所となりて其志と遂る能はざるものハ職として其地勢の遠隔
 よ因らずんばあらず即ち天下を争ふの他にあらざればなり此時に當りて織田は微々として振は
 ず彼の八雄中の部將だに其勢ひ及ばざるの狀態なりしが其自ら居る所の地尾州にして京畿に
 近かりければ八雄互に争闘ふ間に近畿を併呑み遂に覇を成せしに至る是れ職として其天下を争
 ふに好地位に居たるよ因らざんばあらず氏郷之を知る故に祿を増さるよも其邊境を放たれし
 と悔て悲む所以にして秀吉も亦之を知るが故に氏郷を遠く邊境に移せしなり秀吉の狡黠の策

略も富めるや此に止まらず他に又是れに類するものわり文祿年中上杉の領する所歳入三百萬石すべし秀吉心に景勝の能を畏す又謙信久しく其國と訓へ國人皆景勝を戴くを度りて其封を徙さんと欲し嘗て從容として之に問ふて曰く卿の國歳入幾何ぞ景勝削らるゝことを恐れ實を以て對へずして曰く七八十萬石のみ秀吉伴り驚きて曰く何んぞ少なきやと因て之を會津よ徒して百二十萬石を食し兼續も賜ふに米澤地三十萬石を以てし越後を堀秀治も賜ひければ景勝大に之を悔しみけるとなん嗚呼秀吉の點智驚愕も堪へたるものあり

〔二百二十七〕 天正十八年奥州葛西大崎一揆の時氏郷名生の城にあり會津に飛脚をもて鉄砲の玉薬を人に見とがめられざるやうを計りて運び來れと下知せられしかを山伏をかたらひ笈の中よ玉薬を入れて頭巾螺貝杖を携て湯殿山に詣るありさままで送りけり是蒲生在文が謀なり

〔二百二十八〕 蒲生氏郷笠井大崎にての軍に佐久間備前同内膳兄弟を先陣とせらるゝに下知せる事氏郷の心よ叶はず此兄弟は元秀吉の属せしが秀吉より氏郷に賜りたる侍大將也氏郷明日の軍は神田修理外池信濃岡野左内蒲生源右衛門等先陣せよ佐久間兄弟は見物せよとぞ下知せられける先陣の士大將六人相集り佐久間兄弟の軍立あしきとて斯仰承りぬかのく討死したりとも巳が躬を捨て只汚名を出さざるまでの事にて斯仰を承りたるかひもなくしては御大將の恥辱あり然らば進退の節内からしせすは叶ふまじとて先陣の軍兵と打具し平野も押出しかけ引のなら

し五度及及びければも尙調はず六人そこみて明日の軍は殊に大事なる故かやうに馴しに及びぬるよ人々の進退以の外調はずいかよも能心得候へと再三詳し申聞せさて采配を取下知するに進退節もあたりしかばさらば明日の軍はおもふ儘なるべしと悦びいさみて果して敵と切なひけ大勝を得たり淺野長政秀吉の命よて陸奥國に有しかば其軍の有様駈引の圖に當りたる終に見聞に及ざる所なりと褒られたりと也氏郷も大方ならず悦びて六人又感狀を興へていろく物添て賞美ありけり

〔二百二十九〕 伊達政宗蒲生氏郷の威に壓るゝ事を心中に深く憤りて氏郷を殺すべき事と思索して數代家に仕へし者の子よ清十郎といへる十六才に成ける者容貌勝艶なりしに密よたくめる事と語り聞せ田丸中勢少輔が兒小性に出きて奉公させられけり田丸は氏郷と姻家親しみあれを來られん時使と伺ひて刺殺せとの事なり清十郎が父の方へ遣しける書と關所にて改めみしより事起りて其謀の泄たりしかば清十郎を獄も押入此事と秀吉も告るといへども秀吉遠く慮りて強て伊達家と和平せさせられぬ氏郷清十郎を呼出し吾過て罪なき義士と獄に入辱を興へたるよ其君の爲に命を捨て忠といたす賞するよ餘りありとくく伊達家も歸るべきと禮儀正しくもてなして歸されけり

記せし書よ清十郎が姓ともらしぬとしき事なり

〔二百四十〕 氏郷の許に佐々木が鏡といへる名高き器あり細川忠興いと懇^{ねんごう}よ我^{われ}も賜はれど乞^これしかば亘理^{わたりに}某^{たれ}是^{こゝ}は世久しく傳^{つた}はる物にて候似たる鏡と贈り給へといひければ氏郷なき名どと人にはいひてやみなまし心のどい^いいか^か答へん といふ歌の恥かしきよとてかの鏡を贈られけり

洲生^{すまう}のものと江州の士にて佐々木の臣なり氏郷伊勢の松坂十二萬石なりしが後會津を賜りける時の四十才の頃なり佐々木承禎の子四郎太閤の時僅二百石與へ太閤の咄^{はなし}の滯^{とど}り呼出されしが伏見よて太閤の前より退出する時氏郷昔の故に四郎が刀を以て從^{したが}れしとなり又安立郡に川あり向ふに黒塚あり安立の氏郷の領地なりしに黒塚は伊達政宗の領地なりとて争^{あら}ひ有しよ氏郷平道盛の歌に

みちのくの安立が原の黒塚にかよこもれりといふはまをか ともゆる事ありいかよと申されしに聞人黒塚は安立が原に属したる分事明なりとて政宗争ひ やめてけり

〔二百四十一〕 本多中務大輔忠勝に上總の小瀧十萬石を賜はりしかば小瀧に趣き土岐彈正少弼頼定入道慶岸の士どもを呼出きて祿與へたり彈正は同國萬喜の城に居し故世より萬喜少弼と稱して武勇の譽有し人なれば此を問に舊臣申は萬喜常は房州の里見義高と弓箭を取候の政を怠らせん爲に舞臺を設け踊りをさせ城門を明ふるとて果さず船着のけはしさを平し候里見が將正

木大膽時綱寄來船より止る時慶岸城にかざりたる紙旗を絹の旗に立換るとひとしく古き門より不意に打て出 忽切崩したり是より土岐の地は攻入事候はずと語りければ忠勝聞て土岐は甲越の兩雄將にも劣らぬ人なりと稱し其後舊臣は其家の事と問時は必萬喜殿とぞいはれける

〔二百四十二〕 勝頼亡びて後 東照宮甲斐と治め給ふ法度と信玄より用ふる處と 改易る事なかれ年貢は少く納んと仰出されしかば百姓大に悦びあへり小田原亡して後其地を治め給ふも又同じ諸民大に悦び數百年の恩義相結べるに同じありき

〔二百四十三〕 同心頃 東照宮武田家の士横田甚右衛門等を召て信玄の事ども物がたりさせて聞し召る、時御坊の時火繩はいか^いしたると御尋あり柿の澁に石灰を入れて火繩を染候へば年經ても用られ候と申す横田又は城意巷をせと信玄の事をを御坊と仰有けるとぞ又武田家にて鏃をゆるくつめ候は敵の肉の中は鏃の残らん爲なりと申を聞召士の軍に臨むはみな其君の爲ぞかし射伏たれば吾軍の利となるべし後まで人と苦しむるは不仁の業にまをあれ今日より我家の士は鏃を堅く詰よと仰出されけり

〔二百四十四〕 東照宮仰に物具の美麗なるは無益れ事なり又重くするも益なし井伊兵部は力も有て重き物具しつれども度々手負しなり本多中務はさもなくして薄手負たる事もなし只戦ひ易からんやうを心懸へきなり下部の薄き鉄の笠と着せたるがよき急なる時は飯をも炊くべしとぞ

鉄の笠は甲州よても下部は着たりしとや畿内の方よはなのおしに丹州龜山の小野木縫殿助

足輕巳下の者に鉄の笠を着せける故よ其頃は小野木笠といひけるをきり

〔二百四十五〕 東照宮關東に打入の後甲州に在ける秤と造る守隨兵三郎といふ者井伊直政よ申て關東黄金白銀等と商賣するに定りたる秤と用ひられん事を願ひければそれより今の制の定めさせ給ひけり

京に後藤徳乗といふ彫物師あり 東照宮關東御打入の後徳乗の弟子を召けるに遠國を嫌ひしに後藤庄三郎われ行んとて關東に至り寵せられしかば後天下を知し召は願の一ツ叶へ給と申す何事ぞ易き事よと仰有さらば黄金と四ツに切て通用せばやと望みけり果して海内 東照宮に歸しければ庄三郎が志のごとく仰出されけるより今の壹歩金といふの始まれり但し甲州には信玄の時碁石金といふ物ありされを夫より前に碁石金の外おはなかりしよや一歩金は碁石金に倣ひたるふやあるべき又信長の時今の辨當といふもの安土より始まれり其はじめは小芋田の中にかで色々の物入られんとて人信ぜざりさといへり狹箱も同じ頃造り始めたりといふ又大坂の津田長門守始て造り出すともいへり

〔二百四十六〕 原吉丸酒井金三郎共に 東照宮の近習よ仕へ申けり伏見にて御庭よ出させ給ふ時原御太刀と持て庭におり草履のくに追なく既にて碁石の上には有けるよ酒井草履をわたへけれ

ば人々譏ると聞え召子細を御尋あり酒井承り原は元下總の笛井の城主原一部が子にて侯臣が先祖原に仕へしと承りぬ昔の主君のゆかり既にて炎天に居たるよ見るに堪かね候と申ければ本と忘れざるの士なり吾子孫にも如斯なるべしと大に御感あり

〔二百四十七〕 秀吉大坂にて馬揃の時千貫矢倉に上り觀られしよ黒き馬の太くたくましきに乗て紅の沓を後輪に付たる者あり何者ぞと問る、に徳川家の士成瀬小吉なりと申す祿はいかふと問る、に 東照宮二千石與へ置たりと仰られしに秀吉おはれ吾に奉公せば五萬石與ふべきといはれしに其後 東照宮成瀬と召てしかくの事ありき秀吉に仕へなんやと仰有ければ成瀬承りこの御情なき事に候と申すいやとよ汝秀吉に奉公せば我爲にもよありきんと仰られしよ成瀬涙と流し不肖の身祿を貪りて主君を捨奉らん者と思召けると知ざりけるも思ひ候只疾自害して必とありさん物をと申ければ其よしを秀吉に御物語有けり後に 東照宮長臣あまた召れ 古に聞し三尺の孤を託すべきといひし人は成瀬にてころあれと仰られけり小吉正成後隼人正といひしなり

〔二百四十八〕 北條家亡て後 東照宮甲斐相摸の堺三増嶺を御打廻りの時過し永祿年中の戰場を御覽ありとげ山なりし故信玄兵と押通したやすく軍に勝しあり北條家武器に拙く山林と伐あらしたる故ぞかし生茂りたらんにいかで信玄陣をしくべき山と林にせよと仰出されけり

〔二百四十九〕秀吉伏見にてある日廣間に出られしに五腰刀を見て試に其名をいはんとてさ、れしに違はざりければ前田玄以誠と神智のおはし候よと驚きたりければ秀吉笑て何の子細もなきごとよ秀家は美麗を好むが故に黄金をちりばめたる刀是なるべし景勝は父の時より長剣を好めり寸の延たる刀を是よめてたりき利家の又左衛門と云し時より先陣後殿の武功より今大國を領すれども昔をわすれず革卷たる柄刀是他の主に非ざと思へり輝元は異風を好む異なる体にかざりなせるか是ならん江戸大納言は大勇にして一劍と頼むの心なし取替ひたる事もなく又美麗もなき刀其志に叶ひたり此と以て察せけるに違はざりけりと云れたり江戸大納言とい東照宮の御事なり

〔二百五十〕謙信の許に赤小豆粥竹俣兼光谷切とて三の刀あり竹俣兼光のものと越後の百姓持たりしにある時山中を通りしに雷烈しく鳴たりしかばあはや落かゝるかと思ひて刀を抽頭に持當自をよき居たりや、有て空晴し刀の鋒より血流れ般にそみたり又或時大豆を袋に入れて歸るるに袋の綻びより一粒づゝこぼれけるが鞘にあたりて二ツに成しかば怪しき見しに鞘のわれて刀は纒よ出たりしに當りし故あり双き刀とて竹俣三河守乞得しが謙信後にさ、られけり弘治年中川中島合戦は信玄の兵輪形月平太夫といふ者鉄砲とてねらひしを謙信馬を乗寄せ一刀に切伏てかけ通られけり後甲斐の兵ども是を見るに輪形月の物具かけて切られ持たる一兩筒は

二の見通の上より切放したりいかなる刀にてかくは切れしといひあへるに則かの兼光の刀なりけり景勝の時京よて刑せしを越後にて人々よ見せて京の水にて刑たれば鐔の光殊更勝れしと悦れしよ三河守熟々を見て此は贖物よて候子細の此刀はきより上一寸背に馬の毛の通るべき計の穴の候是を知ら外にはなしと申すさらばとて竹俣を京よやりてさがし求めるに眞の兼光の刀を清水の南坂より取出すかくと石田三成に告て贖物したる者十三人日の岡にて死刑せられけり竹俣越後よ持歸りてかの穴に馬の毛を通して景勝に見せけり其後此刀太閤に奉る秀頼亡て落武者取て和泉河内の方へ行たりと聞かしかば此刀を献する者よの黄金三百枚賜るべきよし仰出されしかども其行方終に知人なしとて

〔二百五十一〕本庄越前守繁長は越後の勇將なり後景勝上杉十郎憲景が縁と本庄よ與へらる本庄出羽の庄内大寶寺義興と戦勝て二男千勝丸に庄内を與へけり本庄最上杉義光と出羽の十安が表にて軍しける時最上の軍敗北せしに義光の士大將東漸寺右馬頭口惜き事よ思ひ取て返し首一の提て越後の兵に紛れ繁長を目にかけて只今敵の大將を討取て候實檢に入れ奉らんと云て馬よ鏡に合せかけ寄て正宗の刀よ以て冑と打つ明珍乃冑なりしかば筋四ツ切削りたり繁長右馬頭と切て落し首に添て景勝に出したり刀をば本庄に返し與へられしが後故有て東照宮の御刀となり本庄正宗といへるは此刀なり

〔二百五十二〕 加藤嘉明の冑は形と富士山に造りなして名とも 則富士山といふ具足の胸よ天
人の雲よ乗たるを詩繪したり竹中重治が冑の一の谷乃明智秀俊が冑は二の谷といふ攝州一の谷
二の谷相並べり又柴田伊賀守勝豊が冑は鉄蓋が峯といふ是は一の谷より高く峙たる山なれば
斯名付しとかや此餘浦野若狭守が小水牛黒田長政の大水牛日根野が唐冠の冑原隠岐守が十王頭
福島正則の四また鹿の角本多忠勝の佐藤四郎が冑蒲生氏郷の銀の鯉尾伏木久内がわり 蛤 武田
信玄の諏訪性姓秀吉の八日の月加藤清正の長鳥帽子矢田作十郎が鯉の冑藤堂新七が帽子などい
へる多し細川忠興の山鳥の尾の冑といへるも名高し關ヶ原の軍に忠興かの山鳥の尾の冑を着銀
の天衝の指物なりしよ遙よ見て唯舞鶴のやうに有けると 東照宮冑と指物と映あひて面白しと
て乞得させ給ひ 台徳院殿よ參らせらる

〔二百五十三〕 信長江州小谷の城攻よ伊藤七藏先がけしたるふ從者取付たる故上帶きれて刀も
脇差も堀下に落つ七藏少しもひるまを乗込で柵の木取て敵三人たゞき伏せ功名しけり七藏父を
若狭といふ相州乃人にて武者修行し尾州前田村に居ける頭信長呼出されけり七藏尾州三本木の
軍に事急にして編笠とかぶりながら一番鎧を合せける故信長大に賞美して編笠と呼れけり後秀
吉よ仕へて度々功名有しかは 紫 袖井筒の紋廣袖の小袖を與へられければ甲の上に着たり秀吉
の旗奉行と成たり

〔二百五十四〕 井伊直孝のいはく人毎よ具足櫃を持せて早く取出す 志を用意する者あり取出
す間も遅きほどの事あらむ何時も素肌よてかけ付てこそよけれ具足を着たると着ざるとの差別
なき事なりと申されけり

〔二百五十五〕 黒田孝高は智謀衆に超し良將にて常よ天下の望みありけるが或時豊臣秀吉孝高
を召れ酒宴を催し尋ねけるハ如何に孝高今天下に英雄豪傑多くありと雖ども天下を保つべき程
の者は誰と思ふや孝高打笑ひ某の如き者に争でか之を知ることを得べけんや秀吉我れ試みに論
はんと思ふなり先づ言ふて見られよ孝高己を得て某考ふるに當時天下よ威名高く天下をも掌握
すべき者の中國の毛利輝元なるべし秀吉莞爾と笑ひ誠に輝元ハ今十餘ヶ國を切隨へ其威破竹の
如くなりと雖ども是れ皆父祖の餘徳にして輝元が器量の爲めにあらざる然れば何んぞ天下を保つ
まよ叶はんや其外よ一人あり知らずや孝高驚きて問ふ秀吉眼前よありと孝高眼前とは何れに居
り候や秀吉即ち其方なりと聞て孝高大に驚き額に汗を流して何條愚昧の某斯よ大器よ當らんや
と對へしが孝高は我が胸中を秀吉よ見抜れ針の筵よ座せる心地して其日の酒宴を退出し我が館
よ歸り所詮秀吉よ見抜れし上は我が身の命も危しと夫れより世を悟り直さま入道し是れまでの
望みを水の泡よなさんと云ふ心にて如水と號し家督を子息甲斐守長政に譲りて隠居なしよける
〔二百五十六〕 第二回上田籠城の役關東の大軍上田の城を十重二十重に取圍みから堀よ飛入々

本堀に登りて既に城中へ乗入んとしける所に城兵共堀の上より立現はれ像て用意の竹の皮を幾許もなく投出しけるに固より片々然たるものにしあれを寄手は更よ事をもせず拂ひ除けしに進みける所を長き柄杓にて熱騰りし白粥と注ぎ掛けし程に其粥寄手の鎧武具の隙間より肌は鼠透軍兵共は熱ま堪へ兼ねアナ苦しやと遁出せむ先きに何の意なるを知らざりし竹の皮に迂りつ起きつ又迂りつ人馬共に焼爛れ本陣まで一卷りも敗走りける

〔二百五十七〕 同役真田父子の敵の疲勞たる時と計り部卒を數多城外に出して早稻田に赴かしめ稻種を蒔取せしに寄手の面々之を見て備て城中には糧食盡きぬると覺わたりぬで追駈て擊取れと云ふまゝ、よ大久保本多一萬餘騎よて咄と喚きて押寄けるよ此時城兵は稻を蒔取し束ふなして脊負んとする所なれば追駈來りし者道を塞ぎて聲々よ呼はりけるは不敵なる哉城兵共此の犬軍を引受けて稻と蒔んとは不覺なりと云ふまゝに切て掛れを部卒何かは以て堪るべき蒔りたる稻を打捨て我れ先きよと城中へ逃入ける寄手の大に笑ひ備々迂濶なる城方の舉動かな拙くも此の有様と口々に罵詈雑言ながら打捨たる稻束を本陣に持歸りける斯くて夜に入り人々眠に就んとする時頻ら炳硝の匂なしければ這は不審と東西尋ね回りしに這は抑も如何も取歸りし稻束より火燃出して陣々よ移りければ俗てい又真田の謀略に當りしものと急に狼狽騒ぎ出しける所に城中より三方の城門を押開きて攻寄ければ關東勢戦はんとする者なく皆々小諸を指して敗走

りける是れ豫て幸村が計ひにて稻束の中よ密に炳硝入れ置きたるなり嗚呼妙智の所爲なる哉二百五十八 豊臣秀吉朝鮮を征せんとて京師發したる時或人秀吉に謂て彼の國に渡るに漢文を善する者なくては日本の耻辱ともなりぬることなれば宜しく漢文よ善する者を従へられて然るべしと云ひけるに秀吉笑ふて云へるやう吾れ此の行は彼れが難澁なる鳥跡の愚文を學ばんとするにあらず將よ彼れをして我が輕便なる假名文を用ゐしめんとするにありと其勇氣最も稱すべし

〔二百五十九〕 朝鮮蔚山の役寄手鎬貴夜密よ伏勢を設けて曉に及び陣營よ焚きて退走ること數里にして城兵を誘ひ以て大よ之を撃んとしけるよ城兵之を追はんとするを加藤清正許さずして曰く彼れ父よ擧げて退く疑ふべきの一なり又退くに嚴よ設けざる疑ふべきの二なり又夜を以て退かすして曉を以てする疑ふべきの三なり是れ將に我れを誘ふて之を懸にするの巧なるや鏡よ懸けて觀るが如しと暫く見物し居し程に明の伏勢は巧みしこと空しくありしかば欠伸しつ、現出て終よ復た城を圍みければ皆々清正の明智を感せられける

〔二百六十〕 黒田長政常よ人に謂て云へるには我れ年齢十四より今に至るまで拔群の功績と樹ること多しと雖ども大功ある如水の子なるを以て之れと比較來りて目に立たざれば人之と稱せず然るよ淺野幸長は軍功なき陣正の子なるよ以て之れと比較來りて目に立てば寸功ある毎に人

之を稱せと是れ少しく慢言なるに似たりと雖ども情實或は斯の如きものあらんか噫
 「二百六十一」 堺の輔師始めて太閤に謁しける時太閤汝の姓名は何と申するぞと問ひけるに其
 者の對ふるやう臣が姓名は即ち曾呂利新左衛門と申候太閤ハ、ア奇な姓もあるものなる哉して
 其曾呂利と申す姓には何ぞ所以にてもありつるものなるかと問はせけるよ又對ふるやう聊か所
 以之れあり候別よわらず臣の持へたる鞘は堅くして曾呂利と入り敢て問す是を以て曾呂利と申
 候太閤遣は奇なり又折節來らるべしと他日又太閤に謁しけるよ太閤問ふて曰く汝の姓名は何と
 か申せしな對て曰く曾呂利々々々新左衛門々々々太閤怪みて其重言と尋ねけるに新左衛門
 の對ふるやう殿下先きよ臣の姓名を問ひ今又重ねて問ふ故に臣も亦殿下重問の意よ従ひ同じく
 重言と以て對へ候なりと新左衛門或時太閤ふ對ひ願くは一日御耳の匂と臭せられたしとありけ
 れば太閤は不審しく思ひ頼智夫又何をのなすらんと疑ひしが何は鬼もあれ宜し汝がよきに臭れ
 よと許されまかを諸大名の御機嫌伺ひよ出づる時を窺ひ太閤の耳根ふ口寄せて何やら言ふの體
 なれば皆々心中密に驚き頼智夫何と云ふらんか若まや我れを譏言するものおはあらざるか頼智
 夫は頗る殿下の寵愛する所なれば頼智夫が云ふこと御用ゐあらんも亦測られずと愛ひ各々自庭
 よ歸りて早々數多の金銀財寶と調へて密に曾呂利が方へ贈りけるにぞ數日にして金銀財寶山嶽
 の如く集ひければ太閤の御前に出て謝して云へるやう殿下一日の御耳と拜借し其馥郁き匂と臭

きたる功能によりて金銀財寶山嶽の如く集ひ來りて殆んど座をるの餘席之れなく候是れ全く殿
 下の御耳の功能なりとありければ太閤も亦呆然として驚愕きけるとなん又或日のことなりしが
 新左衛門太閤の機嫌を取り頗る其功ありける程よ太閤の申けるに何なりと汝の望めるものを賜
 せんともりけるに新左衛門の云へるやう臣敢て大なる望みも之れなく唯乾袋二個程米を賜はり
 たし太閤丹は甚々易きことなり餘り寡欲の至りあらずやと仰せありけるに新左衛門是れよて澤
 山なりと申して退出なせしむ纏て二個の乾袋と張拔さ數十百人を雇ひ來りて太閤の御前よ出て
 前日御約定の米此れに賜はりたしと米倉二戸前を蓋ふたりけるにぞ流石の太閤も是れよは呆然
 て暫し言句もなかりける又或日のことなりしが嘗て太閤數多金銀の蟹を鑄造せ之庭の泉水或
 は其近透お放て娛樂となしけるが程經て見厭たりとて近習の者に何んが一用を云ひ出づる者よ
 は之を與んと申されけるにぞ皆々大ふ喜悅び臣ハ之を紙押になさんと云ひ或は何と云ひ蚊と云ひて各々一個づ
 蓋もなければせめては是を以て其蓋の取手になさんと云ひ或は何と云ひ蚊と云ひて各々一個づ
 賜はりしうち新左衛門の乞ふやう臣は人類の角力も既に見厭しことなれば此の蟹と集へて角
 力を致させんと存するなりと云ひければ太閤角力とありては五個や十個にては其興薄かるべし
 悉く皆持行くべしと残れる蟹を皆新左衛門に與へけるとなん其頓才實に驚くべく感ずべし
 「二百六十二」 東西分目の役徳川家康將帥百餘人よ統て小山に至りけるに上杉景勝長沼よ軍

し兵と分け 險を守りて今や遅まきと待ちかけたるよ縁て上杉の臣直江兼續の約せしよとにしあれば上方よ於て石田三成豊臣秀頼の命と矯り毛利浮田島津小西諸將と俱に兵を擧げて美濃路に差かゝりける家康此由を聞て大に驚き康長子秀康をして萬人を以て宇都宮を守らしめて其身の自ら兵と引て西上しける程よ兼續兵を悉して之を 臨んと請ひけるに景勝聽さず時に秀康來りて戦はんを請ふよ會しければ景勝答て云ふやう先入謙信軍を用うる未だ嘗て人の 危に乘らず吾れ亦敢て違はず且つ公年少し我が敵にあらす吾れ公の父内府の還るを待て決戦なさんのみ粗伏如し缺乏ることあらば當に相給すべしと乃ち兵と收めて會津よ歸りける此事謙信の勝頼に勇を成さしめたる事と同うして共よ大人の所爲を謂ふべし

〔二百六十三〕 大坂各陣の時木村重成と上杉定勝と 鋒と交へしに定勝は家重代の小豆長光の一刀を抜翳し重成目掛けて立向ひ切て蒐れば木村の鎗にて渡り合ひ互よ劣らず戦ひける定勝は流石景勝が嫡子なれば木村に劣らず見わけれども重成の勇氣虎の如く勢ひ進んで見わければ定勝馬を引返さ北出さんとする所よ重成追駈大よ怒り定勝程の大將如何なれば敵よ背よ見せ給ふぞや卑怯なり返せくと呼はるを定勝は之耳よも入れず馬こそ災難鞭の撃きに堪り得ず滅多無生に駈出しければ木村の鎗を取延て勢ひ猛く突くこと四五度なりけるよず定勝は氣も魂魄も身よ添はず足場の悪しきも厭はゞこそ夢路を辿る心地して馬に任せて逃げ行くを木村の急よ追駈

し逃さじものど付入しかば定勝馬を深田に乘入れ進むも退くもならざるよず木村得たりと近寄り見れば定勝の泥よ塗れ恰ら苦しげの體に見わけけるよず木村聲よかけ斯くまで鄙劣き振舞に難容までの爲體く見苦しかりしことどもなり然れど重成は斯る難儀よ及ばれし其弱手よは何ぞと殘酷きことせんや命の誓く助け置くべし後日明かよ勝負せんと呼はりながらよ引返す其有様はさしも情ある武士とぞ見ゆける

〔二百六十四〕 馬場重介職家は陸奥栗屋川貞任が裔孫にて備前邑久郡北地村よ來り居しが其後も安倍といひけるよ京都より來りし馬場氏の人豊原よ居て其女を妻として遂に馬場と稱しぬ重介稚名を岩法師といひて十三歳よて邑久郡戸石の城主浮田大和守よ奉公し天文十四年浮田直家は乙子の城よ在て大和守軍あり直家の士池田太郎三郎と岩法師東北地村荷蓋の島よて鎗を合せ銃を裝りて戸石の城よ歸る今年十四歳なり大和守膝よ抱上て疵の口を自ら吸れけり無双の剛乃者なりとて名を二郎四郎と改めさせられぬ程なく直家花房又七近藤五郎左衛門 一説よ六星野十郎と大將よして戸石を攻二郎四郎白團の標さし指て一の 戸口よ出る近藤見ていかよ引か進むかど詞をかくるに次郎四郎軍場に臨て引と云事やあるといひも終らぬに花房星野とも手利の射手にて弓取直し是を射る花房が矢は中指にあたり星野が矢は次郎四郎が持たる楯ともとはぎまで射貫く次郎四郎物ともせず敵を追拂ひて歸り天文十七年赤坂郡鳥取の砦を大和守攻て軍あ

り次郎四郎膝の口を笠深に射させ二町計引退たる所に味方に泉養坊といふ山伏来て其矢と拔ば足なへて歩む事あたはず大和守の馬に乗て二三町引退たりしものども馬と返してければ味方も隔りぬ敵追かけ来らば討死せんとおもふ時妹婿なりし片山彦三郎といふ者の弟来て馬と抱乗せたるよ血鎧を越て流れ朱よ成たるを敵見て深手負たりと見なしたれば十文字の鎧を取延べ頼よかけ落さんとする事幾度といふ事をしらす漸く遁れ得て歸れら首を取て見とられて見るといふ諺有は此時なるべと次郎四郎常よ云けるとなり是十七歳の事也後次郎四郎直家よ奉公し與力六十人付られたり美作三星の城へ浦上宗景番手の兵とやりて守らせたるを安藤の毛利家より附城を構へ三村家親大將として度々合戦あり直家より馬場と加勢として三星にこめたり馬場惟岩精進するとして五月廿四日細き流れよ行て身と清むる處よ敵出たりと聞直に行向へば三星より鎧提たる士一人来て馬場に並び進む敵と追詰たれば附城より出て是を助けて城よ入門内を見れを混胃の兵十四五人折敷て鎧の先と並べ待のけたれば静々と引返す宗景感状を與へられ直家夫より重介と名を改めさせ家の字をやられけり備前上道郡妙禪寺の砦の合戦に重介は刀敵は鎧にて相戦ひ溝を飛越て敵の手の下より入りんとせしに躓てうつふしに伏たり敵勇みあ、かておもふ所と突はつし行あまるをつと立上り切伏て首と取同郡土田の軍も長六尺ふ餘れる梶井といふ兵を討取たるを角南惣菴見て白き浴衣と若右の肩をはだぬぎ太刀打したる兵の有様

むかし午慶などやかくも有らんと驚きたりといふ則重介なり永祿十年五月十日土田の上壁目の軍に敵五人鎧を横たへ山の上より來ると重介は坂の下に有て一人射倒したれども味方はつゝが引返す時山の腰を引退く味方敵追詰て既に討れぬべく見ゆれば返し合せ敵と切なびけ味方を助けて引取り備前岡山の城主金光與次郎を直家諒を以て殺し城を取得たれども近き邊りよ敵多ければ戸川平右衛門を城番とするよ寄騎六十人みな行兼たり重介我かいらんといふよ何の子細か有べきといふを直家よ告てゆるしたれば重介か寄騎六十八一人も辭退する者なきよ戸川が與力もはげまされて重介加勢ならば行んといふよより戸川馬場三年岡山より美作三の宮の城と直家一時よ攻らる、時城主村上勘兵衛士卒六十八計よて突て出る重介真先に進み鎧武者四人薙刀武者四人と戦ひて城門の際まで追打す敵鎧と投突よしたるを奪ひ取て歸る高城にての軍に直家重介を谷の受手とす敵來らざれば谷より上る處に山の半に鉄炮を五段にして待かけたる處に行か、り三段退崩す四段より擣たる鉄炮よ右の膝より響へかけて打透され敵聲をかくれば重介中らずというて四段よも追たてる崩れたる土手あるに胃の鏝を傾け寄添て待たるに柴折あけたる谷の向ふより打鉄砲脊割具足の右の肩かひから骨の内より臂まで打貫れ目暗みたり氣を静めて見れば田中藤助間近く來れり重助田中と呼のけ大事の手負ぬ此所を退んとせば追討よ遣ん爰を死所とせんといふ藤介我一支もすべしといふ重介五間ばかり歩みて郎等の眉よ手との

け静に退くを敵幕ひ來れば藤介鎗を合せ追退て歸れり鉄砲に中りし時大木と以て袋を突通すが如く覺る物の色目分れず只朝晩の花の色よみえたりと後に語りけるとなり備前兒島八濱よて軍有浮田七郎兵衛忠家の子與太郎大將よて戸川平右衛門岡平内巳下度海し麥飯山の敵城近き邊りよて草を刈る時敵出て追たつる與太郎馬よ輪よかけと味方の兵よ求る所よ鉄砲内宵よ中りて馬はより落つ中村宗介同じく討死す重介馬を射られ乗放ま歩立よ成ぬ月毛馬韋毛馬黒馬よ乗たる敵三騎重介を自よかけて馬よ乗寄の重介敵馬よ乗かけられじと鎗の鋒を後になして脇に狭み静よと退く疲ればしつ討死よと思ひたるに敵引て助りぬ戸川見て今日の 働ゆる我一命を繼たりと重介を懸たる處に寺尾孫四郎今日と重介よみずといふ重介先にてみざるの後にて見ざるか一藩に懸みたる敵の馬の毛色物具はいかにと問う孫四郎赤面して詞なし重介吾鎗脇に弓をもて後の聲に立れよと云て敵一人射倒したる人有といへば鷹見傳兵衛進み出て某にて候ひきといふ中納言秀家大坂より備前へ下らるゝ時雨中の徒然よ浮田修理同太郎左衛門花房又七三人と呼ぶ軍ものかたりの時前代の鎗柱功の勝れたるは誰ぞと問るゝ馬場重助幸和織部孫四郎三人と答ふ秀家聞て幸和寺尾は武功は有つれを輕薄なりと問りいつとも重介が人よ越れたる事なしと聞つれば重介こそ勝れ候えんなれといはれしかば三人重介が武功は申よ言葉も候はずといふ重介實費よて箱を城下の近き邊りよ引込て此頃は耕作して有けるよしを秀家聞て三百石加祿の

折紙を戸川肥後をもて重介よ興へらるいかよしたりけむ事達せず重介是を聞 愈 出る心なくして遂よ家秀よも仕へず七十七よて病死す士は假初にもきたなき心有べからざるなり吾數度の戰場に臨み百死の中に一生と得て斯全く終りぬると遺言しけり其子孫池田家に仕へけり

〔二百六十五〕 種村肖雅守はもと柴田家にて譽れ有後招かるゝ人々多かりけれども仕へず前田利家 懇 に迎へられしかども出ず利家種村が琵琶を彈する事を好むと聞て白雲といふ名物の琵琶を贈られしかば其志にや引れけん利家に仕へて佐々成政と城中朝日山の合戦よ目を驚す功名と遠たり其後淺野長辰に奉公して彼白雲の琵琶は今淺野家にありとかや

〔二百六十六〕 黒田家の士に秦桐若といふ剛者有唐幽扇長さ一丈斗もあるを指物にしける故敵見知て近付す或時さし物をかくして近々と成て不意に出せば敵大に驚きて引退きたるほどの者なりけり

〔二百六十七〕 駿河と攻らるゝ 東照宮横目の人を召てひかしより皆朱の鎗の柄鴨瑠の柄を武功勝れたる者ならでん持せざるに近比は持するもの、數多有とさく心得がたき事なり改めよと仰出されけるに皆朱の柄の鎗持せ菅浦草のたち付を着て通る者有誰ぞと問に細川越中守の士澤村大學と答ふ此よしと申ければ 東照宮其大學は若き時才八といひつるが小牧にての事なりし秀吉二重堀の軍兵を引取時秀吉六萬計青塚ふ陣せしを吾小牧より押寄て引退く敵を打破る其時

細川忠興秀吉の先陣有て才八真先よ進みて鎗を合せし有様今も猶目の前よ見るがぶとく覺にたりかゝる大剛の者に持すべしとて其餘の者を禁する事よと仰られしかば澤村傳へ聞今更わが功名を世にあげたる 忝と悦びけり

〔二百六十八〕 加藤主計頭清正小西攝津守行長各肥後半州を賜はりしに一揆起る天草領は島にて一揆の勢ひ甚盛なり小西志岐城を攻けるに天草木戸の一揆の長天草民部後卷に押寄せ志岐の東の山に陣す清正の先陣山岡道阿彌岡田將 監南部無右衛門小野木織部瀧野三位莊林隼人森本義太夫段々に進む清正環平次をして先陣を見せしむるに歸らず又飯田覺兵衛をやられしに飯田見切て歸る平次只今軍始らん先に進みて戦に逢んと云飯田しらぬ事いふまじきよ先陣只今追立られん戦に逢ふ場ふあらせとてつれて歸る清正いかよと問るゝ又飯田先陣の今打負て敵追かけ來らん二の勝は旗本に候といふ清正證はいかにと問敵東の山に陣し地乃利を得たりといひも果ぬに先陣敗北して一揆まつしくらにかゝり來る清正高き處より横合よ突て懸り天草民部敗軍せしを三里計追討にしたり清正十文字の鎗を突折り七度鎗を合せ其勢に乗じて志岐の城を攻落されけれ清正の鎗は十文字にて三日月の形なり志津の作なりしが突折て片鎌と成し刃と拾取て佛水坂の神宮に納しとぞ鎗の鞘熊毛なりしに瘡煩ふ人あれば其毛一筋ぬきて載かするに忽落けると云傳う朝鮮人は今に至るまで小兒の啼時鬼將軍來るといひて啼やみけるとか

銀ののし付の刀脇差金のとがり笠をかぶり馬上三十人黒ほろに金の半月の出し豹の皮又は孔雀の尾熊の皮いろくの馬甲かけ金のし付の刀脇差あたりもかゝやく斗なる中よも遠藤文七郎原田左馬助はわか添に木太刀を一丈計よ作り帶たりしが鞘尻のさがりければ金具を奥中に設けて糸を結び肩よかけて馬に乗たりけり見物の群衆政宗の軍兵押通る時目を駭かす出立なれば一同にをめさよめさけるぞぞ

明の援兵朝鮮に來り平壤に有て練光亭より日本の兵を望みしよ江上よ往來する者大劍は荷ふ日光下り射て電の如し是は眞の劍よあらず白蠟と沃きたる物なりといやふ事徳忠録よしるせしは伊達家乃二士の木劍の事よや

〔二百七十二〕 朝鮮南大門の軍は文祿二年正月廿六日の事なり明の援兵鴨綠江とわたり押來る小西行長かなはず引退く時に小早川隆景は開城府に止り一軍せんと待かけたり淨田秀家使と以てとく都城よ引返して一所に軍あるべしと申されしかども隆景吾日本と打立しより異國に討死せんとおもひ設たり年老候ひぬ今生の思ひ出に異國の大軍にかけ合せ大國の耳目と驚かす軍して屍を戰場にさらさんと存る所なりとて引取ん氣色無りければ又大谷吉隆を遣して誠み雙なき志古の名將も是には過じさればとて二万計の兵にて大軍に取巻れ空しく討死あらん事口惜く候只疾都城に入て日本の軍の先陣せられ候へとたりしかば隆景さらむ日本の先陣ハ隆景仕らん

やかばりのりの猛將類まれなる事なり

〔二百六十九〕 清正一揆を攻る時或夜森本義太夫清正の前にて軍評定せしに凡組討ハ力によらず候心剛にて手さ、たれば易き物なりと申す清正組打は危きもの也勇に誇る時は必仕損すべしと戒められぬ其翌日清正の眞先に森本馬を進る處より歩行者一人寄合たり森本聞ゆる馬の上手なれば敵の横さまにゐて、ひらりと飛下り立上らんとする敵を引組て頓て首をとる清正に向ひ夕部申せしに違ひ候哉といへば清正大よ賞せられけり

〔二百七十〕 東照宮江戸ふかはしませしと秀吉の使來りて朝鮮を伐る、よしを申す斯て一人書院におとしまして深く思案の休見おさせ給ひける時本多正信御前近く出たれども御詞もあしや、有て正信殿を朝鮮に渡海有べきやと申せども猶熱然とせさせ給ふを斯いふ事三度に及て後何事ぞかしましき人々聞べき箱根をば誰に守らすべきと仰ありしかば正信さてはとく御思慮定りけるよといひて退出しける

〔二百七十一〕 朝鮮を伐る、時關東の諸將も兵を出さる伊達政宗の遠國たる故に騎兵三十騎鉄砲百挺鎗百本と軍配を定められけるよ千計の士卒を引具天正十九年正月九日岩出山を打立二月十三日京に着小西加藤は先陣たり岐阜中納言秀信を始として關東の諸將帥を出さる其道の聚樂より戻橋を大宮に押通る政宗の旗三十本紺地に金の丸付たる具足着て弓鉄砲此者も同じ出立に

りするにて候人先陣をばかけさせしとて黒田長政久留米秀包連打て都城に歸られしが南大門の外碧蹄館に陣せられけり廿六日の曙に李如松が軍押來る旌旗と立つらね何十萬とも測るべからず秀家を始として大軍に野合戦危からん都城に精籠らんといはれし時立花宗茂目を見出し刀の柄を懸敵こければとて述こもる様や候只馳合せ蹴散して候えん物をと勇まれしかばさらば誰か先陣せんといふに隆景先陣せんと兼ていひつる事誰人にてもわれ思ひもよらずとて頓て陣を進めらる士大将粟屋四郎兵衛村上彈正野島掃部三千計をめきさけんで相戦ふ立花宗茂久留米秀包毛利元康六千餘り奇兵となり右の方三町餘り陣せしが横様にかゝる隆景旗本一萬餘を率いて一文字に切て掛り忽敵を討破首級多得られけり宗茂取たる首二ツ鞍の四方手お付隆景の方に來られしを見て取敢て見事候といはれしかば宗茂毎も仕るにて候と答られけり此軍いまだ始らざりし時黒田長政唯一騎歩の士六七人召具し隆景の旗本に來る隆景よくこり來られ候へ先陣の粟屋み力と添給へと云れしに長政悦びの色面あらはれて承り候とて先陣に向はれけり殊に寒風はげしう吹たりければ長政大綿帽子を被られしが先陣に行てばうしとぬいて世に聞おける水牛の胃の緒とべられけり隆景の軍兵ども是と見てけふの軍に勝たりと勇みけるとかや長政ことし廿五才武勇をかく人に信せらる、事なみくにあらざりけり

或説に漢南にて明の援兵大軍なりと聞おしかば諸將評定して吉川元春と先陣とす元春勇猛

の名高き故なり元春軍兵を後面うしろあして敵と見せず敵あか近くなりける時士大将某たがし焼飯と十バかりもち來りて時ときよろしく候きこしめされ候へといふ元春是を五ッ食し士大将二ッ食して残りあまと近習の者に與へたれども得くはずとかや敵合二町計に成ける時元春下知して一同に向直りすかさず突か、り敵と追崩して頓つ引取られけりといへり目に餘る大軍に逢て士卒氣を奪れ見崩れすべさかど元春おもひてかくせられたりとなり是誠まことに味方の氣を挫しめざる將器しやうきよして元春ハ關西無双の勇將たる事誰か非問すべきされども元春ハ朝鮮陣より前まへ死し去き有あしかば隆景かくせられたりしを傳へ誤りたらんも知べからず

〔二百七十三〕 南大門の軍に明の兵と追かけ秀家の士國富源右衛門とて剛がう比者大刀なりしがさ、やかによろふたる敵に追付て三尺餘ある刀を取のべ三刀まで斬たれども甲堅くて手も負ず國富刀を捨飛か、り引組たるに彼敵國富を取て押へたりいぬかへさんとするに大磐石を横たへたるが如し國富脇差と拙あやて二刀させどもいかる甲にや少も通らず巳に危かりし時味方數十人落合て敵をば討取たり

〔二百七十四〕 朝鮮にて秀家を始都城はじめみやこに有しに加藤清正進て行程數日を隔つ諸將糧尽んとする時加藤遠江守光泰獨ひとり云清正都城を放れて敵に向ふ人々都城と去て食に就んとせば清正と捨殺すべし今爰こゝを去るものは復男子の交まじりはならじ清正と捨ん事日本の恥也といふ人々糧既に尽たり

いかゞせんといはれしかば遠江守怒いかづて砂を喰くんものどといふ砂はくはれじといへば遠江守居丈高たかよ成て汝等砂と喰くん様さまよもしらじ我教ふべきとて福島正則ときつと見ていかに市松いつの間まに大きに成たるぞやとて又秀家よ向今までは中納言殿と敬うやまひ申たりきけふよりは中納言めと申まへし清正を捨殺し恥はぢを異國いこくよさらす人々なりといひすて、座ざを立處たつに清正ちやうせい糧盡りやうじんて都城みやこよ引退さ三里斗さんりどうの近所きんじよに陣ちんしたりと告來れり遠江守は清正と生死しんじを同じくせんとおもへるにまぬかれけり

〔二百七十五〕 朝鮮の平安川へいあんがわは深サ八九尋四五百石積つの船ねわらひの往來有て日本にては見ざる大川なれば川の廣さを諸家の士しよけ或ある七八町或ある十二三町あらんといへども審つならず黒田長政の士吉田六郎太夫よしたろくぢろうたふ時六郎太夫といへり又助父子またすけおとこよ見積り候へど下知せらるか様の事ことは慣なれず候ゆゑ覺おぼ束つかなしと辭こすれば父子おとこが組ぐみよ功者こうしやも有あべしといはれて翌朝あしたあす又助組またすけぐみの士を引具ひきし川岸がわに出川いの向むかに朝鮮人三人見みたり又助小柳権七またすけこやなぎけんしちは長高ながたかき者なりあの向の人退しりぞかざる内うち急いそぎ堤つの上うへを行いべし指物さしものをふる時踏ふまされど云い合あめ權七けんしち走はり行い其そのたけ向の人とひとしく見ゆるとき指物を振ふたれば立たまりぬ 即すなはち其間そのまと打うてみれば八町五段なり長政ながまさ出いて又助二十一才老功らうこうの者ものも劣せらじと稱美しょうびせられけり

〔二百七十六〕 朝鮮にて何れの所ところよてか有あけん清正の陣大山ちんおほやまの麓ふもとなりたるに虎夜こよ來りて馬うまを中ちゆう

に引さげ虎落の上を飛出けり清正口惜き事なりと怒られけるに小姓上月左膳をも虎来て啗殺せ
せり清正明ると山を取巻て虎を狩たるより一疋の席生茂りたる萱原をかきわけ清正を目かけて來
る清正大なる岩の上よ在て鉄砲を持ねらばるゝに其間三十間計虎清正を睨みて立止る人々鉄砲
を揃て搦んとするを清正下知して打せられず自打殺さんとの志なり斯て虎間近く猛り來り口
を開きて飛かゝる處とうたれしに咽に打込たれをそまに倒れ起上らんとせしかども痛手なれば
終に死しぬ

〔二百七十七〕 清正朝鮮にて大川よ打臨み向の岸よ船よ繋ぎ陸に陣屋有て旗よ立たるを見てあ
れと見よ鴈岸に添て泛々たるを敵はなきぞかし誰かある水練の者あの船取來し下知せられしに
果して清正の言のおとし又清正の陣所に練あくて馬秣にくるしめり清正諺をこまかに切て豆よ
まじへて飼へといはれし馬の力落ざりけり

〔二百七十八〕 明の援兵大軍よ朝鮮よ來り日本の軍危しと太閤聞れ軍評定有ま時浦生氏郷
進み出何程の事か候べき氏郷よ朝鮮を賜はり候へば切取にしま打破るべきものをといはれしか
ば太閤是より氏郷の志有を忌にくみ給ふ又同時隆景使を以て隆景が存する所は十萬の軍兵渡
海せば城々守らせ隆景先陣して明朝よ押入北京を攻落すべし此旨申せと申て候といふ秀吉小
早川の智謀さぞあらん人々よく聞れよ秀吉功よ遂すして死するとも秀次と大將として明朝に攻

入ん時我魂魄雲よ乗じて鐵の盾をつき唐土の奴原よ一々蹴ころして捨なんものとむかしも柘
榴と噓て火とあせし者の有しと聞其小男の名を忘れたりしといはれしかば施藥院秀成夫は北野
の天利の御事にて候と申す秀吉ろれがかし雷になりて天よ上りしと言傳ふれと吾陰囊の垢は
せもあらぬ物と大音にいはれしと聞人ごども驚きけり

〔二百七十九〕 黒田長政朝鮮の全義館に陣せられしよある曉俄に騒ぎければ敵夜討にや寄た
ると井樓に上られしに虎馬屋に入たるよぞ有ける恐れて出る者も無りしに菅政利刀を提て
走り向ふ虎咆かゝる處よ飛違へて腰骨を深く斬付たり虎前足にて立あがり愈猛りて危かりし處
に後藤基次かけ來り肩先を乳の下かけて切すくれば營得たりやと虎の眉間を切割て殺しぬ長政
汝等先陣の十大將として下知する身なるに獸と勇を争ふ事おとなげなしとぞいはれける政利
が刀小林羅山銘よ作て南山と名付て周慮白額虎の故事あり銘よ曰

節彼南山山惟劍鋌寺政除去酷吏逃藏截邪斬佞惟力在箱惟其言虎若有真偽傳之萬世爲子孫常
朝鮮機張よて長政虎狩せられしに虎一匹人の群たる申にかけ來る菅六之介が足輕の肩を啗
て後に擲また一人をも腕を啗て投倒しけるが六之助其日朱具足を着たるをや目よのけけん
忽飛かゝりしを管二尺三寸有ける刀よ抜て忽よ切伏たり其刀今に菅の家持傳ふ備前
吉次が作なりき大徳寺春菴和尚其刀よ斃秦と名を付たり秦は虎狼の國と云し故にころ羅山

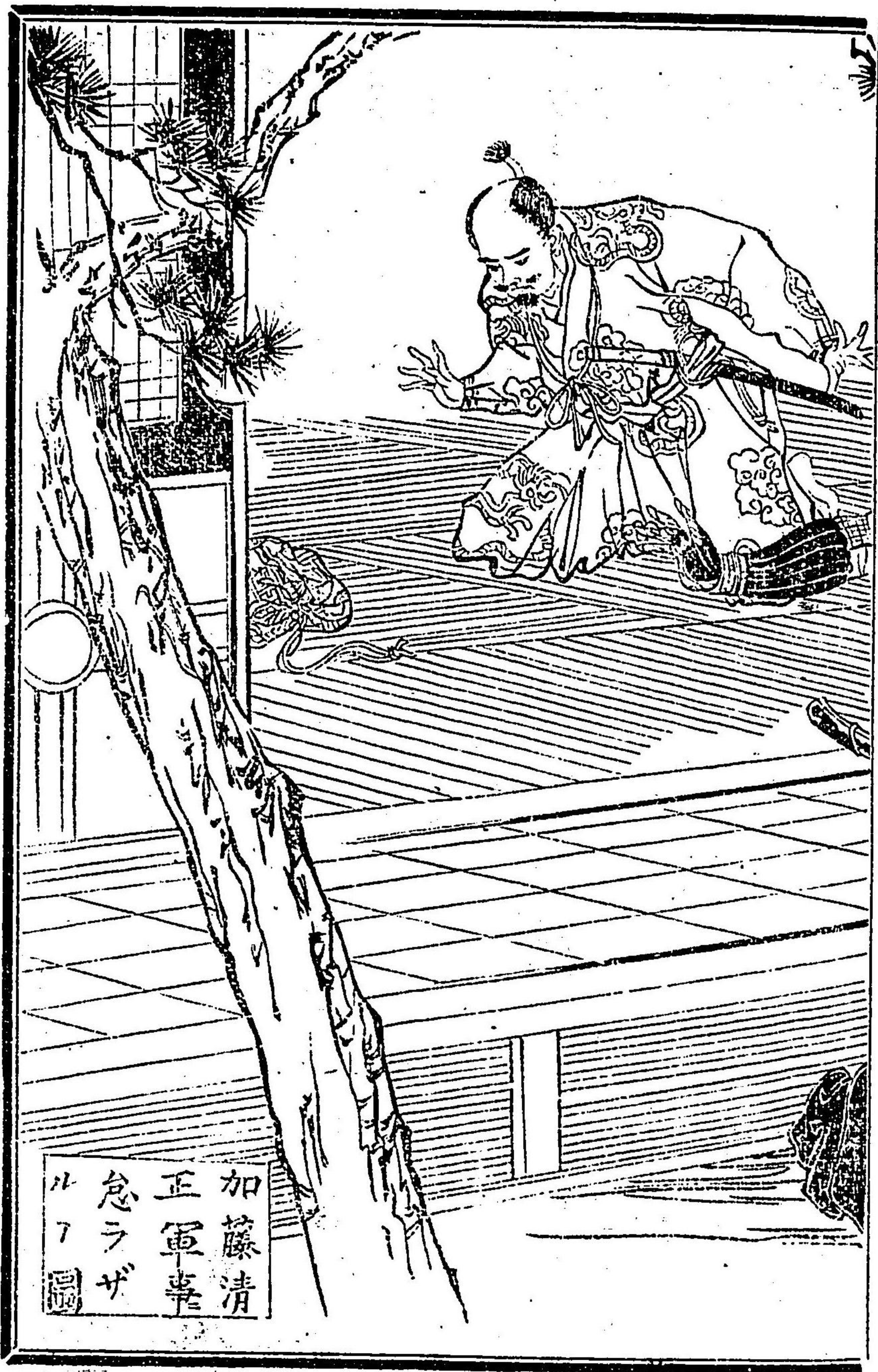
林子も銘と作られたりと云の一説あり

〔二百八十〕 文祿五年朝鮮よて泗川といふ處に城を構へたる時門脇狭間を垣見和泉守家純あげて切れど下知しけるを長曾我部元親みて人の胸わたりより腰あたりを當て切たるこそよけれどいふ和泉守下げたらば敵城内を覗ふべきといふ元親此門へ押寄至よく内をみるほどに城兵よりたらば一支もすべきやとて切ば敵の首の上を射べきかと笑ひけるぞ

〔二百八十一〕 慶長二年朝鮮の番兵船數百艘なら島に置て日本の軍船を防ぐ諸將番船を乗取べき評定有加藤左馬助嘉明目に餘る大軍を小勢をもて争か打勝べといはれしかひそかよ手の者ふ下知し五人十人船に乗番船のかたに漕向ふ嘉明法を背く者どもと押留よとて追々船を出されしがや、有て我押止すば止らじと云捨て船よ乗漕出す河合庄太夫同庄次郎萩野作右衛門かき縣の三助五人打乗て番船の中に押入たり三助船を何れと問正中の本船に着よと下知しやがて乗移る敵具勢ひに恐れ船底よ入て劍を抜鍔を揃へて待かけたるに嘉明少もためらはず飛込たれば從者なじかは残るべき續て飛入てなで切よして本船を乗取たれば諸將も追續き船と押出し來る既に鉄砲の藥よ火移り燒船と乗取る者多し河合庄次郎は十六才なるが飛入とて海に飛込溺死す佃次郎兵衛加藤權七郎勝れたる功名せり嘉明一人の武勇よて七月十六日白晝に押寄せ番船百二十艘一艘に五百人三百人乗組たると僅の士卒にて悉く海よ切沈めたるは古今に稀なる事どもな

り秀吉憤狀を興へ七萬二千石に増祿して十萬石を興へらる池田家の長臣池田河内の妻は嘉明の女よて河内が男伊賀は外孫なり伊賀若き時外祖父に武功の事と尋ねければ今は年老て過つる事皆忘れたりとのみいひて止めかゝ島の船軍の事を問に十五六才なる小姓の船に乗移る時矢に中り海に落て死したりき不便の至りなりと只此事を語りて他の事に及ざりしとぞ

〔二百八十二〕 太閤名護屋よわいして朝鮮の軍はあゝしからぬを怒り諸大將を集め今は秀吉自ら押渡るべし三十萬の軍勢を三手にして利家氏郷に先陣させ三道より打破り眞直に明朝に攻入るべし日本の事の徳川殿はせむ心にかゝる事なしいかよふと有ければ 東照宮聞し召利家氏郷よ向はせ給ひ人多き中より撰び出されて一方の大將たらん事而目よてころ候へ抑我等弓箭を取て年寄候かゝる時よ人の跡にかゝみ残りたらんは口惜き事なり必一方の先がけを承るべしと仰られけるに淺野禪正少 彌長政進み出て暫く候殿下此年月の御振廻むかしに替りしこそ候へ古狐の人替りたると存るなりと申も閑ぬに太閤大に怒りやあ秀吉が心に狐の入替りたる所請吃と申せ申損じなむ首打落さんものをとにらまをたるに長政らつとも騒がず長政の如き何十人の首刎られんも何條事の候べきもくよしなき軍起して朝鮮八道は中よ及よ日本六十餘州に父を討せ兄弟を失ひ夫に離れ子よ先立歡き悲しむ者滿たり夫に兵糧の運送相加はり六十餘州の内悉くあれ野となる今發向候ひなんには五畿七道盜賊發起せん事必然な



加藤清
正軍業
急ラザ
ル

り徳川殿いかも思召候とも争か是を防ぎ給ふべき愛を思し召て先陣とは仰候らん殿下むかしの御心ならずんは是ははの事など御心付のなかるべき是唯事よあらず一定古狐の人替りたるに候部き人の詞よ人とりむとする監を必人よとらるゝとは此事に候と憚る所なく申放ては太閤何よもせよ己が主よ斯雜言するころ奇怪なれとて飛かゝらんとま給ふを人々押隔たり長政はさらぬ体よて人々に色代して静に座を立て陣所に歸るかゝる所に肥後國に逆徒一揆を企つと聞ぬれば太閤大に驚き長政を召出し汝が嫡子左京大夫幸長罷向て切替ひべしと下知せられ本多中務大輔忠勝を添て肥後國へぞ向られける

山陽外史の評の云へることあり曰く嗚呼太閤として女直鞅鞞の間に生れしめて之に假すに年を以てせしめば則ち鳥が朱明の國を覆す者覺羅氏と待たざるを知らんやと評註者も亦思ふ秀吉果して三十萬の勢を起きて自ら朝鮮に渡り之を掃蕩して直ち明に入りて北京を襲はす或は日本六十州の冠賊雷動風起して遂に他人の據有する所とならんも亦測るべからずと雖ども明國を覆して四百餘州を一統なさんこと多く疑ひなき所にして且つ之に假す數年の星霜を以てせば東洋に一個の拿破侖を出し大明を本據として西方に荒出で歐亞大陸を席卷したらんも亦知るべからず孰れに致せ日本國は遠からず他人の據る所となりしものなれば秀吉と朝鮮を渡らしめて彼れが兵略と充分に施さしめば甚だ愉快として大になす所ありたるべきに

整に長政の諫め立てしぬるは更すくも遺憾のことなりけり嗚呼

〔二百八十三〕 朝鮮にて何れの所の事ふや廣き野に道ありて向ふは山の麓なる大穴を構へ射手を伏於て行かるゝ日本人餘多射殺しけり黒田家の兵井口與市が從者山崎喜藏いで參て見申さんといひもわへず走り行井口も馬より下り走入ければ山崎射手三人斬伏る井口續て功入追散す井口恩賞に望候はずわはれ朱柄の鎗免され候へといふ物しくも寄合て武功度重るか或は一日の中に首七ツ取時は朱柄の鎗もたすると申事の候輕々しく許しがたき事にやといふ井口是を聞其後一日に首七ツ取て朱柄の鎗もたせけり

〔二百八十五〕 朝鮮にて清正全州に在る時釜山海より十里餘りの程日本の軍兵城々を守て七八里或は十里計にて伴の城を設けたり清正を太閤呼れしかば日本に歸るとて打立れけり戸田民部少輔高政密隅よ有て清正と舊友なればもてなすべき用意して待れしが士大將眞鍋五郎左衛門神谷平右衛門と途中まで迎とと四里計出れば清正の先陣見ゆ其頃は四方に敵なく無事なり二人とも革羽織袴よて出たるに清正の軍兵皆物具して簞食付け旗よはり立磨筒の鐵砲五百挺眞先よ押して鐵砲に火繩をはさみ火をつけたり清正は溜塗の物具銀の長烏帽子の冑の緒をしり頬當脚當して草鞋をはき銀の丸本馬關の馬印よ自ら背にさし月毛の馬に白泡かませて來れり二人馬より下て迎へけるを清正見て民部よりの迎の使者骨折なり早くそれへ着陣せん殊外に人々垢付ぬ風

呂をたて下にまで湯と賜はりなば大慶ならん此よし疾歸りて申されよと詞を懸らる二人承り候
とて馬に乘急を歸りてあくといふ程なく清正着陣せられ屏重門より入椽よて民部近習の士二人
寄て清正のさ、れし馬蘭を取て旗籠に立る清正椽に上らるればよりて草鞋の紐を解脚當の緒と
解く時清正腰よ付たる緋雲子の袋を座敷へ投入たるよりと落る米三升計に味附銀錢三百文入
られたり馬印をさそに腰のつり合是にて能となり民部驚きて十里近きに敵もなくていかなる事
とぞいへば清正ものは大事と心得たるをよき由斷大敵といふ事有我物具せず身を安じたくは
もへども左あらんには皆懈るべし夫故に身は苦しけれども懈なき爲にかくはせし也萬一の事
あらん時懈て事を仕誤るならば今までの武功虚名にならむ事と慮ればなり凡上と學ぶ下と
て大將甘ければ下は大に怠るものなれば常々陣法を嚴よする事候上一人の心下萬民に通ずると
かやいふ事の有よと答へられけると

〔二百八十五〕 朝鮮より虎と象とを引來る象は柔馴のものなれを細き綱にて引けり虎には鐵の
鎖を付左右より七八人取付て引來る朝鮮渡海の諸將一旦名護屋に歸集られし時彼虎は大力の
男あまた左右に鎖をひかへどつとていつてかけ出し幾らも並居たる中を通りけるに人みな驚きた
るに清正膝立直し拳を握り臂を張て虎よきつとにらまれしに虎もしばし立じまゝりて清正をに
らみて打過ぬ嘉明は壁よりかゝりて居眠して在しが虎通り過たる後も初にことならずや、有

て目を開き何事に騒がれ候を虎を引通れる故にやといと辭にいはれけり

〔二百八十六〕 慶長二年二月清正再び朝鮮よ渡られしに船の着たる處は北地にして寒風烈し土
民ども土穴を穿ちて其中よ住居しに日本の軍兵押渡ると聞逃走りしかば清正の兵共土穴に入て
臥す清正漫よ民と殺さず非道と嚴に戒しかば後には商人も物よ馬に付て來賣しに寒氣以外の
よ甚しくて馬の毛につらゝの下りてからめきて鳴る聲土穴の中に聞ぬけるとかや王元美が詩
よ風劈面發裂凍精髮有聲といへるおもひ合されぬ軍兵晝は終日風砂の中に立夜は
土穴よ臥しける故皆雀目に成しを土民教て鳶を食して愈けるとぞ

〔二百八十七〕 朝鮮にて何れの處の戦もや清正の士大將森本義太夫流矢矢臂を射させたり斯る
處に庄林隼人馳來るを見ていかに手負たり此矢抜て給これといふ庄林馬より下て抜て捨れば
森本さても快き事かなといひもあへず馬にひらりと打乗一鞭打つとかけ出し庄林に續かれ
よと云捨て敵よ逢首を得たり二人とも清正の士大將大剛の者なり森本が鎗は白鳥毛と鞘とし庄
林は黒鳥毛を以て鞘とし世の人黒鳥毛白鳥毛といひあへり

〔二百八十八〕 朝鮮より諸將連判の書を大間よ奉る時清正の花押殊に筆畫のさなりや、ひま
りしかば福島正則冷笑ひて病重くなりて遺言の時の状あしからんといはれしに清正我はさは存
せず戰場に屍をさらすともきたなく逝て壽の上よ死んと思ひ設けず候されと遺言状何かを候

べきと答られしかば正則詞なかりけり

〔二百八十九〕 晋州の城と攻らる、時黒田長政の士大將後藤又兵衛基次龜の甲といふ車を作り出せり厚板の箱を拵へ内は強き切梁を設け石と落しかけても箱の権けざる手當をし箱の内へ後藤入て棒の棹を指車と箱に仕かけ進退自由と廻る様にして城際へ押詰石垣を崩して乗入けり

〔二百九十〕 慶長二年日本の軍復渡海し黒田長政の先陣栗山備後利安後藤又兵衛基次衣笠因幡母里但馬黒田宗右衛門以下三千計和寧館全義館に陣せし處の明の援兵押寄る其よし長政は告よとて書簡を書けるを利安見て敵か、り候間早々よ救はせ給へといふ詞やわる書改めよ敵押寄せ候先陣は少も心を勞せらる、事有べからずとこと申べけれどて直させて告たりけり斯て敵寄來れば利安先陣して打破りたり長政陣とひとしく打出てもみにもんでかけ來られしに敵早議龍臺をさして敗北しけり先利安が陣所に入て何とて軍としたるやといひも終らぬに利安目を見出し押寄る敵に辭退する事や候と申す長政汝等討死せば我生がひなしと思ひてかくといひしなり何とて疾告來らざるやといはれしかば傍より告申す書簡の詞と書改るとて遅かりきと申す利安夫は臣が改めさせて候子細はしかくなりたとへ疾救はせ候へと申すと、行程隔りたれば無益あり敵は四萬計も候はん味方必死と思ひ定て軍すへきよて候たとへ屍と異國の野原にさらすとも名は後の世も傳はるべし黒田が先陣の剛の者ども太敵に取巻れ、深く討死したりと言れな

ん又とく救はせ候へと申さんには後日に黒田が者ども主君の援ひを待かね皆打殺されたりと人に笑はるべし是日本の武名と穢すに候はずや弓箭取身はかりにも名こそ惜候へ且は今生の暇乞と存じて告奉る書簡殊更に改め申べと申ければ長政大に悦ばれけり

〔二百九十一〕 利安若き時は善助といひ中頃は四郎兵衛といふ長政に筑前と賜りし時名島の城に長政居て左右良の城ふ利安を置れけり祿一萬五千石極めて儉なる人なり人の衣服の美麗なるを見ては褒晴といふ事の有といひ教へ又價高く馬と購ふ者あれをさばかりの馬も二疋の用をばなごじ何とて無益の費をるぞと戒めけりされども事に臨て金銀と惜ひの心なし従者をいたり憐み貧乏を助る事尋常の人に大に踰まされり

日根野備中守朝鮮の使としてゆく時黒田如水に銀をかり歸りて後如水のもとに行しに如水近習の士に先に人の贈りし鯛を三ツにしてその骨を煮てもてなし候へといひしかば客番の甚しき事よとかもひ居たり頓て肴を出し酒宴有し後後借たる銀百枚取出し返せしよ如水はじめより返し給はらんと心の心にてかし候はす異國に渡らるゝよより懇れしかば送り參らせしなりとて受取ずして止め栗山も如水の風にならひたるにや君臣どもに頼母しき事ぞかし栗山の戒をもて惣て世の有様を見るに士といはるゝ人の体こそ無下よくちをしけれ多くは美衣を着かざり明暮酒宴して馬具武具やうの物いかに有やらんしらす多くは商家も典當し或は茶の湯よ

とて古びかげたる器の何の用もなき物も數金と費し博奕とてわらぬ戯に夜を明し斯ばかり無二にいひかはしけん人の黄金を奪ひて其人の赤裸になるも顧す是はとも盜賊の心にも劣りはてたる事をるべし扱物がたりするに聞ば多くは女色のたはふれごとのみにて禮義廉恥は露ばありもしらす又或は儉約にことよせて利倍の事よの錐刀の末をも争ひ人を欺きて已が得わらん事を願ひ或は奢侈にふけりて用度よ苦しみ商人に向て首をたれ其人の恩を得て金銀をかり是を恥ともせず門を出れば從者あまた召具し我の門地のしかくなりとて途中にて人といかめして追拂ひしめ家人を飢ゝめて購ひたる價をやらす大國の君も亦大かた斯の如し不仁不義の行となして世の人の誹笑も知らず世界は皆のくなるよと思へば風俗の衰へ無下に口惜事なり

〔二百九十二〕 竹中重治曰分に過たる價を以て馬を購ふべから老其馬ふ乗たる時能き敵を見かけ追詰て飛下んと思ふ歟或は又鎗と合せんと下り立時馬副の人の續かされば此馬人の物に成るべし又かゝる馬は得がたしと思ふ心出て期と延す事有此能馬ゆゑに却て名と失ふ事もあるべしかせ士は金十兩にて馬を購んとするに五兩にて求むべしをしげもなく飛下り乗放ちて能き時は捨もすべしさて五兩の金にて又馬を求むべし馬にかざらず此心得有べきなり身をも義より捨るぞかしまして財寶をや塵芥とも思はぬ心掛常に有べきこと士の本意なれとぞ

北條家の庭を預りし諏訪部といふ者度々功名あり何れの時の軍もや勝田八左衛門といふ者と二人物見よ出る敵不意に出てつけしたふ二騎引取る時諏訪部は馬を預る故勝たる馬も乗たる故乗切で馳踊る勝田の後れたり敵追詰たれば下立て相戦ふ味方助來れば勝田打伏られ頭半切れたり敵引取たるに勝田助らじと思ふ勝田手よて頭を上げいまた死せざるに人々は棄て歸るやといふを聞いて助けて歸りけり勝田も度々の功名あり後松平右衛門太夫よ仕へけり○竹中が論尤士たる者の知べき處なり弓箭取身は朝夕に軍旅の事を論せん事あらまほしき事なりさらすい必天の冥加ふ盡べきなり戰國に生れし人は其事よ臨て功有て祿を得たるよてあそあれ今泰平の時に生れ父祖の蔭にて祿を世々にするは天より士の職を命せられたるなり天より命せられたる其任を忘れなんには天の冥加に盡ん事必定なり又天下の四民の上において下と鎮る職おろそかにせんを口惜かるべき事にこそ

竹中重治の此論一理なきにあらねども是れ故に其害の點のみを擧げたるよ過ぎざるのみ凡そ天下の事物一利あるものは必ず一害あり一得あるものは必ず一失ありて全利全得なるものあるなければ其害の點を擧げんとせば何事か其害なからん又何物か其失なからん其要唯利と害とを併擧て其分量輕重を比較て其利多くして害少なきものを利となし其失大よして得小なるものと失となすよあるのみ駿馬に乗る者或は重治の擧ぐる所の如き害あるべしと雖ども駿